

大文字遺跡（柏寺廃寺）

市道拡幅工事に伴う確認調査

2009年3月

岡山県総社市教育委員会

大文字遺跡（柏寺廃寺）

市道拡幅工事に伴う確認調査

2009年3月

岡山県総社市教育委員会

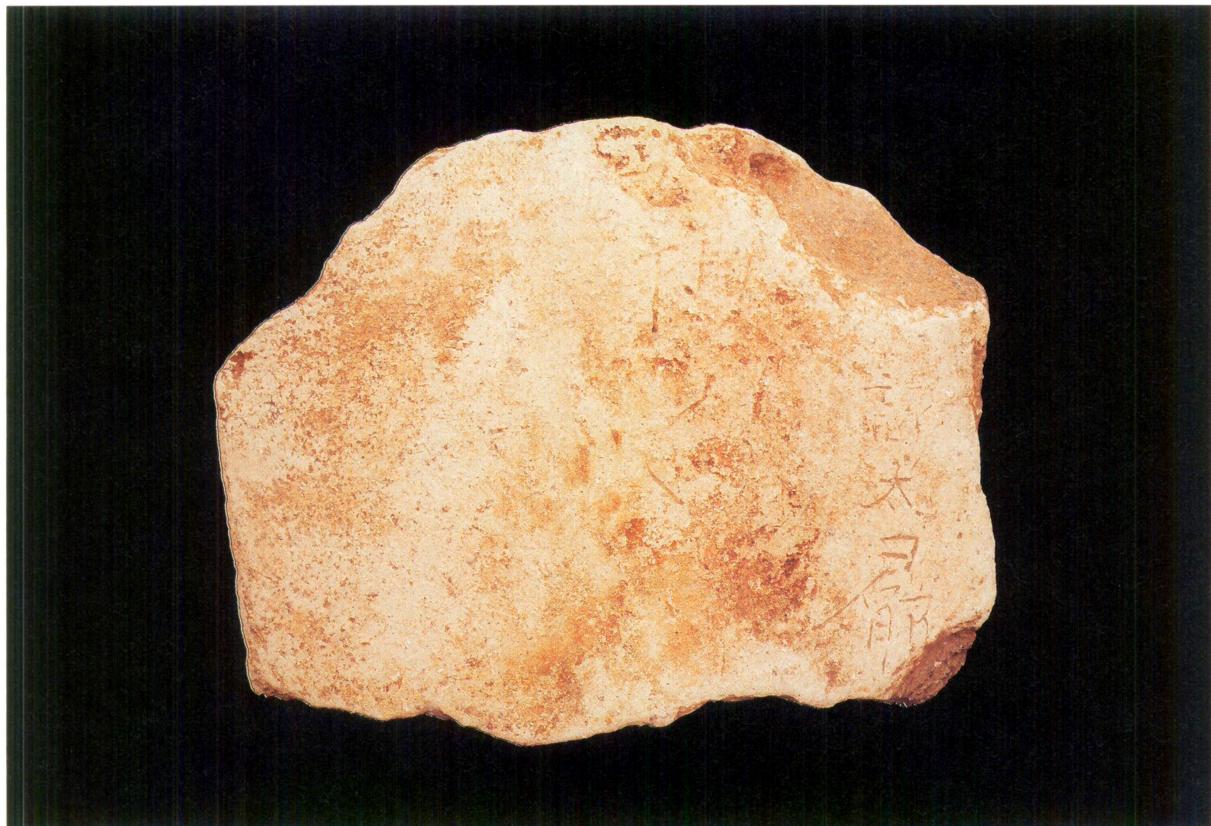


1. 総社平野の主要遺跡



2. 出土遺物

巻頭カラー図版2



1. 文字瓦①



2. 文字瓦②

序

岡山県南部のほぼ中央に位置する総社市は、瀬戸内海特有の温暖な気候に恵まれ、地震や台風などによる災害も少なく、晴天に恵まれた「晴れの国岡山」を代表する地域であります。

居住に適し、古くから人々の活動が活発であったこの地は、古代において「吉備」と称され、その中心地域でもありました。

市内の「吉備路風土記の丘」には、こうもり塚古墳や備中国分寺をはじめとする顕著な遺跡が昔日の栄華を物語ると共に、北の吉備路として親しまれる市内奥坂、黒尾地区には古代山城の鬼ノ城が位置し、史跡整備事業によりかつての威容が復元されつつあります。

こうした文化財の宝庫である総社平野の中央には、吉備氏一族の賀夜氏が創建したとされる柏寺廃寺が所在します。今回、この柏寺廃寺の北東部において市道の拡幅工事が計画されましたが、生活道路として現状保存が困難であり小規模な工事のため、確認調査を実施し記録保存の措置をとることになりました。

調査では7～8世紀代の遺構・遺物が検出され、特に柏寺廃寺で使用された瓦が多数出土しました。その中には岡山県下で最古の文字瓦も出土しており注目されます。本書はその調査成果を収めたもので、今後の文化財の保護と活用、並びに歴史研究の一助になることができれば幸甚と存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりまして岡山県教育委員会ならびに地元の関係各位から温かいご理解とご協力をいただきました。末筆ながら記して厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

総社市教育委員会

教育長　桑田　交三

例　言

1. 本書は諸上南溝手線拡幅工事に伴い、平成20年度に総社市教育委員会が実施した確認調査の報告書である。

2. 確認調査は平成20年4月9日から16日までに実施し、文化課文化財係職員　武田恭彰と松尾洋平が担当し、本書の執筆と編集を松尾が行った。

3. 本書に関わる遺物について、解釈・鑑定および分析を下記の諸氏、機関に依頼し有益な教示を得ると共に報文をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。

文字瓦釀読　狩野　久（元京都橘女子大学教授）

遺物付着物の成分分析　山田卓司（元興寺文化財研究所）

4. 出土遺物の洗浄・復元は田中富子・犬飼真弓（埋蔵文化財学習の館）が行った。また、遺物の実測と拓本は松尾・田中・犬飼が行い、トレースは松尾が行った。

5. 本書で使用した地形図は国土地理院発行の50,000分の1の地図を複製したものであり、その他は総社市発行の地形図などを使用している。

6. 本書では掲載した土器実測図の内、中心線の左右に白抜きのあるものは復元実測であることを示し、古代土器の器形の名称については基本的に奈良文化財研究所の用例に準じている。

7. 本書における土層の色調については『新版標準土色帖』（農林水産省農林技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）と、肉眼観察に基づく色調の二通りを表記している。

8. 掲載遺物番号については土器、瓦（土製品）、金属製品（鉄滓含）に分けて通し番号を付け、土器以外については次の略号を番号の前に付している。

瓦（土製品）：K

金属製品（鉄滓含）：M

9. 本書に関連する出土遺物および図面、写真などは全て総社市埋蔵文化財学習の館に保管している。

10. 本書で用いた時代区分は一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。

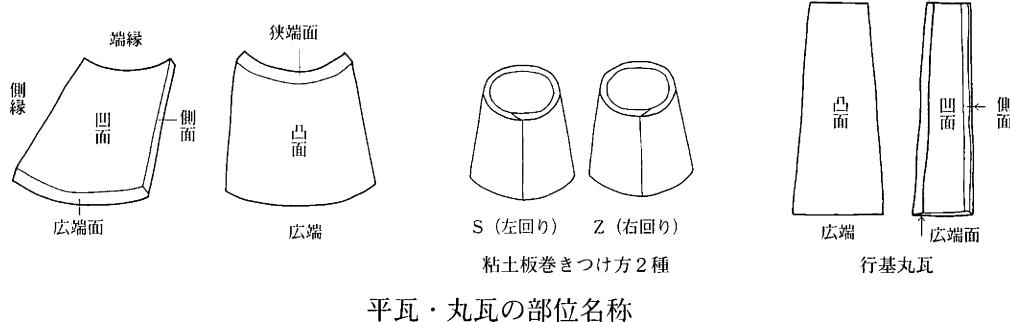
11. 遺跡の名称は、『改訂岡山県遺跡地図』では大文字遺跡の中に「賀夜廃寺」を含めており、本書でも寺域の範囲が明確でなかった経緯から、寺域外も含めて大文字遺跡とした。なお、調査の結果、明らかに柏寺廃寺の寺域を含むことが判明したためサブタイトルとして岡山県指定史跡名を採り（柏寺廃寺）を付した。

12. 平瓦と丸瓦の部位名称は下記の文献に従い、図を一部引用・改変。

佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号、日本考古学学会、昭和47年

大脇潔「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集IX 奈良国立文化財研究所学報第49冊』

奈良国立文化財研究所、1991年



目 次

序 文

例 言

第Ⅰ章 確認調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の組織	2
第3節 瓦の分類について	3

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境 5

第Ⅲ章 大文字遺跡（柏寺廃寺）の確認調査

第1節 調査の概要	11
第2節 検出遺構と遺物	12
第3節 瓦廃棄土壙の出土遺物	27
第4節 瓦廃棄土壙出土の文字瓦	48

第Ⅳ章 柏寺廃寺出土の文字瓦について（狩野 久） 52

第Ⅴ章 まとめ

第1節 柏寺廃寺と周辺遺跡	55
第2節 出土瓦について	58

第VI章 自然科学分析

大文字遺跡（柏寺廃寺）ほか遺物付着物の成分分析について	64
-----------------------------------	----

図 目 次

<p>第Ⅰ章 確認調査の経緯</p> <p>第1図 調査地位置図 (S=1/5,000) 1</p> <p>第Ⅱ章 地理的・歴史的環境</p> <p>第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000) 6</p> <p>第3図 三須中所遺跡出土「賀夜」銘墨書土師器 8</p> <p>第Ⅲ章 大文字遺跡（栢寺廃寺）の確認調査</p> <p>第4図 地区割り図 (S=1/1,000) 11</p> <p>第5図 調査地 平・断面図 (S=1/100) 13・14</p> <p>第6図 低位部1 出土遺物1 (S=1/4) 15</p> <p>第7図 低位部1 出土遺物2 (S=1/4・1/5) 16</p> <p>第8図 低位部1 出土遺物3 (S=1/5) 17</p> <p>第9図 区画溝 出土遺物1 (S=1/2・1/4) 19</p> <p>第10図 区画溝 出土遺物2 (S=1/5) 20</p> <p>第11図 区画溝 出土遺物3 (S=1/5) 22</p> <p>第12図 区画溝 出土遺物4 (S=1/5) 23</p> <p>第13図 区画溝と土壙状炭窯1断面図 (S=1/30) 24</p> <p>第14図 土壙状炭窯1・2 平・断面図 (S=1/30) 24</p> <p>第15図 出土遺物 (S=1/4・1/5・1/2) 24</p> <p>第16図 調査区東半の出土遺物 (S=1/4) 25</p> <p>第17図 調査区東半 道路北側の出土遺物 (S=1/3・1/4) 26</p> <p>第18図 瓦廃棄土壙 出土遺物1 (S=1/5) 28</p> <p>第19図 瓦当部と丸瓦部の接合関係模式図 (S=1/6) 29</p> <p>第20図 瓦廃棄土壙 出土遺物2 軒丸瓦・軒平瓦 (S=1/4) 30</p> <p>第21図 瓦廃棄土壙 出土遺物3 軒平瓦 (S=1/5) 31</p> <p>第22図 瓦廃棄土壙 出土遺物4 軒平瓦 (S=1/5) 32</p> <p>第23図 瓦廃棄土壙 出土遺物5 軒平瓦 (S=1/5) 33</p> <p>第24図 瓦廃棄土壙 出土遺物6 (S=1/5) 35</p> <p>第25図 瓦廃棄土壙 出土遺物7 (S=1/5) 36</p> <p>第26図 瓦廃棄土壙 出土遺物8 (S=1/5) 37</p> <p>第27図 瓦廃棄土壙 出土遺物9 (S=1/5) 38</p> <p>第28図 瓦廃棄土壙 出土遺物10 (S=1/5) 39</p> <p>第29図 瓦廃棄土壙 出土遺物11 (S=1/5) 41</p>	<p>第30図 瓦廃棄土壙 出土遺物12 (S=1/5) 42</p> <p>第31図 瓦廃棄土壙 出土遺物13 (S=1/5) 43</p> <p>第32図 瓦廃棄土壙 出土遺物14 (S=1/5) 44</p> <p>第33図 瓦廃棄土壙 出土遺物15 (S=1/5) 45</p> <p>第34図 瓦廃棄土壙 出土遺物16 (S=1/5) 46</p> <p>第35図 瓦廃棄土壙 出土遺物17 (S=1/5) 47</p> <p>第36図 文字瓦① (S=1/2・1/4) 49</p> <p>第37図 文字瓦② (S=1/2・1/4) 50</p> <p>第V章 まとめ</p> <p>第38図 栢寺廃寺跡周辺地籍図・寺域推定範囲 註1より引用 (S=1/2,000) 56</p> <p>第39図 東限の寺域推定線と区画溝 (S=1/1,000) 56</p> <p>第40図 栢寺廃寺と周辺遺跡 (S=1/10,000) 57</p> <p>第41図 瓦の様相1 (S=1/5) 59</p> <p>第42図 瓦の様相2 (S=1/5) 60</p> <p>第43図 各種タタキ一覧 (S=1/2) 62</p> <p>第VI章 自然科学分析</p> <p>第44図 大文字遺跡出土丸瓦のXRFスペクトル (左図：赤色部分、右図：地部分) 66</p> <p>第45図 大文字遺跡出土高坏のXRFスペクトル (左図：黒色部分、右図：地部分) 67</p> <p>第46図 大文字遺跡出土高坏のATR-FTIRスペクトル 67</p> <p>第47図 大文字遺跡出土坏BのXRFスペクトル (左図：黒色部分、右図：地部分) 68</p> <p>第48図 大文字遺跡出土坏BのATR-FTIRスペクトル 68</p> <p>第49図 窭木遺跡出土坏BのXRFスペクトル (左図：黒色部分、右図：地部分) 69</p> <p>第50図 窭木遺跡出土坏BのATR-FTIRスペクトル 69</p>
---	---

巻頭カラー目次

卷頭カラー図版 1	卷頭カラー図版 2
1. 総社平野の主要遺跡	1. 文字瓦①
2. 出土遺物	2. 文字瓦②

図版目次

第1図版 工事終了後の調査地(東から).....	2	第21図版 大文字遺跡出土坏B.....	65
第2図版 宮山墳墓群.....	7	第22図版 窭木遺跡出土坏B.....	65
第3図版 作山古墳ほか.....	7	第23図版 大文字遺跡出土丸瓦の赤色部分.....	66
第4図版 赤坂龍塚古墳.....	7	第24図版 大文字遺跡出土高坏の黒色部分.....	67
第5図版 秦原廃寺 塔心礎.....	8	第25図版 大文字遺跡出土坏Bの黒色部分.....	68
第6図版 栢寺廃寺.....	8	第26図版 窭木遺跡出土坏Bの黒色部分.....	69
第7図版 鬼ノ城.....	8	第27図版 調査状況(東から).....	76
第8図版 瓦廃棄土壙(北から).....	13	第28図版 瓦廃棄土壙断面(北から).....	76
第9図版 中世土壙(北から).....	13	第29図版 区画溝(南から).....	76
第10図版 磁盤石のある柱穴(北から).....	13	第30図版 区画溝瓦出土状況(南東から).....	76
第11図版 竪穴住居(北から).....	14	第31図版 土壙状炭窯 1(南から).....	76
第12図版 柱穴(北から).....	14	第32図版 土壙状炭窯 1断面(南から).....	76
第13図版 土壙状炭窯 1(北から).....	24	第33図版 土壙状炭窯 2(西から).....	76
第14図版 区画溝(南から).....	24	第34図版 土壙状炭窯 3断面(北から).....	76
第15図版 鉄釘.....	24	第35図版 低位部 1 出土遺物.....	77
第16図版 塙.....	26	第36図版 区画溝 出土遺物 1	77
第17図版 文字瓦①拡大写真.....	49	第37図版 区画溝 出土遺物 2	78
第18図版 文字瓦②拡大写真.....	50	第38図版 瓦廃棄土壙 出土遺物 1	79
第19図版 大文字遺跡出土丸瓦のXRF測定箇所.....	65	第39図版 瓦廃棄土壙 出土遺物 2	80
第20図版 大文字遺跡出土高坏.....	65	第40図版 瓦廃棄土壙 出土遺物 3	81

表目次

表1 栢寺廃寺 調査と整備の経過一覧.....	2	表8 土器観察表 1	70
表2 葛原分類と年代観.....	3・4	表9 土器観察表 2	71
表3 側面と端面の面取り.....	4	表10 瓦類観察表 1	72
表4 大文字遺跡出土丸瓦のXRF結果.....	66	表11 瓦類観察表 2	73
表5 大文字遺跡出土高坏のXRF結果.....	67	表12 瓦類観察表 3	74
表6 大文字遺跡出土坏BのXRF結果.....	68	表13 瓦類観察表 4	75
表7 窭木遺跡出土坏BのXRF結果.....	69		

第Ⅰ章 確認調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

調査地は南溝手292-2に所在し字名を栢寺元と呼ぶ。国道180号線から北へ220m離れ、栢寺廃寺の東に隣接した水田で標高は9.3mを測り、栢寺廃寺と同一の微高地上に立地する。

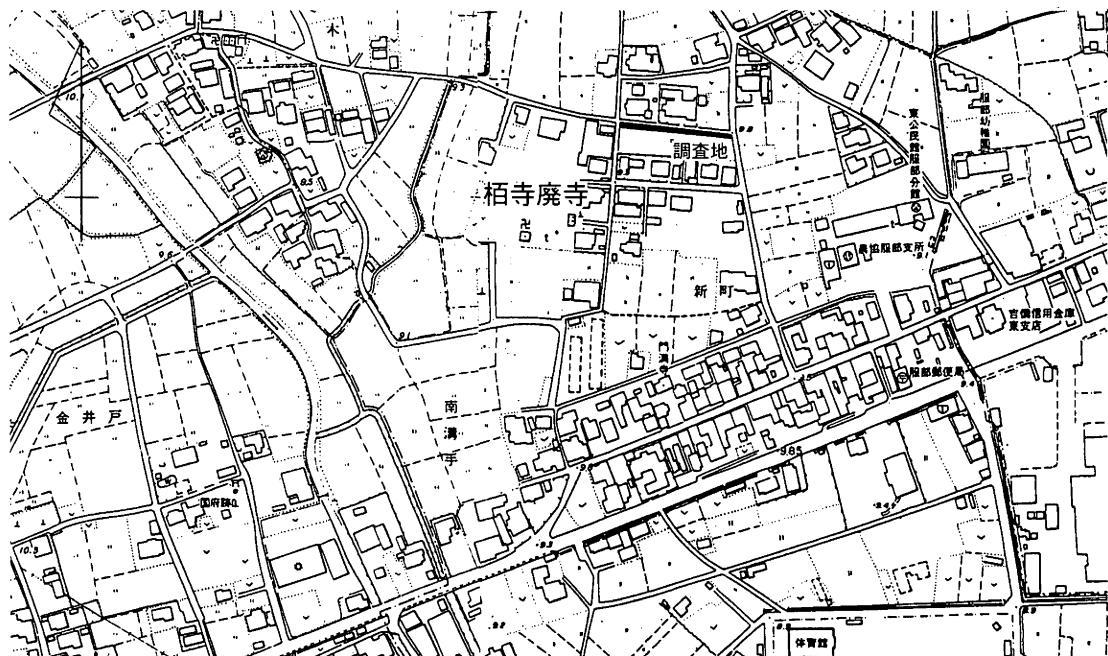
当該地では市道諸上南溝手線拡幅工事に伴い、長さ約73mの道路（現況幅約2m）を約4mに拡幅し、路面舗装を施工することが予定された。既存の道路を残し拡幅部分のみの造成を行うことから擁壁の設置が必要であり、田面からG.L.-50cm、底部幅1.4m前後を掘削する必要があった。

しかしながら、栢寺廃寺と近接し同一の微高地に立地することから、遺構・遺物の存在が十分に予測できるため、文化課は当該地が埋蔵文化財包蔵地にあり、文化財保護法の適用を受け記録保存による事前の行政的措置が必要な旨を土木課に連絡した。

両者の連絡、協議を重ねた結果、生活道路として現状保存が困難であることと、工事が小規模なためやむなく工事中に確認調査を実施することになり、平成20年4月初旬から調査に着手することで合意に達した。

確認調査の着手に先立ち、平成20年4月8日付で土木課から岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。調査終了後は平成20年4月22日付で文化財保護法第99条の規定により、埋蔵文化財確認調査の報告を総社市教育委員会教育長から岡山県教育委員会教育長宛に提出している。

以上の経緯を基に、市道拡幅に伴う確認調査は平成20年4月9日から4月16日にかけて実施し、調査面積は約70m²であった。



第1図 調査地位置図 (S=1/5,000)

第2節 調査の組織

発掘調査組織

総社市教育委員会

教育長 来田交三

教育次長 加藤信二

文化課長 荒木泰行

主幹 谷山雅彦（調整担当）

課長補佐 武田恭彰（調査担当）

主任 松尾洋平（調査、報告担当）

主事 佐野 功（庶務担当）

埋蔵文化財学習の館

館長 村上幸雄

臨時職員 田中富子、犬飼真弓

発掘調査は岡山県教育委員会の指導、助言のもとに実施すると共に、下記の各位からもご指導、助言をいただいた。深く謝意を表します。（順不同、敬称略）

狩野 久、亀田修一、古市 晃、岡本寛久、草原孝典、水田貴士、池上 博、有賀祐史

表1 柏寺廃寺 調査と整備の経過一覧

経過年	概要
昭和52年（1977）	岡山県教育委員会確認調査（第1次）
昭和53年（1978）	岡山県教育委員会発掘調査（第2次）
昭和62年（1987）4月3日	岡山県重要文化財指定
昭和63年（1988）3月17日 5～6月	総社市が旧門満寺境内を取得 史跡整備を目的に確認調査
平成元年（1989）	総社市が進入路整備
平成2年（1990）	総社市が周辺整備
平成3年（1991）	総社市が塔基壇の確認調査 塔基壇の史跡整備
平成20年（2008）	総社市が市道拡幅工事に伴う確認調査



第1図版 工事終了後の調査地（東から）

第3節 瓦の分類について

柏寺廃寺の古代瓦については、岡本寛久氏が『柏寺廃寺緊急発掘調査報告書』の中で、軒丸瓦と軒平瓦を分類し、その後、葛原克人氏が増加資料を含め『総社市史 考古資料編』で新たな分類を示された。表2は葛原分類を基に軒瓦の属性を筆者が加筆し、まとめたものである。今回の報告では基本的に葛原分類をもとに説明を行いたいが、整理作業により新たに問題点が浮上したため、次のとおり対処することにした。

1、今回出土した瓦は圧倒的に丸瓦と平瓦が多いため、製作技法と凸面の調整、さらに側面と端面の調整（面取り）によって属性を抽出し、巻末の瓦類観察表に表記した。丸瓦と平瓦の年代観は、これらの属性を基に軒瓦の年代観と対比させている。なお、製作技法による分類は今後の調査の進展により追加、補正されるべき性格のものである。

2、7世紀後半の軒瓦は、古相と新相に分けられる。軒丸瓦一～三類と軒平瓦二類は薄手の作りで、精良な胎土を持ち焼成不良の瓦が多い。軒丸瓦二類の丸瓦部には凸面に3条の沈線が施されており、小片ながら丸瓦K1・K37・K38と平瓦K2にも施文されていることから、同時期の所産と考えられる。しかし、丸瓦と平瓦では軒瓦のように細分することは困難なため、これらを包括して7世紀後半の「古相」として表記した。

次に今回多数の出土をみた丸瓦と平瓦は、軒丸瓦四類と軒平瓦一類・三類に組み合わさり「古相」に後続するものである。厚手の作りで胎土には砂粒を多く含み、軟質焼成により灰白色系の瓦が多い。しかも文字瓦①の刻書より「評」制下の所産であることは確実であり、「古相」の瓦群に後続する意味で「新相」と表記した。

3、軒平瓦一類と三類は7世紀後半新相の軒平瓦で、形式の違いにすぎず軒丸瓦四類と組み合わさる。重弧文軒平瓦は瓦当部に1条と2条の細い沈線を引いたものが出土しているが、瓦の製作技法や胎土には差異はなく、文様のバラエティーと考えられるため一類に包括した。

軒平瓦三類は顎面施文軒平瓦として分類しているため、新出の顎面施文軒平瓦K57も三類としてあつかい細分はしていない。

表2 葛原分類と年代観

軒丸瓦

類型		特徴	年代観
一類	単弁八弁蓮花文軒丸瓦	創建期の軒丸瓦、百濟系、薄手、胎土精良	7世紀中葉
二類	単弁八弁蓮花文軒丸瓦	外区の外縁下の段に細い圈線あり 丸瓦部に3条の沈線あり 備後寺町廃寺S I a式と同范、薄手、胎土精良	7世紀第3四半期
三類	複弁八弁蓮花文軒丸瓦	複弁、外向鋸歯文、薄手、胎土精良	7世紀第4四半期
四類	複弁八弁蓮花文軒丸瓦	別名 備中式軒丸瓦、厚手、胎土やや粗	7世紀第4四半期
五類	単弁十六弁蓮花文軒丸瓦	平城宮6225型式亞式、圈線3重	8世紀中葉以降
六類	複弁八弁蓮花文軒丸瓦	外区に線鋸歯文と圈線1をめぐらす	8世紀末葉
七類	単弁八弁蓮花文軒丸瓦	平安京朝堂院所用瓦と類似	平安時代中期

軒平瓦

類型		特徴	年代観
一類	重弧文軒平瓦	1～2沈線、厚手、胎土やや粗、桶巻作り	7世紀第4四半期
二類	重弧文軒平瓦	1沈線、瓦当部下端に段顎削り出し、薄手、胎土精良、桶巻作り	7世紀後半
三類	重弧文軒平瓦	1沈線、凸面に顎面施文、厚手、胎土やや粗、桶巻作り	7世紀第4四半期
四類	均整唐草文軒平瓦	平城宮6663型式亜式、一枚作り	8世紀中葉～
五類	均整唐草文軒平瓦	右第3単位の第2子葉を欠く	8世紀中葉～
六類	均整唐草文軒平瓦	右第2単位の第2子葉の先端が丸い	8世紀中葉～

製作技法による分類

- I類 粘土板 模骨巻き（丸瓦）
 粘土板 桶巻き（平瓦）
- II類 粘土紐 模骨巻き（丸瓦）
 粘土紐 桶巻き（平瓦）
- III類 一枚作り

一次調整の叩きの痕跡

- 1類 斜格子
 2類 正格子
 3類 平行タタキ
 4類 縄タタキ（縦方向）
 5類 縄タタキ（横・斜方向）

二次調整などの痕跡

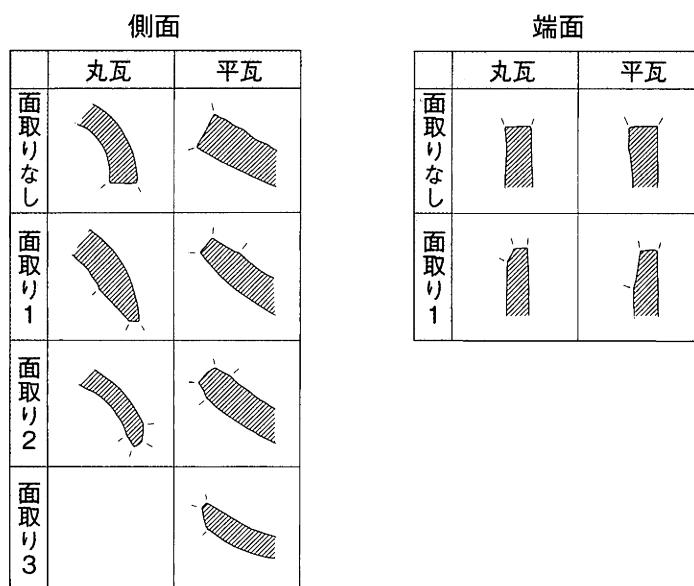
- A類 ヨコナデ

※製作技法による分類は『史跡土塔－遺構編－』堺市教育委員会、2007年、【製作技法】別表②P2をもとに作成。

用語は前掲の佐原論文・大脇論文に拠っている。

調整の種類は「古代の瓦について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』214を参考にした。

表3 側面と端面の面取り



第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

総社平野は東を足守川、西を高梁川によって画され、北は吉備高原南端の山地に、南は都窪丘陵などの低丘陵地帯群に挟まれた東西約8km、南北約5kmの沖積平野である。

岡山三大河川の一つである高梁川は影谷川や日羽谷川、そして新本川などの支流と合流して市域の北西から南東方向に貫流している。倉敷市酒津方面へ流れる本流とは別に、かつて井尻野付近から分流した旧河道（古高梁川）は西から東へ平野を流走し、市域東辺を流れる足守川と合して「吉備の穴海」へと注いでいたのである。河川の浸食、運搬、堆積作用を繰り返し造出された総社平野は、幾筋もの古高梁川の乱流によって形成され、堆積層が広大に広がっている。

縄文時代以来の集落は堆積作用によって生じた微高地や自然堤防上に立地しており、その傾向は、現代の伝統的集落においても踏襲されている。また、自然堤防の周囲に広がる低位部は河道跡などをを利用して水路が巡らされ、もっぱら水田として利用されてきた。特に十二ヶ郷用水は市内井尻野の湛井堰から取水し、総社市中・東部、倉敷市庄地区、岡山市高松・吉備津・福田・妹尾地区の水田およそ4,500haを灌漑する日本有数の大用水が整備され、条理の拡大と生産の向上をうながした。その起源は平安時代末期の寿永年中（1182～84）に、妹尾太郎兼康による幹線水路の開削に始まるところとされ、先人たちの絶え間ない農業振興と、生産活動の成果が今日ある田園風景を形作っている。

(2) 歴史的環境

今回の調査では栢寺廃寺に関連する遺構・遺物が多数出土したため、古代までを概観することにしたい。

総社平野における旧石器時代の遺跡は、高梁川東岸の低丘陵に宝福寺裏山遺跡や浅尾遺跡、あるいは長良山より南側の微高地に位置する窪木薬師遺跡から、ナイフ形石器などがわずかに捉えられる程度である。

縄文時代早期には総社平野のほぼ中央に位置する真壁遺跡や長良山遺跡、山手地区の大正池南岸遺跡などが知られているものの断片的な資料に限られている。縄文時代前期の遺跡は、高梁川東岸の段丘上に位置する日羽ケンギョウ田遺跡が著名であるが、遺跡数は総じて少ない。

総社平野の沖積化に伴い本格的に人々の進出が始まったのは、今のところ縄文時代後期に求められる。後期の遺跡は先述の日羽ケンギョウ田遺跡や、真壁遺跡が知られており、南溝手遺跡（岡山県立大学）では後期後葉の糊痕土器と共に、後期中葉の土器の胎土からイネなどのプラントオパールが確認された。出土遺物の中には、打製石錘や石包丁状石器などが出土しており、早い農耕の可能性が示唆されている。⁽¹⁾

弥生時代前期～中期にかけて遺跡は次第に増加するものの南溝手遺跡や、窪木遺跡、真壁遺跡などでは竪穴住居が散在し、集落は微高地上に点在していると見られる。

弥生時代後期になると、平野部の微高地上あるいは丘陵裾部に点々と集落が営まれ、低丘陵上にも小集落が展開するなど遺跡の拡大が顕著になる。その一方で、前山墳墓群をはじめとした集団墓の造



- | | | |
|----------------|-------------|------------|
| 1. 柏寺魔寺 | 8. 宿寺山古墳 | 15. 南溝手遺跡 |
| 2. 千引かなくろ谷製鉄遺跡 | 9. こうもり塚古墳 | 16. 鬼ノ城 |
| 3. 隨庵古墳 | 10. 江崎古墳 | 17. 三須河原遺跡 |
| 4. 津寺遺跡 | 11. 緑山古墳群 | 18. 展望台古墳 |
| 5. 造山古墳 | 12. 備中國分僧寺跡 | 19. 三笠山古墳 |
| 6. 作山古墳 | 13. 備中國分尼寺跡 | 20. 小造山古墳 |
| 7. 角力取山古墳 | 14. 離木薬師遺跡 | 21. 水城状遺構 |

第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

當が丘陵上に認められ、それから卓越した首長墓として弥生墳丘墓が出現した。高梁川西岸域では立坂弥生墳丘墓や伊与部山弥生墳丘墓と共に、特殊器台や特殊壺に表徴される葬送儀礼用の土器が新たな展開をみせる。

古墳時代前期になると初源期の古墳とされる宮山古墳が三輪山丘陵に造られ、その後、同一尾根上に連続して築造された天望台古墳と三笠山古墳は首長系譜が追うことができる。こうした系譜とは別に、総社平野をとりまく周辺の丘陵部には井山古墳や秦大塹古墳⁽²⁾、秦茶臼山古墳など前方後円墳が単独で築造されており対照的である。弥生時代後期末から古墳時代前期の集落遺跡は、岡山市津寺遺跡⁽²⁾や矢部遺跡群⁽³⁾のように在地の土器と共に伴して畿内系、山陰系、讃岐系などの他地域産の土器や、その影響を受けた在地の土器が出土し、地域間交流が活発化している。市内においても単発的ではあるが山陰や河内、東海系などの外来系土器が出土しており、交流の実態を知る上で重要である。⁽⁴⁾

古墳時代中期には岡山市新庄下に、墳長360mという全国第4位の造山古墳が築造され、その後、市内三須丘陵の南端には全国第9位の規模を誇る作山古墳や、山手地区に宿寺山古墳が築造された。中期中葉以降には近辺に赤坂龍塚古墳⁽⁵⁾や角力取山古墳などの大形方墳も造られ、平野の南部に大形墳が集中している。

岡山市新庄地区から総社市三須地区にかけての低丘陵には小造山古墳、夫婦塚古墳、銭瓶塚古墳、折敷山古墳をはじめとする中小の古墳が多数知られており、これらの他にも近年発掘調査で明らかになった小造山西古墳や法蓮古墳群のように、低平で小規模な埋没古墳がおびただしく存在しているものと予想される。

窯跡はT K73型式に先行する奥ヶ谷窯跡があり、吉備最古級の須恵器生産が行われ、大文字遺跡や亀山下遺跡、法蓮古墳群などでは初期須恵器の出土が確認されている。その一方で窪木薬師遺跡⁽⁵⁾においては朝鮮系遺物と共に、鉄器製作と関連した集落の様相が判明しており、北方3kmの丘陵上に鍛冶具一式を副葬した隨庵古墳などの存在を勘案すると、総社平野には須恵器製作や鉄生産などの先端技術がいちはやく導入され、展開している様子が認められる。

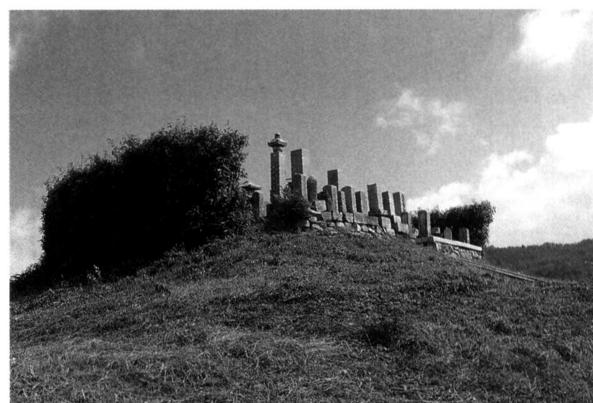
古墳時代後期は横穴式石室を主体部とした群



第2図版 宮山墳墓群



第3図版 作山古墳ほか



第4図版 赤坂龍塚古墳

集墳が爆発的に増加し、市内低丘陵のいたるところに造営された。前方後円墳は全長約100mのこうもり塚古墳に続き、江崎古墳をもって終焉を迎える、被葬者には岡山県井原市産の浪形石製家形石棺が使用されている。

集落遺跡の拡大と共にカマドを造りつけた住居が増加し真壁遺跡や三須畠田遺跡、窪木薬師遺跡を始めとし数多くの遺跡で検出されている。

538年の仏教公伝を経て飛鳥・白鳳時代には、吉備の地にも数々の古代寺院が建立される。市内には6カ寺（秦原廃寺・栢寺廃寺・三須廃寺・三輪廃寺・国分僧寺・国分尼寺）が存在し、この中でも7世紀前半に創建された秦原廃寺が最も古く、近年、近くの天神社境内から秦原廃寺へ瓦を供給した瓦窯が新たに発見された。⁽⁶⁾

また、山手の末ノ奥窯では7～8世紀にかけて須恵器生産が行われ、飛鳥の豊浦寺に供給した奥山久米寺式の軒丸瓦のほか、豊浦寺関連遺跡である平吉遺跡の鬼板や、古宮土壇（小堀田宮推定地）の文様埴も生産しており、蘇我氏との関係がつとに指摘されている。

7世紀中葉以降には、賀夜氏の氏寺と推定される栢寺廃寺が創建され、現在塔跡が整備されている。

軒丸瓦一類は瓦当文様が百濟系で、軒丸瓦二類は備後寺町廃寺の水切り瓦と同範である。

寺町廃寺は『日本靈異記』に記載されている三谷寺に比定されており、説話によれば三谷郡の大領の先祖が眷属を率い百濟の役に出陣する際、無事帰還することを願い寺院建立の誓願を立てた話が残されている。大和朝廷が660年の百濟滅亡後に再興を目指し、朝鮮半島に軍事介入した百濟の役（661～663年）後には、北部九州や瀬戸内海沿岸部に朝鮮式山城が築城されている。市内奥坂・黒尾地区の山中にも古代山城の鬼ノ城が築城され、これまでの調査成果から7世紀後半から8世紀初めには機能していたことが判明している。⁽⁷⁾

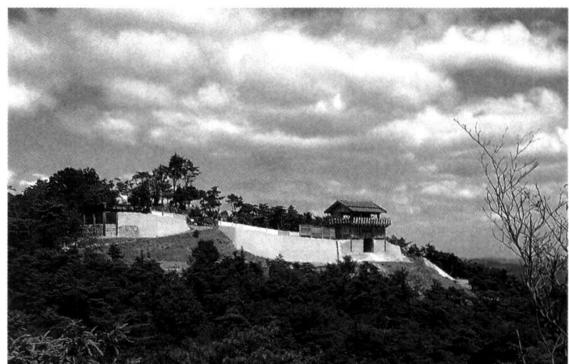
鬼ノ城の南山麓には、奥坂から東阿曽にかけて



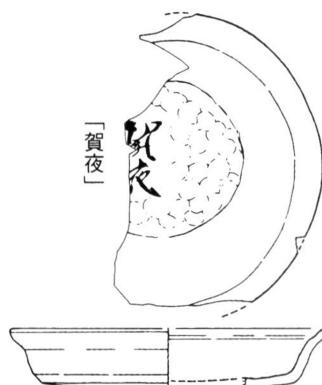
第5図版 秦原廃寺 塔心礎



第6図版 栢寺廃寺



第7図版 鬼ノ城



第3図 三須中所遺跡出土
「賀夜」銘墨書土師器

延びる丘陵上に奥坂遺跡群が所在している。6世紀後半に遡る千引カナクロ谷製鉄遺跡をはじめ、6遺跡で20基もの製鉄炉が見つかり、6世紀後半から8世紀前半まで、ほぼ連綿と製鉄の操業が続けられた。また鍛冶遺構は近辺の窪木遺跡や、窪木薬師遺跡、そして津寺政所遺跡などで明らかになっている。

新本川右岸の久代でも沖田奥、藤原、大ノ奥、古池奥、板井砂奥などの製鉄遺跡から62基の箱形製鉄炉と横口式製炭窯16基が検出され、操業年代は7世紀代を中心がある。山田川右岸の砂子遺跡においては、鉄鉱石加工から鍛冶工程までの一貫した工人集落遺跡が調査され、この一帯があたかも製鉄コンビナートの様相を呈している。⁽⁸⁾高梁川西岸地域における7世紀代の特筆すべき古墳は、久代の長砂2号墳があり、県内唯一の横口式石槨墳として有名である。

律令制下の遺跡としては所在不明の国府、郡衙、国分寺、山陽道などが挙げられる。

『倭名類聚抄』によれば、備中國府は賀夜郡に所在したことが記され、これまでに金井戸地区や総社宮近くの諸上地区、あるいは西阿曽地区に推測されていたものの定説を見ていなかった。しかし、近年、金井戸の御所遺跡では国府関連の遺跡が発見され注目を集めている。御所遺跡は大溝に囲繞された約1町四方の方形居館であり、土壘や石敷きを施した井戸、梵鐘鑄造土壙などの遺構が検出されている。土師器を中心におびただしい遺物が出土し、井戸からは呪付木簡も出土した。こうした遺跡の内容から判断して、平安時代末期の備中國府の可能性が考えられている。

近年の発掘調査では、郡衙関連遺跡の調査成果も得られている。⁽⁹⁾三須河原遺跡は8世紀前半の掘立柱建物群が検出され、「郡殿」銘の墨書須恵器が出土するなど窪屋郡衙の一部に比定され、同じ郡内の三須中所遺跡では、⁽¹⁰⁾8世紀後半に属する大量の遺物と共に「賀夜」銘の墨書土師器の存在などから、窪屋郡の関連遺跡に推測されている。一方、新本川流域の横寺遺跡では整然と配置された大規模な掘立柱建物が発見され、出土遺物の年代観により郡以前の下道評衙に比定されている。

天平十三年（741）、聖武天皇の勅願により全国的に国分寺が建立されることになり、備中国では鎮護国家を祈祷する仏教施設として、窪屋郡に国分僧寺と尼寺が造営された。

国分寺の南端には都から大宰府までを繋ぐ山陽道が東西に敷設され、国分尼寺ではその一部が確認されている。市内には津嶺駅から河辺駅までの駅路が大きく含まれており、田園の中には古道の地割りが残されている所もある。奈良時代には仏教文化の普及と共に、市指定重要文化財「矢田部首人足宝龜七年定」銘の刻字塔のように、下道郡を中心に道教に由来する買地券の風習も知られている。

平安時代には、現在の市名の由来になった総社（惣社）が置かれ、備中國内の祭神を一ヵ所に勧請して祭祀が行われ、備中の祭政の中心となった。その他にも式内社が7社あり、春の祈念祭に奉幣を受けた。7社とは古郡神社、百射山神社、野俣神社、石畠神社、⁽¹¹⁾神神社、麻佐岐神社、横田神社であり、この中でも古郡神社は柏寺廃寺や国府推定地を見下ろす西山丘陵の東端にあり、吉備武彦を祭神としている。

註

- (1) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100、岡山県教育委員会、1995年
- (2) 「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104、岡山県教育委員会、1996年
- (3) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94、岡山県教育委員会、1995年
- (4) 「窪木遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124、岡山県教育委員会、1998年
- (5) 「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86、岡山県教育委員会、1993年

- (6) 「秦（秦原）廃寺確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』6, 総社市教育委員会, 1996年
- (7) 「古代山城 鬼ノ城」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』18, 総社市教育委員会, 2005年
「古代山城 鬼ノ城2」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』19, 総社市教育委員会, 2006年
- (8) 「山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(6)」『総社市埋蔵文化財調査年報』11,
総社市教育委員会, 2001年
- (9) 「三須河原遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16, 総社市教育委員会, 2003年
- (10) 「平成14・15年度 東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』
14, 総社市教育委員会, 2005年

第Ⅲ章 大文字遺跡（栢寺廃寺）の確認調査

第1節 調査の概要

確認調査は長さ約70mのトレンチを設定したに等しく、主に断面観察を主眼に置き調査を実施した。平面が細長く幅も狭小なため検出遺構が断片的であることを断りつつも、以下の説明においては便宜上、調査区の中央を境に東半と西半にわけて説明することにしたい。なお、出土遺物は第4図のとおりNo.0～No.4に地区割りを行い取り上げた。

基本層序は全ての調査区で耕土以下が遺構面となり、西半では砂質の強い灰黄褐色砂質土（16層）が基盤層となる。しかし調査区の西端から25m地点では基盤層が東に向けて下がり、上部堆積した黄褐色砂質土（52層）が基盤層になっている。つまり、栢寺廃寺が選地する同一の微高地上でも寺院側が古い微高地となっていたことがうかがえる。

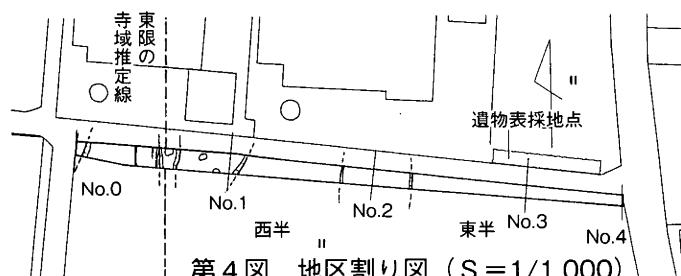
調査区の東半は低位部2から7・8世紀代の遺物が出土し、低位部1と類似する人工的な埋土である。これより東には掘立柱建物の柱穴、土壙、竪穴住居などの遺構が検出され、居住域の広がりが確認できた。出土遺物の中には丸瓦、平瓦、埠など寺院関連の遺物が出土している。

調査区の西半には低位部1があり7・8世紀代の須恵器・土師器、瓦が出土した。寺域造成により人為的に埋没させたと考えられ、この埋土上面を掘り込んで営まれた3基の土壙状炭窯を検出した。

同じくNo.0～No.1の中間地点からは、低位部1を掘り込んだ溝を検出した。栢寺廃寺は概ね東西1町、南北1町半の細長い寺域が推測されており、調査区の西半は寺域の北東部に該当している。四天王寺式伽藍配置の場合、唯一判明している塔跡が寺域の中軸線になり、中軸線から東へほぼ半町を折り返した地点で南北方向に走行する東限の寺域が推定される。位置・規模・出土遺物からみて、この溝は栢寺廃寺の区画溝と考えられる。また、区画溝から寺院側に隣接して瓦廃棄土壙を検出し、土壙内からは栢寺廃寺に使用された軒丸瓦・軒平瓦、平瓦・丸瓦が多量に出土した。そしてこれらの瓦群に混じって文字瓦を2点発見した。

文字瓦は水洗作業を実施していた平成20年5月下旬に確認したもので、文字の釈読を元京都橘女子大学教授 狩野久先生からご指導をいただくと共に、刻書の観察を花園大学専任講師 古市晃先生からご指導いただいた。考古学的観点からは瓦の評価を岡山理科大学教授 亀田修一先生よりご教示いただいた次第である。

総社市では古代の文字瓦は初見であり、その重要性に鑑み平成20年6月20日（金）に記者発表を行い、同日から7月1日（火）にかけて総社市総合文化センターにてミニ展示を行った。会期中は110



名以上の見学者が訪れ、熱心に古代の文字を観察された。なお、文字瓦の釈読は6月20日の公開時に暫定的な説明をおこなったが、その後、進展がみられ公開時の所見とは異なるところがある。詳細は第IV章を参照されたい。

第2節 検出遺構と遺物

遺構は低位部2ヵ所、瓦廃棄土壌、区画溝、土壌状炭窯3基、竪穴住居1軒、柱穴15基、土壌2基を検出し、狭い調査区ながら遺構密度が高い状況であった。

A、調査区西半

低位部1

低位部1は壁面が緩やかに傾斜し、幅21.3m、深さ45cm以上を測る。埋土は7・8世紀代の土器片、瓦片、焼土粒、炭粒などを包含し、基盤土のブロックが全体的に混入するなど人為的に埋め立てた造成土の可能性が高い。

出土遺物

(A) 土器

低位部1の埋土から7・8世紀の須恵器、土師器、瓦が出土した。土器組成の概要は供膳具が須恵器壺H2、壺G3～5、壺B6～26、楕円形壺27、鉢34、高壺28～31、小形高壺32があり、土師器は壺A41、壺C42、高壺43がわずかに出土した。

貯蔵具は須恵器平瓶35、短頸壺36、横瓶46、甕39・45があり、煮炊具には須恵器甕38と土師器甕44が出土している。文房具では円面硯40が出土した。

古墳時代中期の須恵器壺蓋1は口縁端部が肥厚し、稜は水平に引きのばされている。焼成硬緻で断面は赤紫色を呈し、5世紀後葉に属し混入したものである。

これより以下は7・8世紀代の遺物について説明する。壺H2は小形化した最終形態を示し、壺G蓋3・4・5は天井部内面のかえりが小さい。いずれも型式的には共存関係にあって違和感はなく、7世紀後葉に属する。

壺B蓋のつまみは、宝珠状の7と扁平な8がある。また、天井部内面にかえりがつく6・9・10・11には、わずかなかえりがある9と、口縁端部を強くひき出す10・11があり、7世紀末葉から8世紀初頭に属する。かえりのない蓋12～17は、口縁端部のみの資料ながら天井部に向けて断面が丸みをもつた、直線的に成形されるため、おおむね7世紀末葉から8世紀前葉におさまる資料であり、18のみは口縁を強く屈折する属性からみて8世紀中葉に属する。

壺B身の中で古相を示すものは19・20・22がある。口縁部と底部の屈折が甘く、屈折点よりも内側に高台が付き、ハ字形に開くことから7世紀末葉から8世紀初頭に属している。

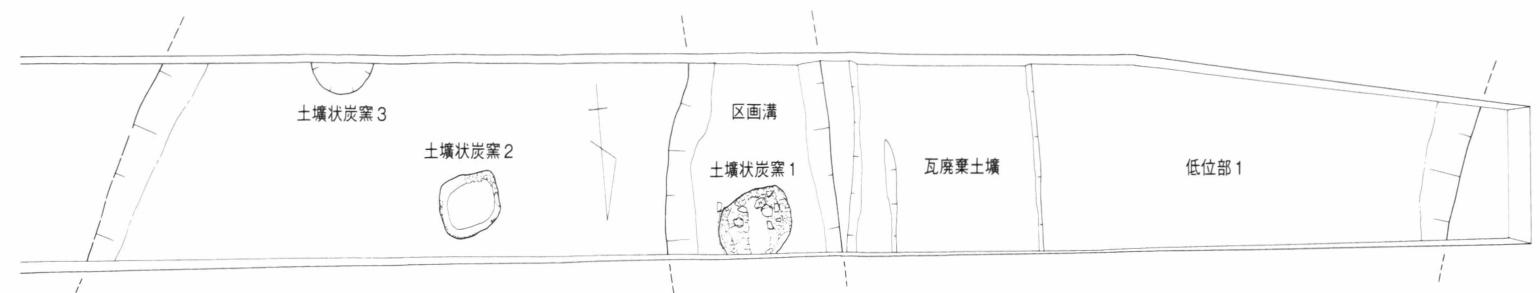
新相として21・23・24・25・26があり、口縁部と底部との屈折が明瞭で、高台が小さく屈折点に近づいている点からみて8世紀前葉～中葉に属するだろう。

高壺28～31は、28の口縁部が鋭角に立ち上がる一方、29はゆるやかに成形されている。いずれも瓦質の焼成で黒色を呈し、角閃石を多く含む点が特徴で、甕38も同様である。32は小形高壺で口縁外面に黒色を呈した付着物があり、成分分析を実施した（第VI章）。これらの高壺28～30・32は7世紀末葉から8世紀初頭に属している。鉢34と瓦廃棄土壌から出土した33は、器壁が厚い作りで口縁端部は内傾している。

貯蔵具には平瓶35、横瓶46、短頸壺36・37、甕39・45がある。円面硯40は圈足硯に分類され、脚台部の上位には縁部を接合して海となし、脚台部に一条の突帯と長方形透かしが穿孔されている。35



第8図版 瓦廃棄土壤（北から）



第5図 調査地 平・断面図 (S=1/100)



第9図版 中世土壤（北から）



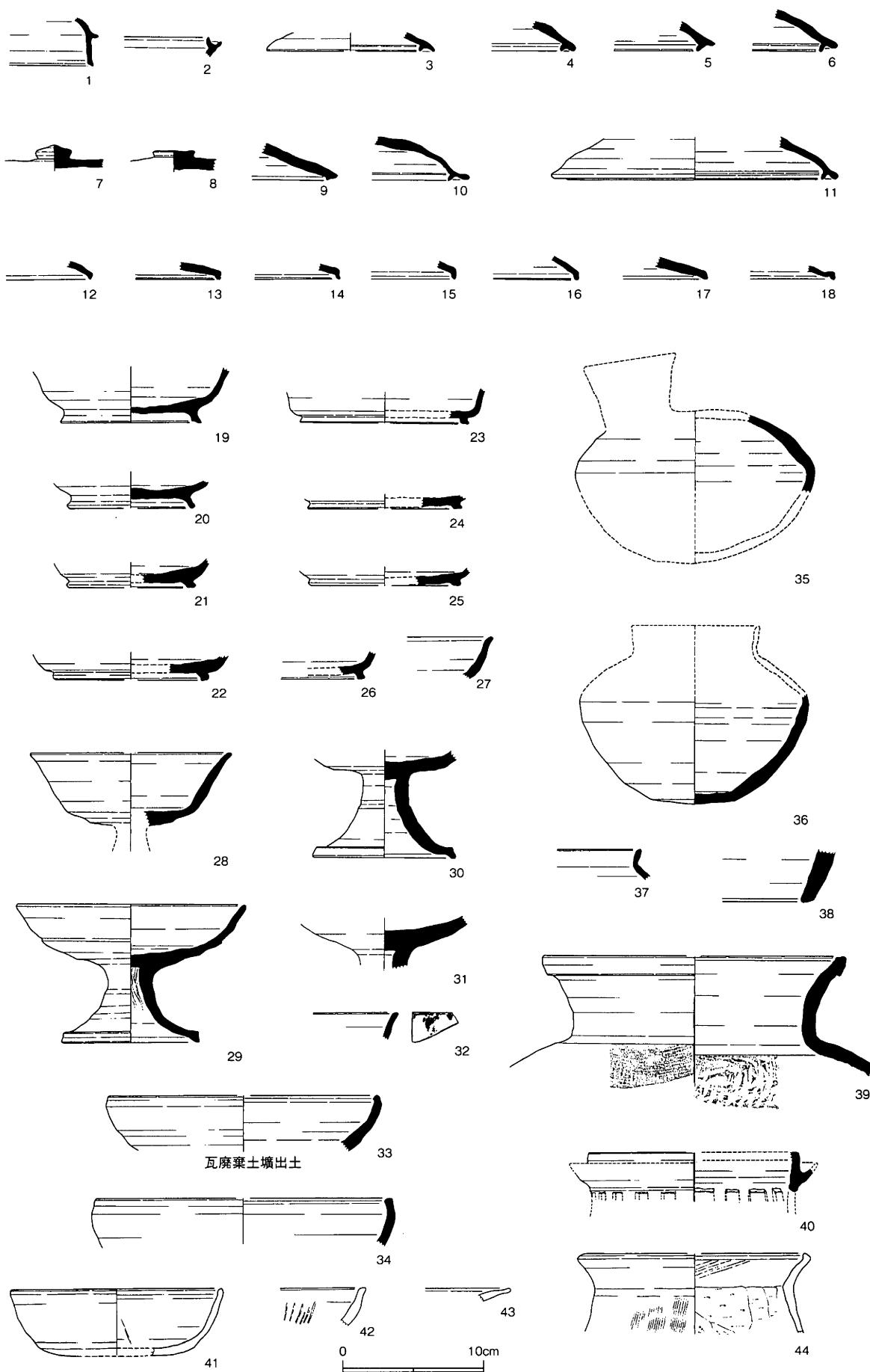
第10図版 礎盤石のある柱穴（北から）



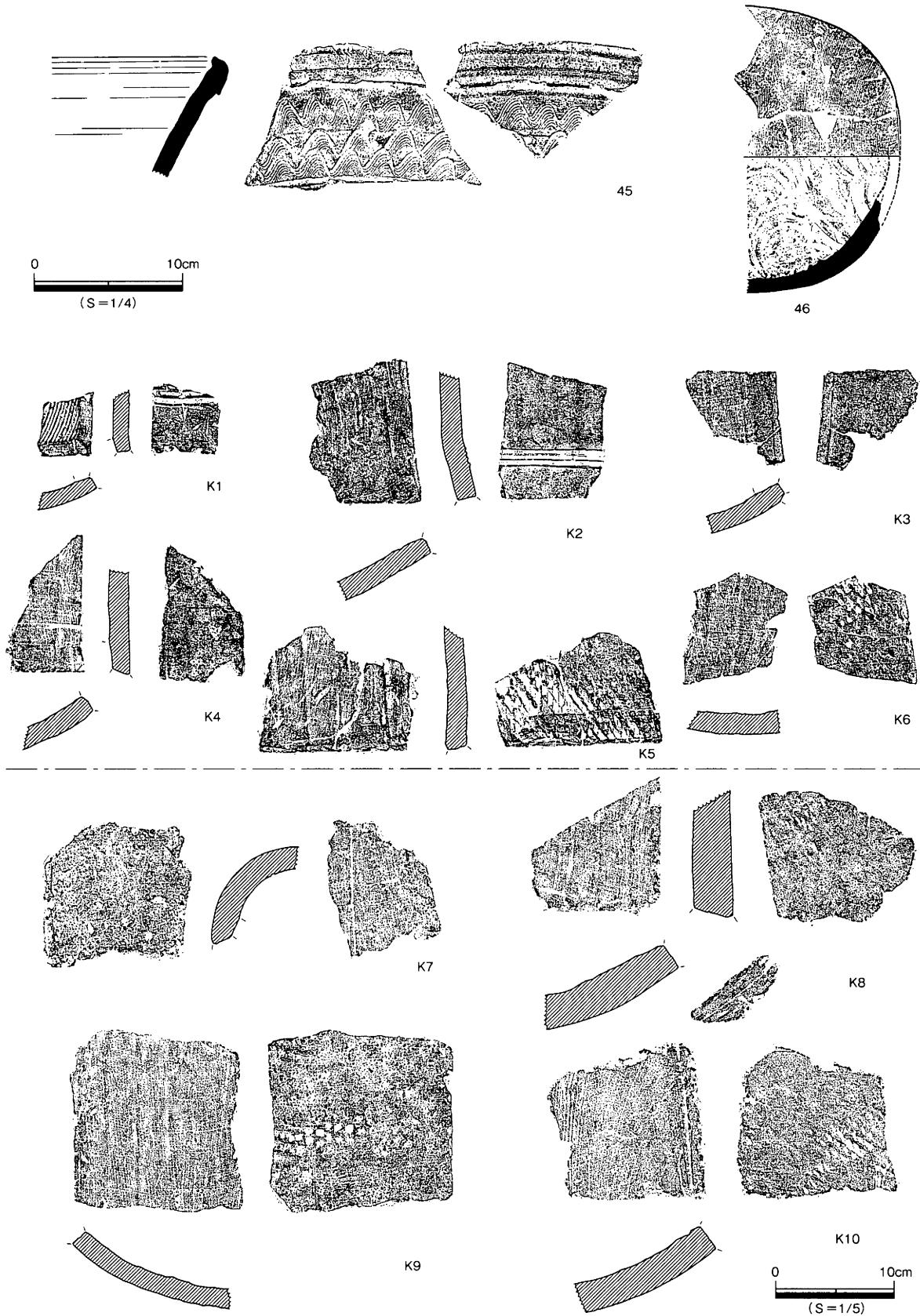
第11図版 壁穴住居（北から）



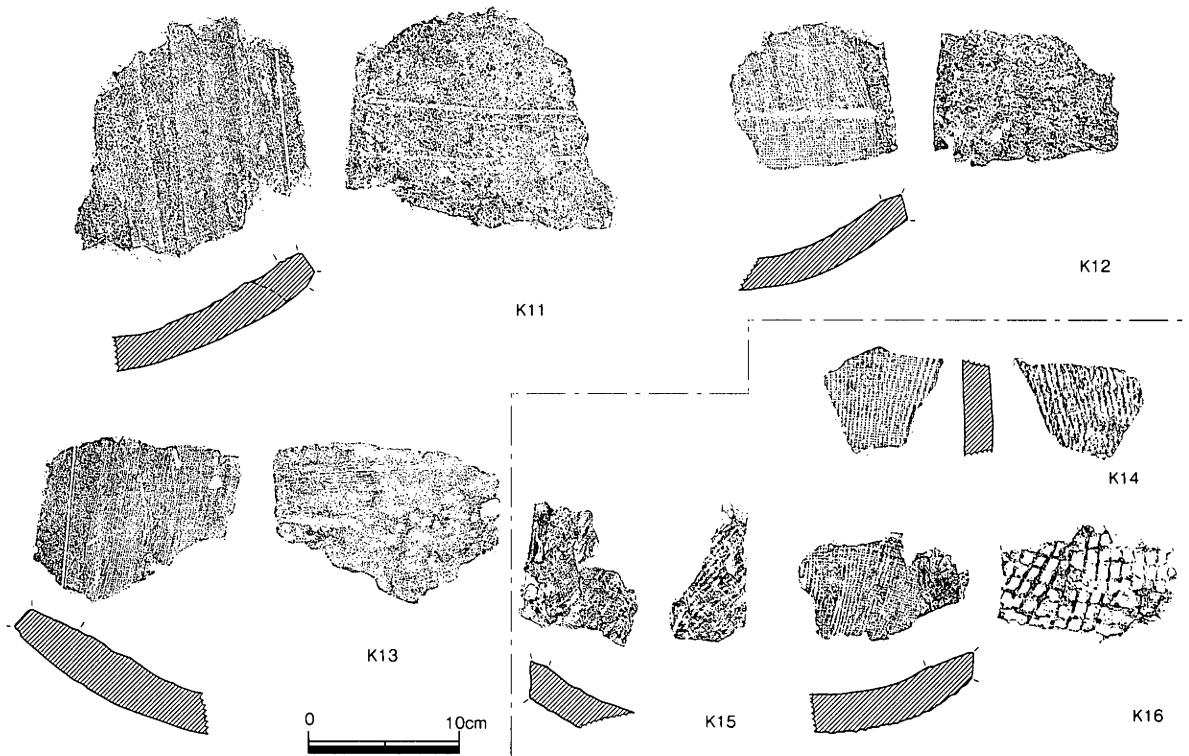
第12図版 柱穴（北から）



第6図 低位部1 出土遺物1 ($S=1/4$)



第7図 低位部1 出土遺物2 ($S=1/4 \cdot 1/5$)



第8図 低位部1 出土遺物3 (S=1/5)

~40は7世紀末葉から8世紀前葉に属する。

土師器坏A41は口縁端部がわずかに肥厚し、内面には左上がりの暗文が施され、坏C42にも右上がりの暗文が認められる。

(B) 瓦の概要

出土瓦K1～K16は細片がほとんどで、製作技法と胎土により大きく3つの様相に分かれる。

まず、第1に粘土板桶巻作りで成形された平瓦のうち、薄手の作りで精良な胎土をもつK1～K6があり、K1とK2には凸面に3条の沈線を施すことから、軒丸瓦二類と同じ7世紀後半の古相を示す。第2に丸瓦K7と重弧文軒平瓦K8、平瓦K9～K13は厚手の作りで、胎土は砂粒を多く含む7世紀後半新相の一群である。第3は一枚作りの平瓦K14～K16である。わずかな出土で瓦廃棄土壌からの混入品かもしれないが、凸面の一次調整には斜方向の縄タタキと正格子タタキがあり、8世紀に属している。

(C) 7世紀後半 古相の瓦

平瓦K1～K6は厚さ1.4～1.9cmを測る薄手のつくりで、全て粘土板桶巻作りである。凸面の一次調整がわかるものには、斜格子タタキを施したK5・K6があり、K1～K6とも二次調整はヨコナデで仕上げている。K1とK2には端面の近くに3条の沈線を施しており、K2は広端側が下位に屈折している。凹面には粘土板糸切り痕が顕著に認められるK2・K6があり、布目圧痕は8～12本/cmと細い。

側面は「面取りなし」がK2・K4で、「面取り1」がK1、「面取り2」はK3に認められる。端面は「面取りなし」がK2・K5で、「面取り1」はK1とK4がある。胎土は精良で2mm程度の砂粒を含んでいるものの、軟質焼成が多く色調は灰白色や橙褐色などがある。

(D) 7世紀後半 新相の瓦

新相の瓦は丸瓦K7、軒平瓦K8、平瓦K9～K13がある。丸瓦K7は粘土板模骨巻きによる成形で厚さ1.9～2.2cmを測り、凸面は斜格子タタキの後、ヨコナデで仕上げる。軒平瓦K8は直線顎で瓦當に1条の細い沈線を施している。

軒平瓦K8と平瓦は厚さ1.5～3.4cmまでのものがあり、総じて厚手の作りである。この中でも平瓦K9は厚さ約1.5cmを測る薄手で、胎土が新相の瓦群と同じである。

軒平瓦と平瓦は全て粘土板桶巻作りで、凸面の一次調整は斜格子タタキが残るK8・K10・K11・K13が格子の長さ0.7～1cmで、K9は正格子タタキの格子が長さ約8×7mmである。凹面には粘土板糸切り痕がK8・K10・K12・K13に認められ、布目圧痕は7～11本/cmと細い。棒板痕の幅は1.5～3.3cmまでのものがあり概ね3cm前後で、K10・K11・K13には側縁の近くに分割界線が認められる。

側面は「面取りなし」の平瓦がK8・K9・K10で、「面取り1」がK12・K13である。「面取り2」はわずかにK11で見られる。胎土は砂粒を多く含みやや粗雑であるが、良く締まっている。

硬質焼成の平瓦は色調が灰白色・暗灰色を呈し、軟質焼成の平瓦は淡灰色・黄褐色などがある。

(E) 一枚作りの平瓦

K14～K16は一枚作りの平瓦で、厚さは1.8～2.6cmまでのものがある。凸面調整はK14・K15が斜方向の縄目タタキで、K16は正格子タタキ（格子目8×7mm）を施している。凹面はいずれも糸切り痕が顕著で、布目圧痕は7～8本/cmとやや粗い。

K15・K16とも側面は「面取り1」で、側縁を浅く削っている。胎土はやや粗く砂粒を含み、断面では層状に粘土が剥離したような痕跡も認められ粗雑な印象をもつ。色調は灰白色系である。

(F) 低位部1の時期

年代観が特定できる土器は7世紀後葉の壺H、壺Gが少量あり、7世紀末葉から8世紀初頭の遺物ではかえりのある壺B、高壺、土師器壺Cなどがある。8世紀前葉の遺物は壺B、円面硯、土師器壺Aなどがあり量的に多い。8世紀中葉の遺物は壺B蓋18があるものの量的には少なく、低位部1の下限を示す可能性が高い。

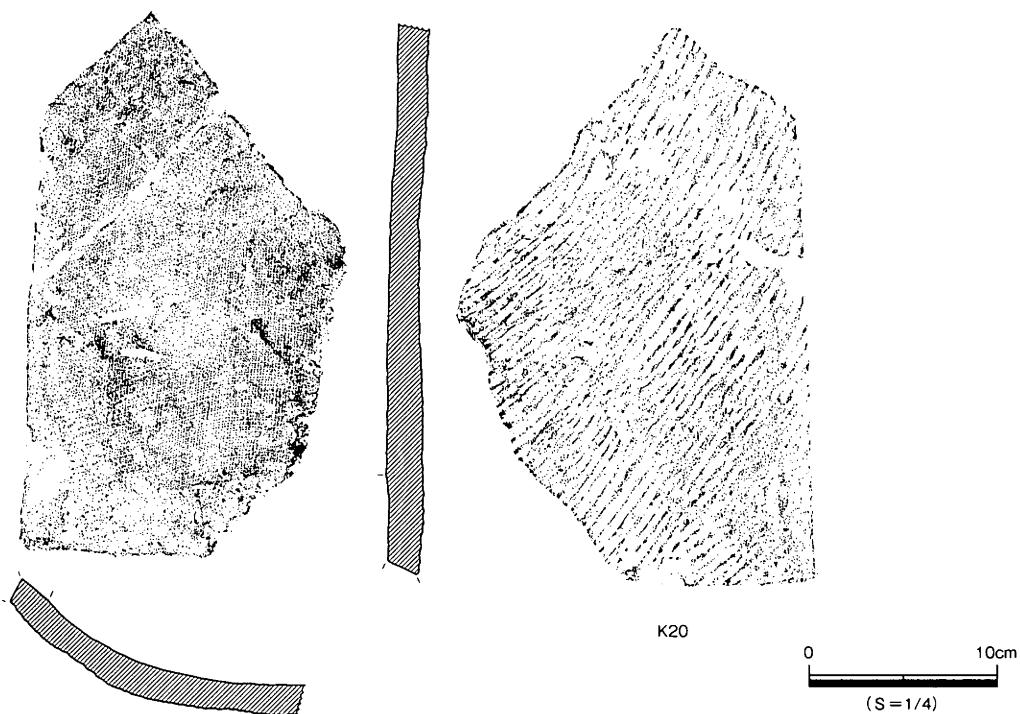
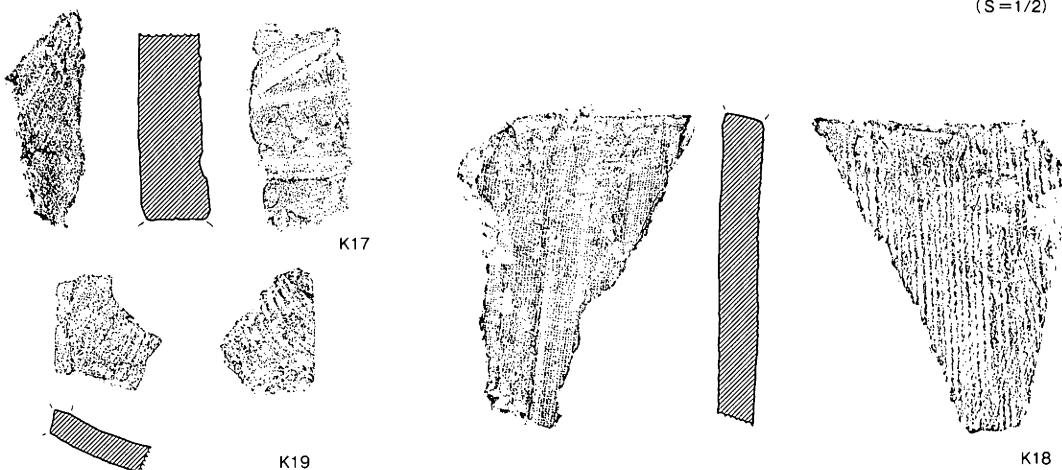
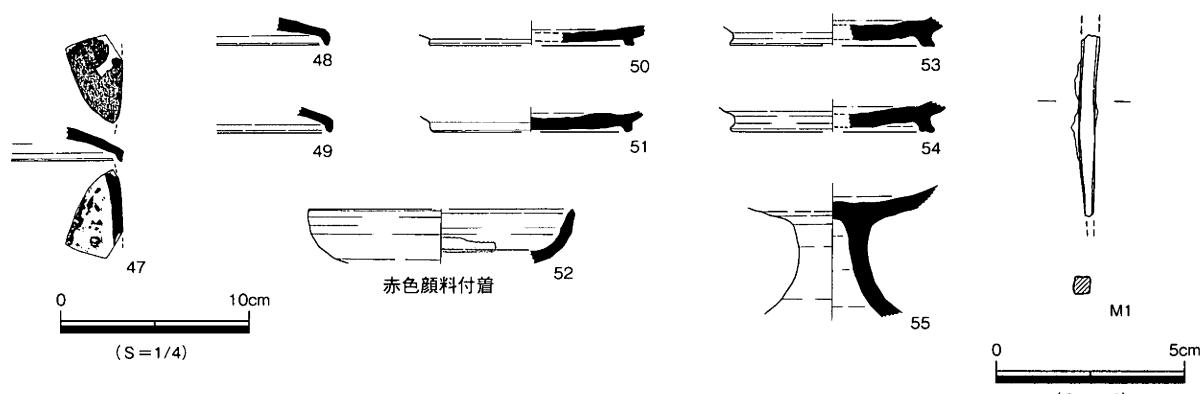
出土瓦の年代観も7世紀後半の古相を示す平瓦K1～K6と新相のK7～K13があり、新相の瓦が量的に多い。

低位部1は7世紀後葉から8世紀中葉までの土器の年代幅や、低位部1を切って開削される区画溝との関係からみて、少なくとも8世紀中葉までには埋没したと考えられる。

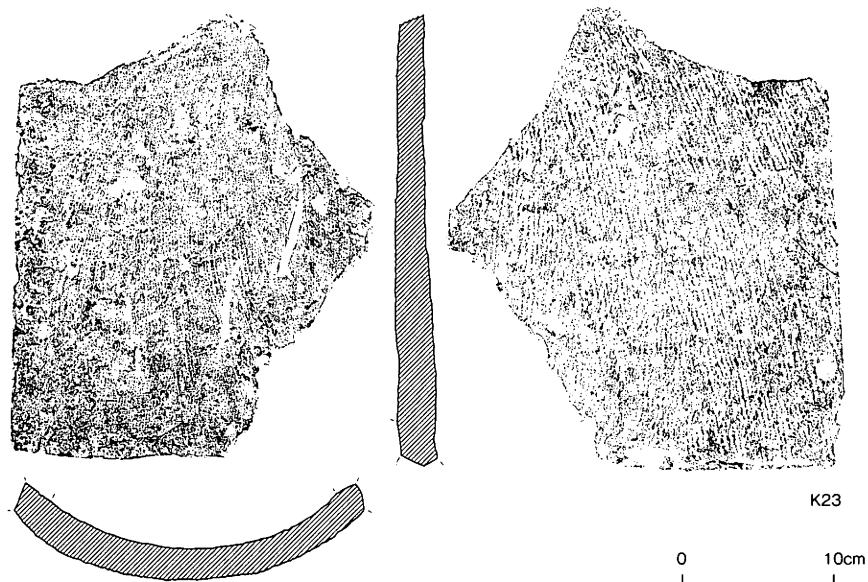
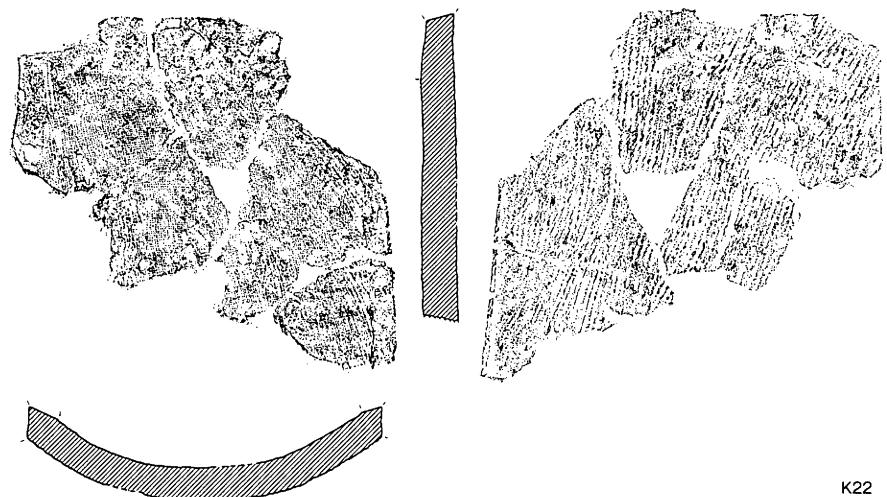
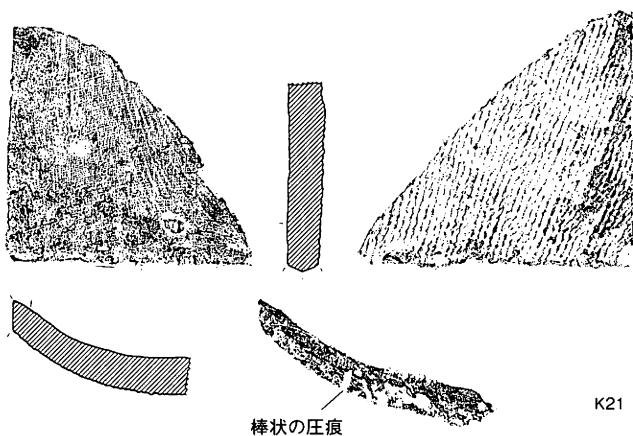
区画溝

区画溝は低位部1の埋土を掘り込んで開削され、底部は皿状を呈し幅2.14～2.97m、深さ55～64cmを測る。溝の底部からは縄タタキを施した一枚作りの平瓦が多数出土し、埋土からは須恵器片や鉄滓も出土した。推定される寺域の東限にあたり、溝の方向が南北方向を示すことから、柏寺廃寺の区画溝と考えられる。

出土遺物は須恵器壺B47～51、皿52、台付壺53・54、高壺55がある。須恵器壺Bのうち、蓋47には内外面に黒色を呈した付着物があり、成分分析を実施した（第VI章）。身50・51は高台が小さく、底部と体部の屈折点よりも内側に貼り付けられている。皿52は底部と体部の境が丸みを帯び器壁はやや厚く、内面底部には赤色顔料の付着が認められた。台付壺53・54は高台が短くハ字形に開いている。



第9図 区画溝 出土遺物1 (S = 1/2・1/4)



第10図 区画溝 出土遺物2 (S=1/5)

鉄関連遺物は鉄釘M1と鉄滓（第36図版）がある。細身の鉄釘M1は長さ4.7cm、厚さ5mm、重さ2.8gを測り、断面四角形である。埋土中からは球形を呈した鉄滓小片を2点採取し、その形状から鍛冶滓が考えられる。

出土土器には赤色顔料の付着した皿52や、鉄滓や鉄釘M1などがあり、寺院の造営に關係した多彩な遺物が含まれ、近辺に各種の工房を推測させる。

瓦は溝の底部付近を中心にまとまって出土した。凸面に沈線を施した7世紀後半新相の平瓦？K17と、桶巻作りで凸面に縄タタキを施したK18の他は、全て一枚作りの平瓦K19～K29である。

K17は厚さ3.2～3.6cmを測り、粘土板桶巻作りで成形している。凸面には二次調整のヨコナデの後に横方向に太い沈線と、斜方向にヘラでナデた跡が見られる。凹面には粘土板糸切り痕と共に12本/cmの布目圧痕が認められ、端面には文様がなく軒平瓦かどうかは断定できなかった。

K18は厚さ2～2.2cmを測る粘土板桶巻作りの平瓦である。凸面には縦方向の縄タタキが施され二次調整はない。凹面には糸切り痕の他に棒板痕が1.8～2.6cmの幅で認められる。

K19～K29は一枚作りの平瓦である。幅のわかるK22・K23・K26は、23.1～23.3cmと規格性があり、厚さは1.5～2.7cmまでのものがある。

凸面の一次調整は斜方向の縄タタキがK20～K23・K25～K29に多く認められ、縦方向の縄タタキはK24のみである。二次調整は狭端の近くを部分的にナデるK24・K27や、全体的に強くナデるK28がある他は未調整である。凹面はいずれも糸切り痕が顕著で、布目圧痕は6～9cmと粗い布を使用している。

側面はK19・K20～K29がいずれも「面取り1」で、端面はK20～K23とK25～K29が「面取り1」である。また、K21とK28の端面には、成形台からヘラで瓦をおこした棒状の圧痕が認められた。

胎土は砂粒を多く含み、K24とK29が7世紀後半新相の瓦群と類似するものの、K23・K26の胎土は層状に幾重にも剥離し粗雑な印象をもつ。硬質焼成の平瓦が多く、色調は暗灰色・灰白色などがある。

区画溝の時期

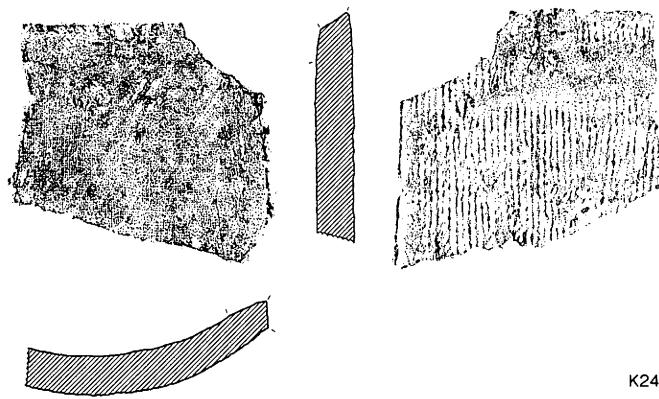
出土土器は壇B身50・51が8世紀後葉、皿52は8世紀中葉に位置づけられる。瓦は一枚作りの平瓦K19～K29が量的に多く主体を占め、製作技法が桶巻作りから一枚作りへ完全に移行している様子がうかがえる。

年代観としては胎土の質感や、製作技法、凸面調整により軒平瓦四類に類似することから、8世紀中葉以降に位置づけられる。したがって区画溝は8世紀後葉に開削されたと考えられよう。

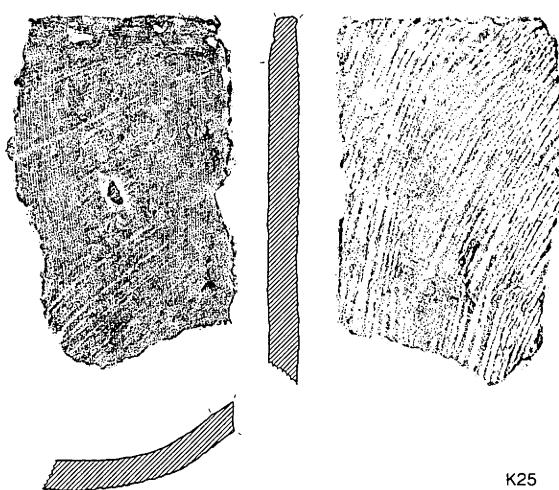
瓦廃棄土壙

区画溝の西側に隣接して瓦廃棄土壙を検出した。低位部1の埋土を掘り込んで壁を垂直に切り、底部は平坦に整形されている。平面は長方形と推測され幅2.9m、深さ50cmを測る。内部には軒丸瓦四類や、重弧文軒平瓦を始め、丸瓦、平瓦を重ねて充填しており、中心伽藍に使用された破損品を片付け地中に埋没させたものである。

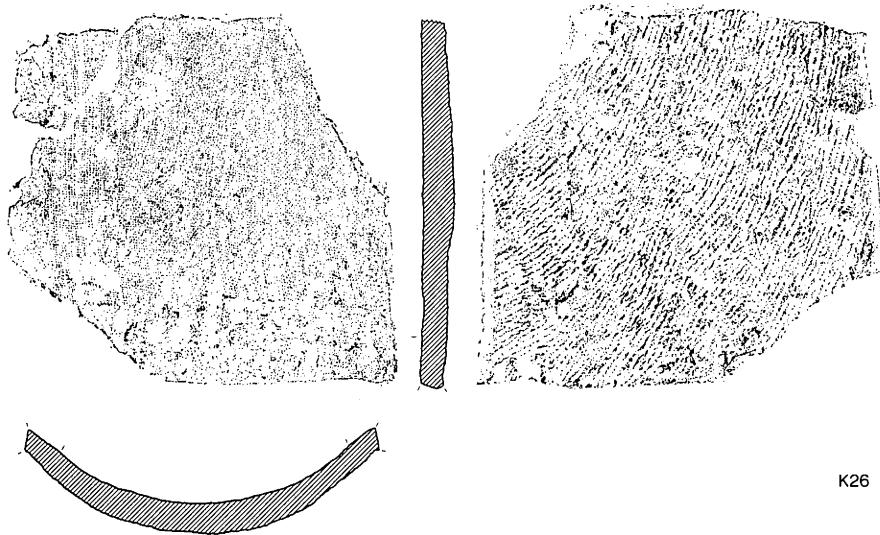
出土遺物については第3節で説明したい。



K24



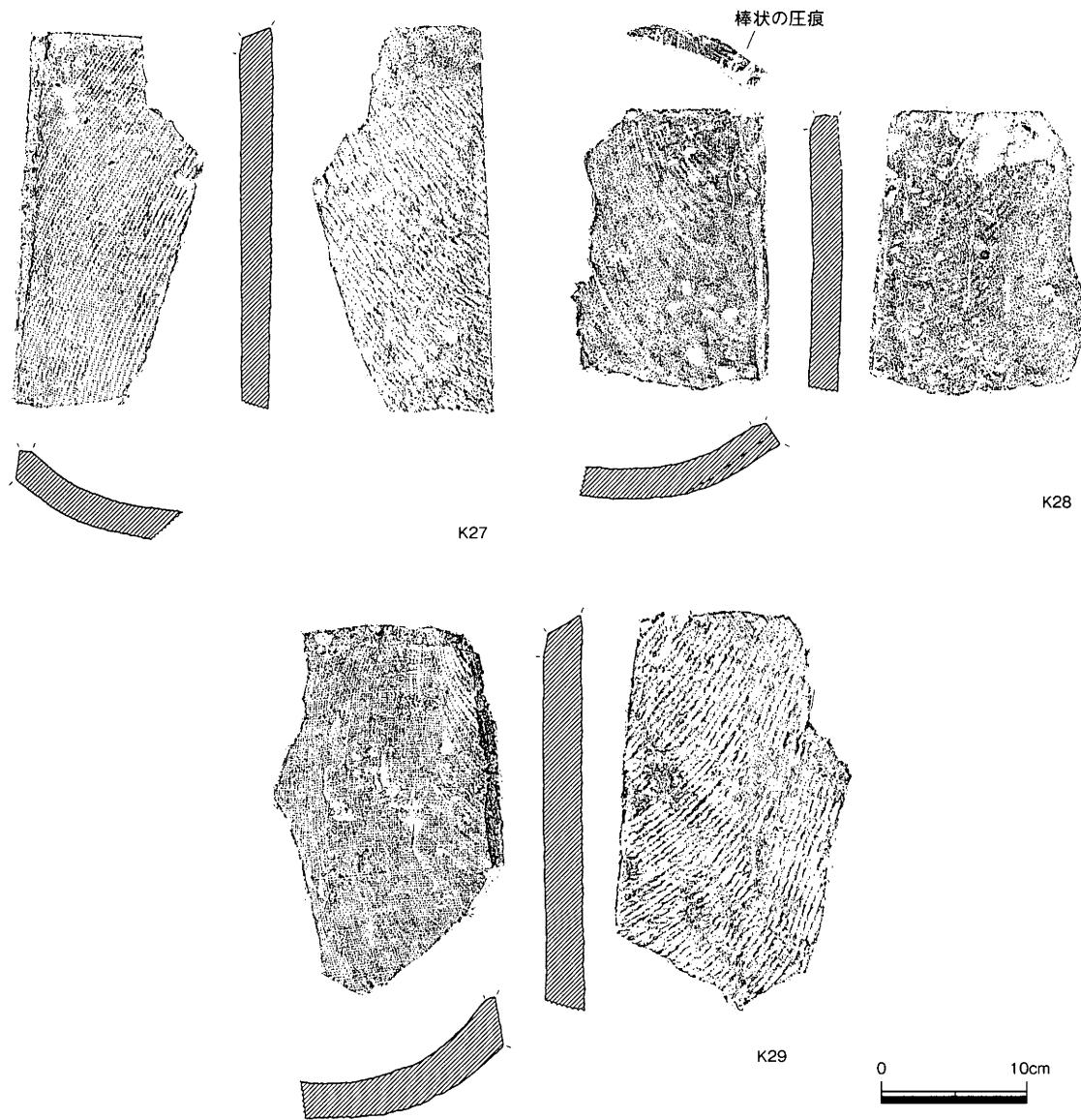
K25



K26



第11図 区画溝 出土遺物3 (S=1/5)



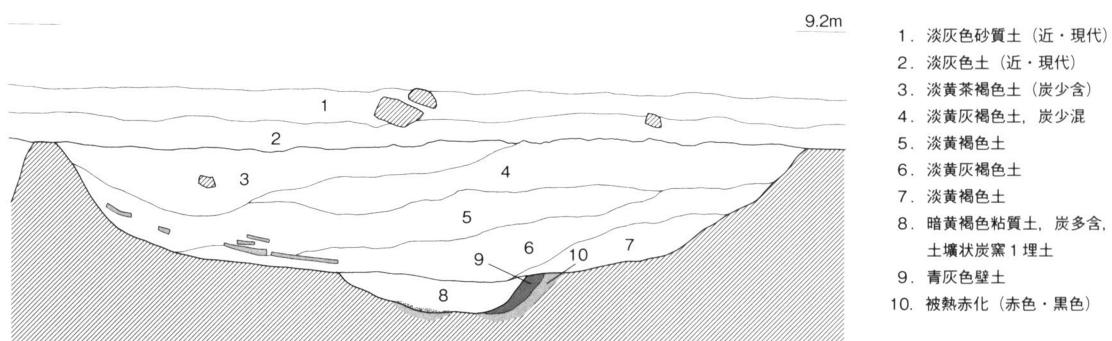
第12図 区画溝 出土遺物4 (S=1/5)

土壌状炭窯1

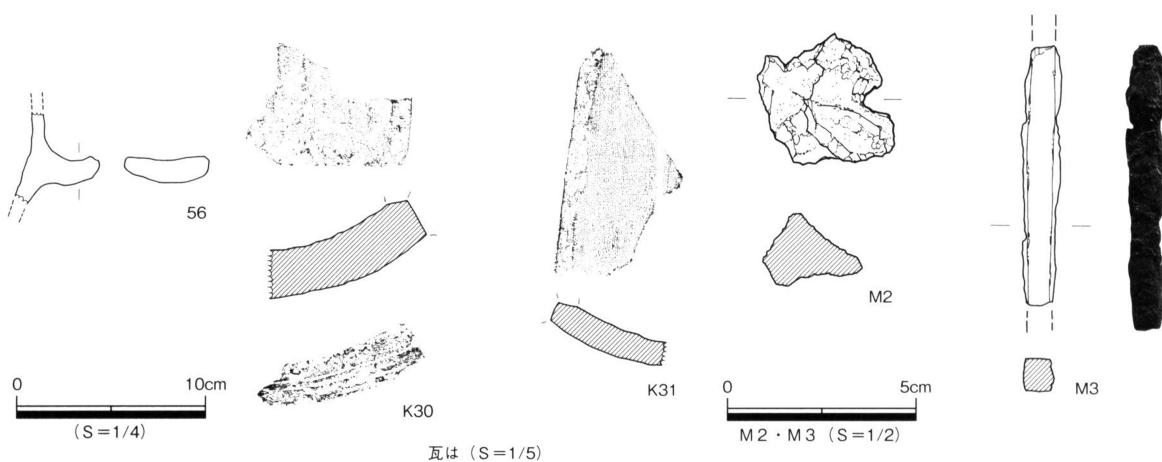
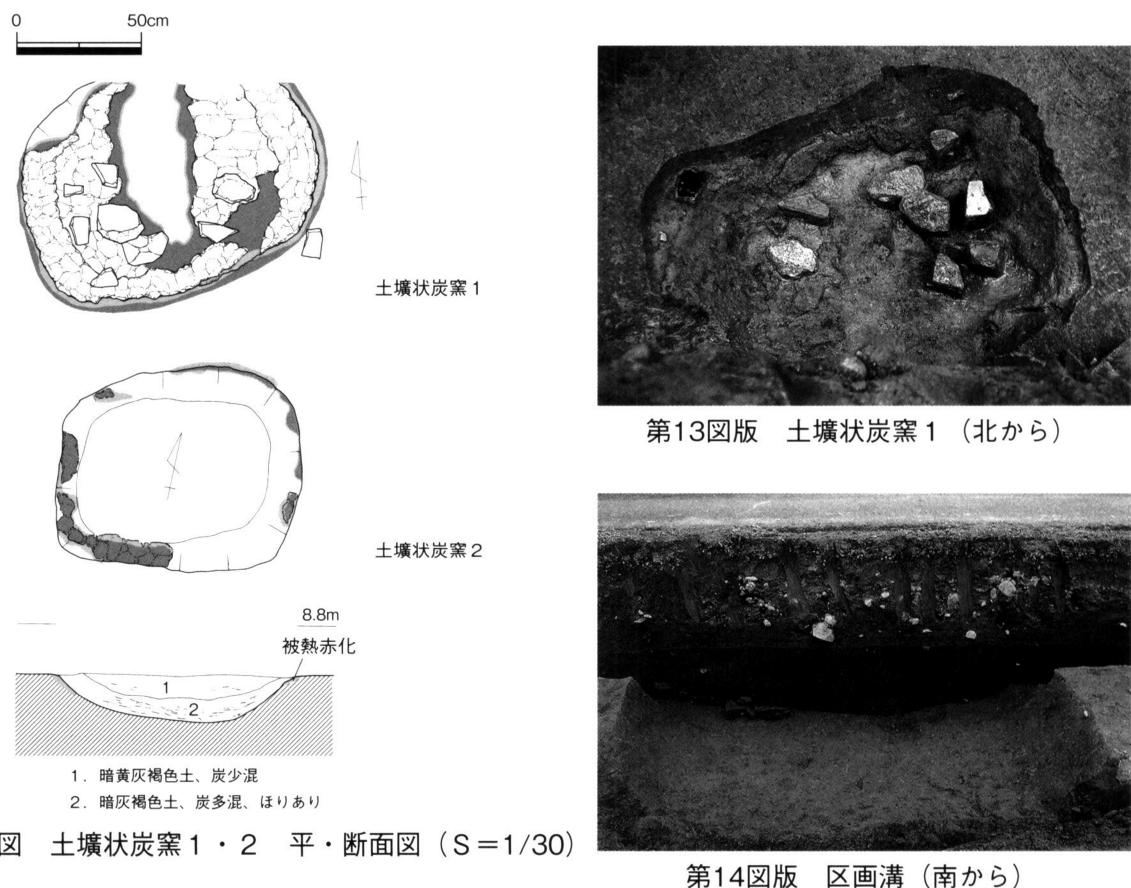
土壌状炭窯1は区画溝の底部より検出した。平面は橢円形を呈し、長さ1.2m、幅90cm、深さ約30cmを測る。炭窯の壁と底には粘土を貼り付けて整形しており、熱影響を受けて内部は青灰色に変色していた。壁面は内面から青灰色→黒色→赤色へと変化し、還元炎焼成を想起させる。

出土遺物は埋土中から土師器の甌把手56、軒平瓦K30、平瓦K31、鉄滓M2が出土した。軒平瓦K30は一類で瓦当部に3条の浅い沈線が認められるが、凸面側に近い下部の2条はいずれも断続的であるまいであり、本来は1条の施文と考えられる。平瓦K31は胎土が細かく厚さ1.8cmと薄い特徴から、7世紀後半古相の平瓦である。鉄滓は長さ4.2cm、厚さ2cmを測り表面にはあぶく状の気泡と、炭粒が混入しており鍛冶滓と考えられる。

時期は軒平瓦K30が一応の上限を示すが、遺構の形成過程からみると低位部1の埋没後、土壌状炭窯1が操業され、その後区画溝によって切られる状況からみて8世紀中葉に推定される。



第13図 区画溝と土壤状炭窯1断面図 ($S=1/30$)



土壌状炭窯 2

土壌状炭窯 2 は炭窯 1 よりも東へ 4 m の位置より検出した。平面は橢円形を呈し長さ 9.7 m, 幅 80 cm, 深さ 18 cm を測る。炭窯の肩ならびに壁面には被熱痕跡が認められ赤化していた。壁面の一部は粘土を貼り付け、焼成により固着硬化した部分も残存していたが、大半は剥落していた。

出土遺物は埋土中から残存長 6.8 cm, 厚さ 8 mm を測る鉄釘 M 3 が出土した。

土壌状炭窯 3

土壌状炭窯 3 は炭窯 2 から南東へ 2.5 m 離れたトレンチ断面にて確認したものである。平面は橢円形と推測され上面幅 1.7 m, 深さ 60 cm 以上で低位部 1 の埋土上面から掘り込まれていた。壁面には幅 25 cm の段があり、底部には炭窯の掘形と粘土との間に、しまりのないにぶい黄褐色砂質土（第13図、10 層）を介在させて粘土を貼り付け、底は熱影響により赤化していた。

土壌状炭窯 3 の検出状況から炭窯 1, 2 も本来は低位部 1 の埋土上面から形成されたもので、時期は 8 世紀中葉に推定される。

B, 調査区東半

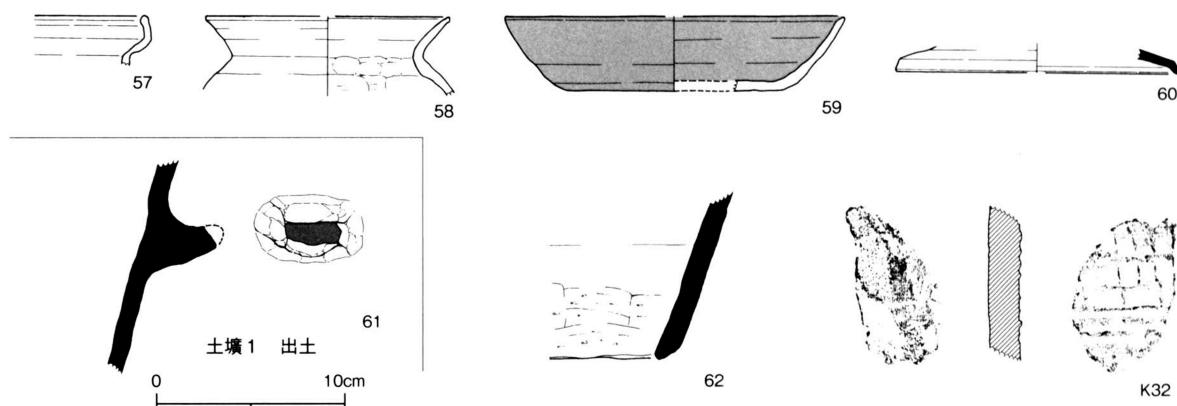
低位部 2

低位部 1 から東に約 14 m 離れて低位部 2 を検出した。幅 9.6 m, 深さ 40 cm 以上を測り、壁面が鋭角であることから溝の可能性もある。確認したいずれの埋土にも土器片、炭粒、焼土粒、基盤土のブロックが含まれ、低位部 1 の埋土と類似した造成土である。低位部 2 の上面からは土壌 1 が掘り込まれ、埋土中より須恵器甌 61 が出土している。甌 61 は黒灰色で角閃石を多く含むなど高坏 28・29, 甌 38 と同質である。低位部 2 は低位部 1 と同様、8 世紀中葉までには埋没したと考えたい。

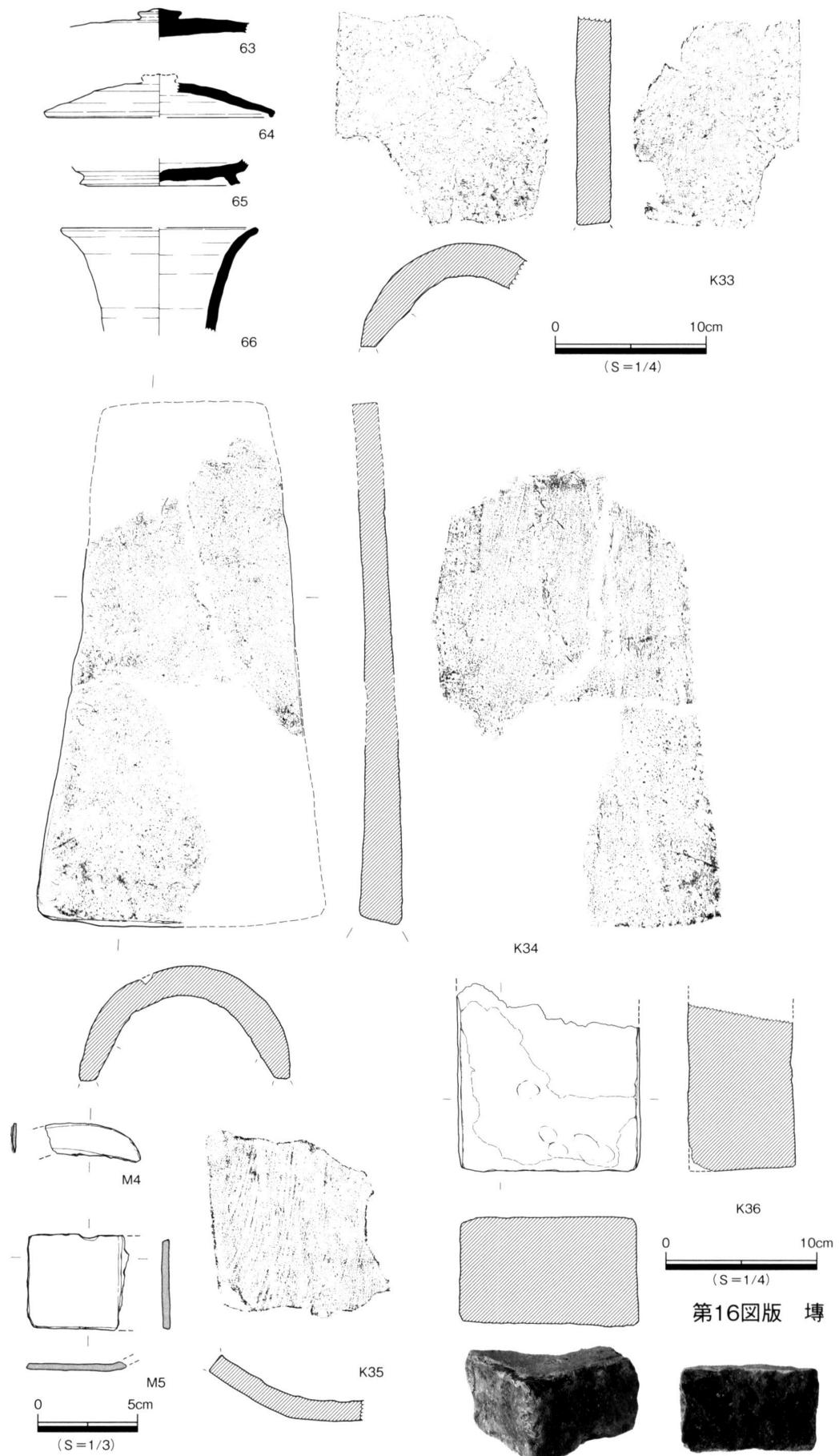
その他の遺構と遺物

断面観察から低位部 2 より東側では竪穴住居が 1 軒、土壌 2 基、柱穴 9 基を検出した。土壌には土質と色調から中世の土壌が 1 基含まれており、柱穴には底部に礎盤石を設置したものも確認した。柱穴の規模は幅 75 cm, 深さ 35 cm 前後の大きな柱穴が多く、掘形も方形でしっかりとした形状のため、7・8 世紀代に比定されよう。

出土遺物は調査区 No. 2 ~ No. 3 間（第 4 図参照）で土師器坏 A 59 が出土し、No. 3 付近では古墳時代初



第16図 調査区東半の出土遺物 (S=1/4)



第17図 調査区東半 道路北側の出土遺物 ($S = 1/3 \cdot 1/4$)

頭の土師器甕57・58と平瓦K32を採集した。平瓦K32は凸面の一次調整が正格子タタキで、二次調整は部分的にナデている。その後、3条の沈線が施されており小片のため断定はできないが、軒平瓦の可能性もある。

No.3～No.4からは須恵器坏B60と須恵器甕62が出土している。

また、調査区の北東部に位置する道路北側（遺物表採地点）において、後日小規模な擁壁の改修が実施された。工事は既設道路の造成土と共に、隣接する水田を一部掘削したものであり、造成土ならびに攪乱土などから須恵器坏63～65、長頸壺66、丸瓦K33・K34、平瓦K35、壇K36、鉄器M4・M5が出土した。

須恵器坏B63～65の内、蓋は天井部が平坦でボタン状のつまみが付く63と、天井部がかさ形となり口縁部を強くナデる64がある。身65は高台が短くハ字形に開き、底部と口縁部の屈折点が明瞭で、底部内面に刺突の跡が見られる。長頸壺66は口縁部が外反し、焼成は堅緻である。

丸瓦K33・K34は粘土板模骨巻きによる成形で、厚さはK33が2.8cm、K34が2.2～3.5cmを測る。凸面調整は斜格子タタキ（長さ8mm）を施した後ヨコナデで仕上げ、側面調整は「面取り1」で、端面は「面取りなし」である。K33は硬質焼成で灰色を呈し、K34は軟質焼成で橙褐色である。

平瓦K35は粘土板桶巻作りで、厚さ1.7cmを測る。凹面には糸切り痕が明瞭に残され、枠板痕の幅は3cmを測り、凸面はヨコナデ、側面調整は「面取りなし」である。軟質焼成で褐色を呈し古相の平瓦である。

K36は直方体を呈し無文で、残存長12.2cm、幅12cm、厚さ7cmを測る。ナデで調整されており、各面とも指頭圧痕をふくむ凹凸があり、断面からは型枠の上から押し込んだ粘土がU字形にひずんでいる。軟質焼成で表面は黄褐色を呈し、断面は黒色である。

鉄製品はM4が鎌の刃部で長さ4.5cm、幅1.6cm、厚さ2mm、重さ5gを測る。M5は板状の不明鉄器で、途中で折れ曲がっているため本来の形状は長方形であろう。長さ5cm以上、幅4.7cm、厚さ3mm、重さ40gを測る。

遺物の時期は須恵器坏B63～65、長頸壺66は8世紀前葉である。K33・K34は7世紀後半新相。平瓦K35は7世紀後半古相に位置付けられる。K36は胎土や焼成が軒丸瓦五類と類似するため、8世紀中葉と考えられる。

低位部2から東側は、古墳時代前期と7～8世紀の土器や瓦が出土した。おそらく、寺域よりも東側には関連施設が展開しているものと見られる。

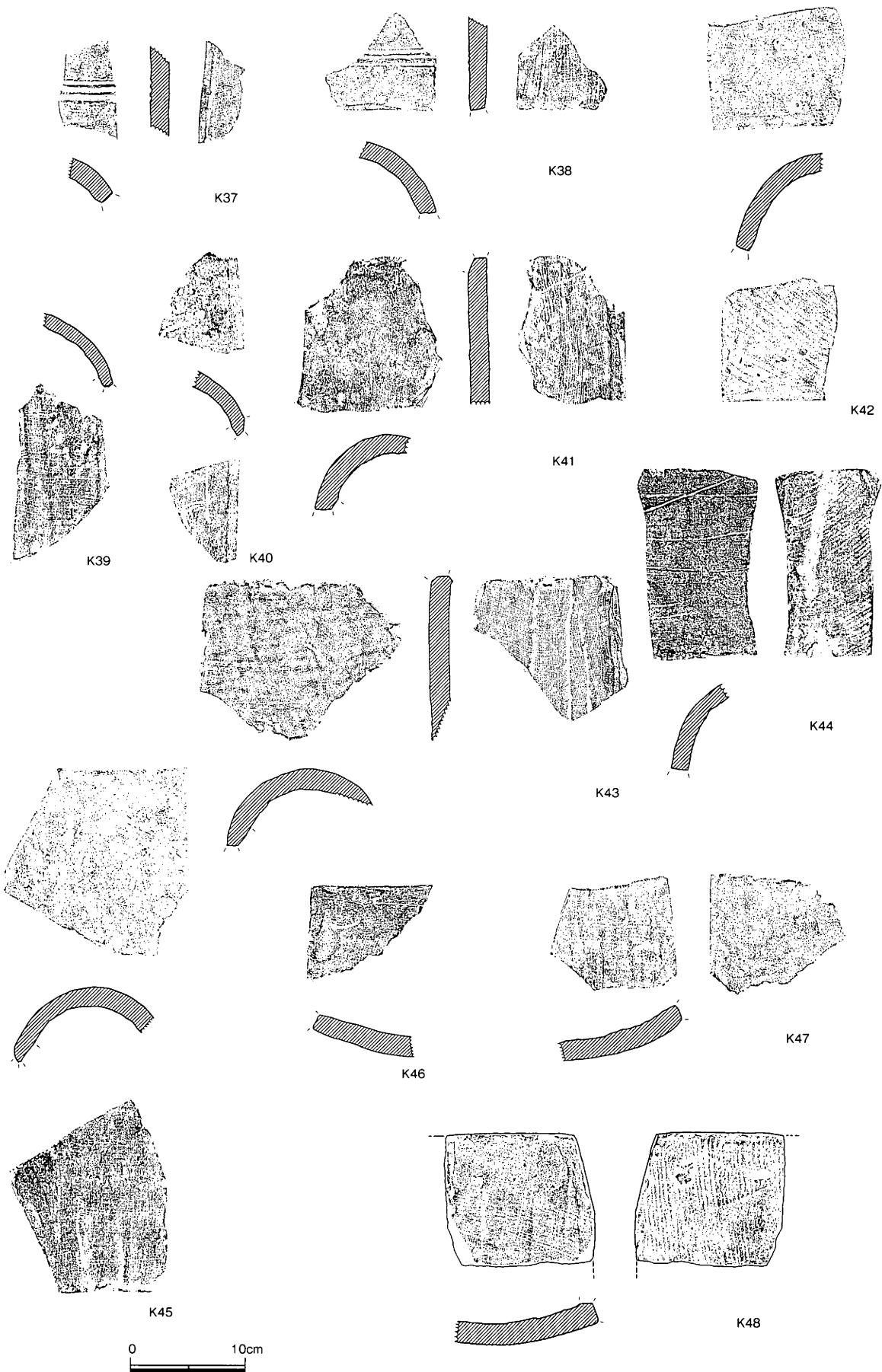
第3節 瓦廃棄土壙の出土遺物

(A) 出土瓦の概要

瓦廃棄土壙ではコンテナ箱にして約35箱分の瓦が出土した。製作技法や胎土の粗密、軒瓦とのセット関係から概ね3つの時代相が認められる。

まず、第1に7世紀後半古相の丸瓦と平瓦はコンテナ箱1箱分が出土し、薄手のつくりで胎土精良である。丸瓦の凸面には3条の沈線を施す資料もあり、軒丸瓦二類と同じ施工方法で古相の瓦であることを示している。

第2に7世紀後半新相の瓦はコンテナ箱33箱分が出土し、軒丸瓦四類、軒平瓦一類・三類、丸瓦、



第18図 瓦廃棄土壌 出土遺物1 (S=1/5)

平瓦が含まれている。厚手の瓦が多く胎土は3mm以下の砂粒を多く含み、軟質焼成で特徴的な灰白色や黄灰色を呈する。今回新たに出土した2点の文字瓦もこの一群に属している。

第3は8世紀の瓦で、コンテナ箱1箱分が出土した。7世紀後半の瓦よりも厚さが薄くなり、胎土はやや粗い。平瓦は一枚作りで、凸面には縄タタキが施される。年代観としては8世紀中葉以降が考えられる。

(B) 7世紀後半古相の瓦群

丸瓦は行基式で玉縁式は出土していない。K37・K38・K40・K41・K42・K44は粘土板模骨巻きによる成形で、粘土板糸切りが顕著なK42・K45がある。K45は粘土紐模骨巻きによる成形で、狭端の側面を斜めに切り落としている。瓦の厚さは1.5~1.8cmと薄い。分割時の破面をそのまま残すものではなく、ヘラケズリによる調整を行っている。

凹面は布目圧痕が7~11本/cmでK39とK43には枠板痕?が認められた。凸面は一次調整が不明であるが、強いヨコナデにより仕上げられている。K37・K38には3条の沈線が施されている。側面調整はK37・K38・K42・K44・K46・K47が「面取りなし」で、「面取り1」はK39・K41・K43、「面取り2」はK40・K45で確認できる。端面は「面取りなし」がK38・K43、「面取り1」がK41である。軟質焼成の瓦が多く、色調は灰白色・褐色などがある。

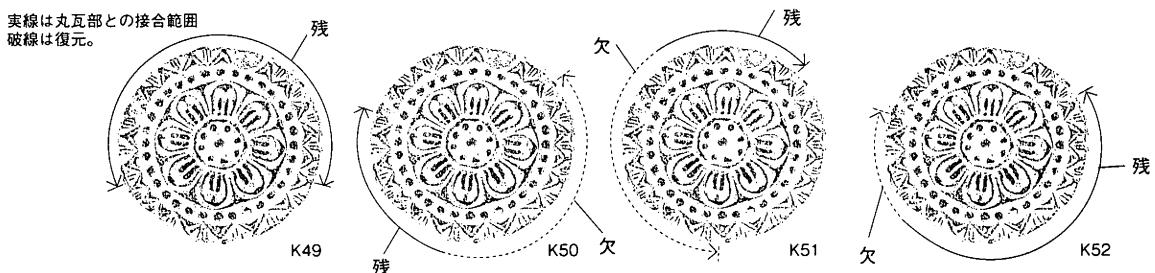
平瓦のK46は粘土板桶巻作り、K47は粘土紐桶巻作りで、枠板痕は2.3~3cmを測り、瓦の厚さは1.8cmである。平瓦K48は粘土板桶巻作りで、厚さ1.9cmを測る。凸面の一次調整は縦方向の細い縄タタキで、凹面は枠板痕の幅が2.3~2.7cmを測り、布目は8本/cmである。側面調整は「面取り1」で狭端側の端をわずかに切り取っている。胎土はやや粗く、軟質焼成で灰白色を呈することから判断はむつかしいが、新相の可能性もある。

(C) 7世紀後半新相の瓦群

軒丸瓦

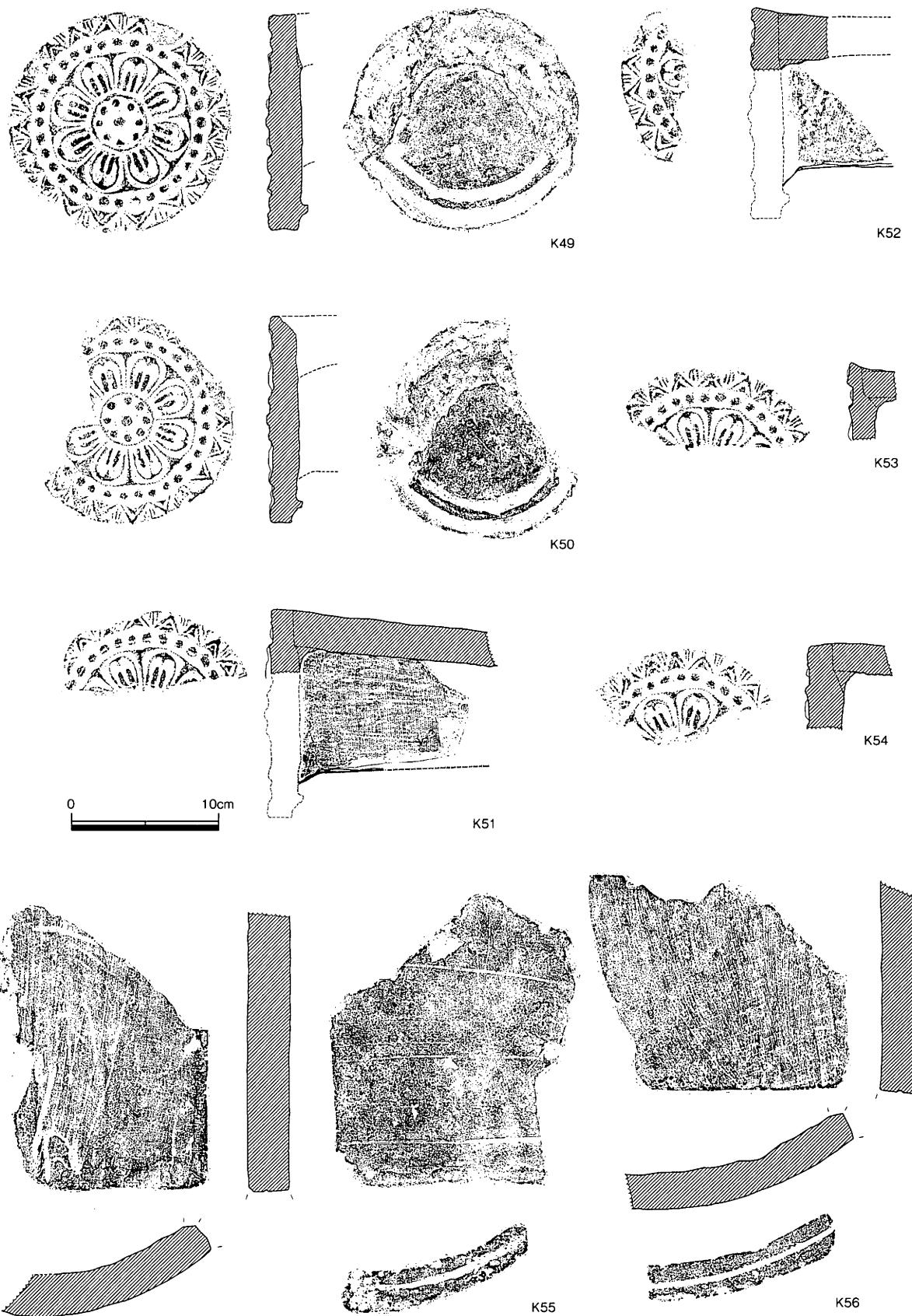
複弁八弁蓮花文軒丸瓦K49~K54は軒丸瓦四類に該当する。径約15cm、厚さ約2cmを測る。外縁には21個の重鋸歯文を配し、その間を放射三線で埋めて飾り珠文32個を置く。内区の蓮花文は小さくまとまり、各弁には2子葉を入れ間弁を長く大きく表現する。中房には1+8と蓮子をつける。瓦当裏面はナデて調整し、下半には高さ5mm、幅5mmを測る突帯が弧状に貼り付けられている。

丸瓦部の厚さは1.9~2.9cmを測り、瓦当部と丸瓦部の接合は瓦当部円盤の上端に、丸瓦の広端面をあて、接合部内面には厚く外面には薄く粘土をはりつけているため、瓦当部上端はわずかに反りをもつものがある(K52・K53)。胎土は3mm以下の砂粒を多く含みやや粗く、焼成も全体的に甘く色調

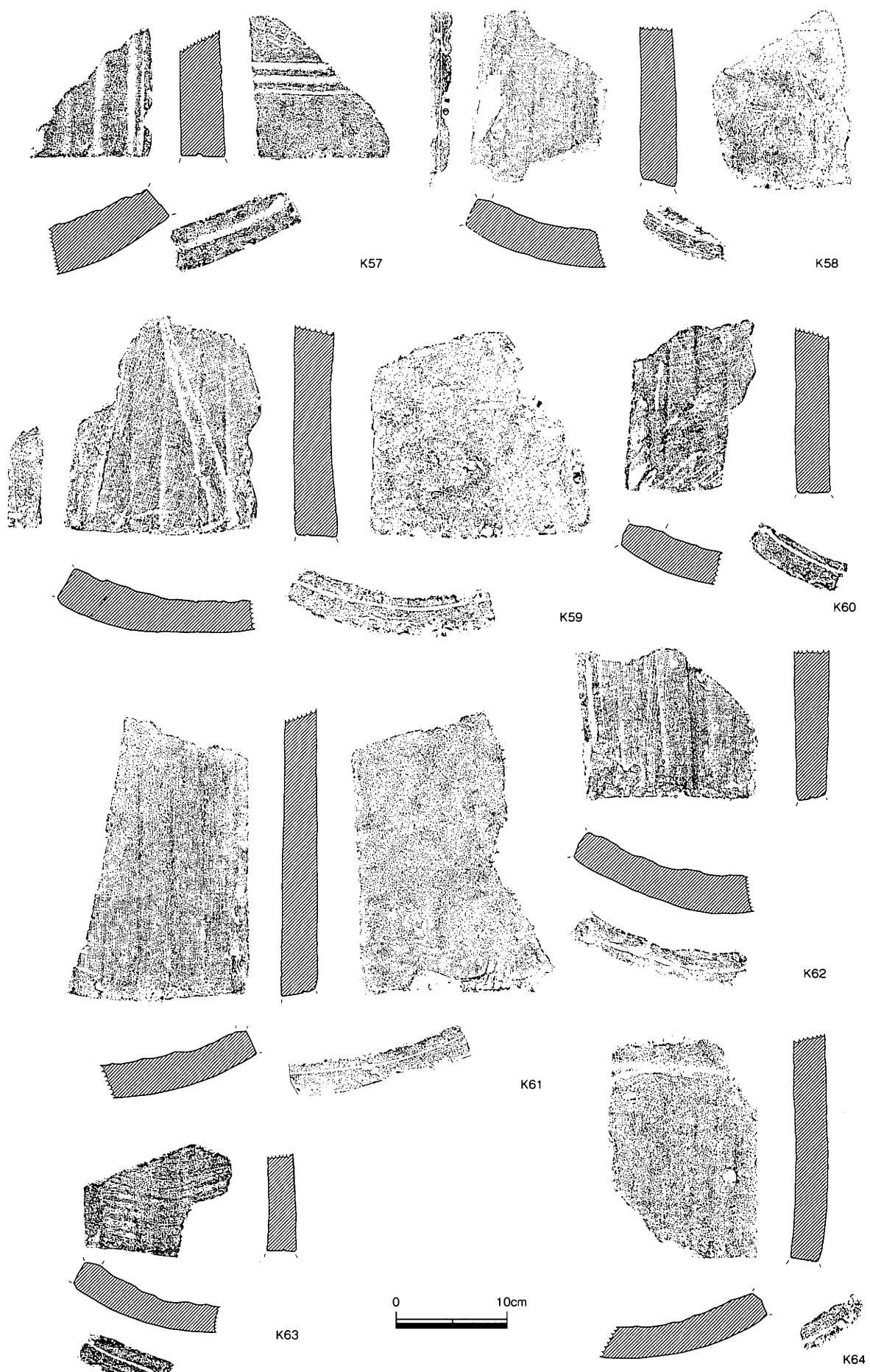


第19図 瓦当部と丸瓦部の接合関係模式図 (S=1/6)

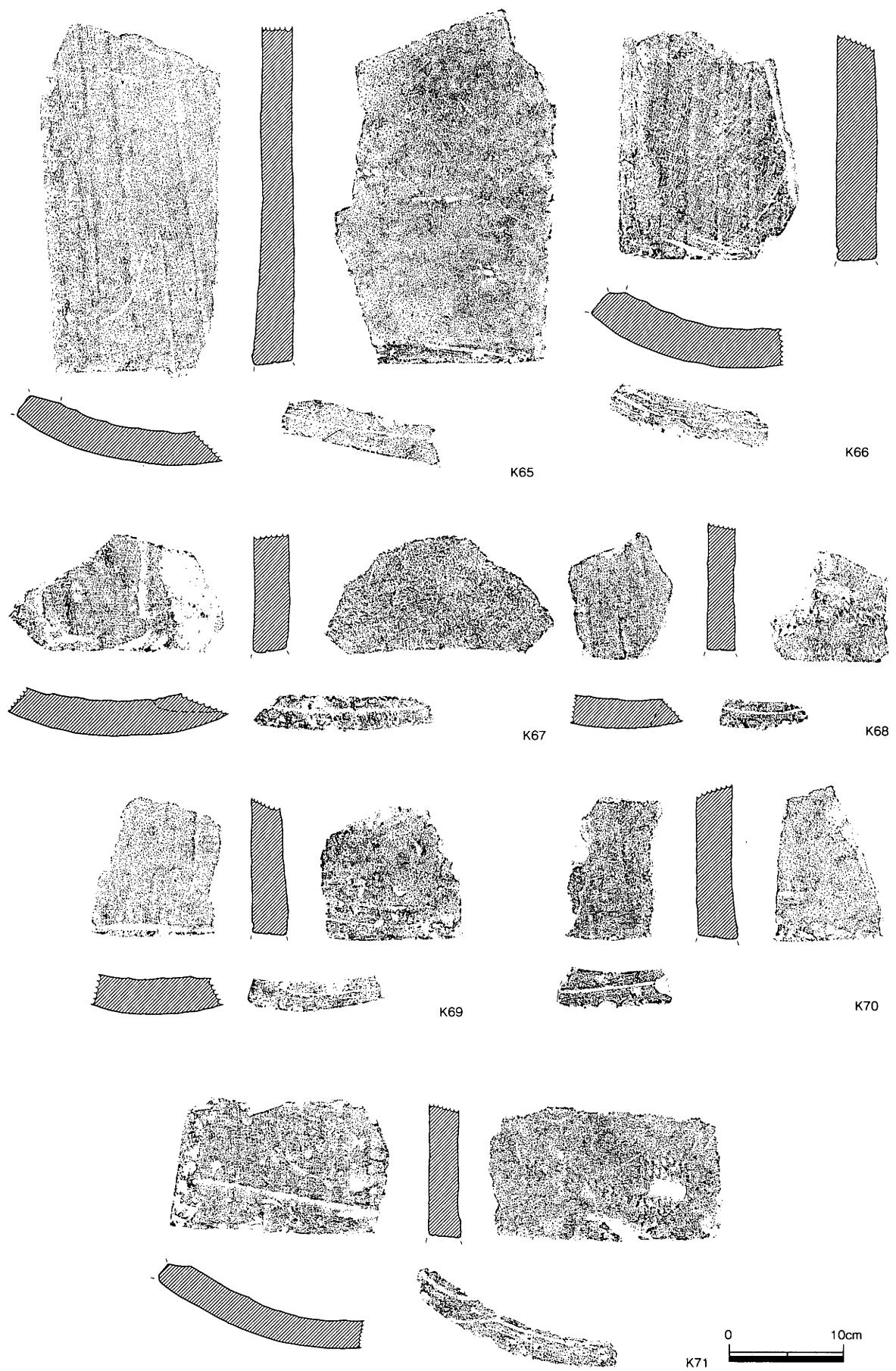
拓本はK49をモデルとする。



第20図 瓦廃棄土壌 出土遺物2 軒丸瓦・軒平瓦 (S=1/4)



第21図 瓦廃棄土壙 出土遺物3 軒平瓦 (S=1/5)



第22図 瓦廐棄土壤 出土遺物4 軒平瓦 (S=1/5)



第23図 瓦廃棄土壤 出土遺物5 軒平瓦 (S=1/5)

は暗灰色・灰白色などがある。

瓦当部と丸瓦部の接合は未加工のまま接合されており、接合位置がわかる軒平瓦K49～K52から第19図の模式図を作成した。接合位置からは規則性が認められないため、木范自体が方形でないことがわかり、随意に接合したと見られる。

軒平瓦

重弧文軒平瓦K55・K56・K58～K77は軒平瓦一類に該当し、K57は三類である。重弧文は浅い沈線で表現され、1条のK55～K72と、2条に引いたK73～K77がある。沈線は比較的太く表現するK55～K58や、細く表現するK61・K65・K72があり、K75のように1条から途中2条へ移行する施文も認められた。K57は顎面施文軒平瓦で厚さ4.2cmを測り、凸面にはヨコナデの後、3条の沈線と波状文を施す。軒平瓦の厚さは2.5～4.2cmものがあり、概ね3cm前後である。

文様は基本的に平瓦の広端面に施文するものがほとんどであるが、K61・K62・K65には狭端面に施されている。顎は全て直線顎であり、顕著な成形は認められない。顎面には凸面調整時の斜格子タタキがヨコナデにより消されず、端縁に残存しているK70もあるが、あくまでも一次調整にすぎず顎を意識したものではない。

製作技法は全て粘土板桶巻作りで、粘土板の接合痕がわかる資料としてK59・K67・K68があり、K59・K68は右回り、K67は左回りである。

凸面は斜格子タタキの後、ヨコナデで仕上げる軒平瓦が多い。凹面には7本～13本/cmまでの細い布目圧痕が認められる。梓板痕の幅が1.8～3.7cmまでのものがあり、概ね3cm前後である。またK57・K62・K73・K75には分割界線が側面側に残存し、端面にまで及んでいる。

側面調整は「面取りなし」がK57・K59ほかで、「面取り1」はK58・K60などがあり、端面は「面取りなし」である。

硬質焼成で暗灰色等を呈するものもあるが少なく、むしろ軟質焼成で灰白色系の軒平瓦が多い。

丸瓦

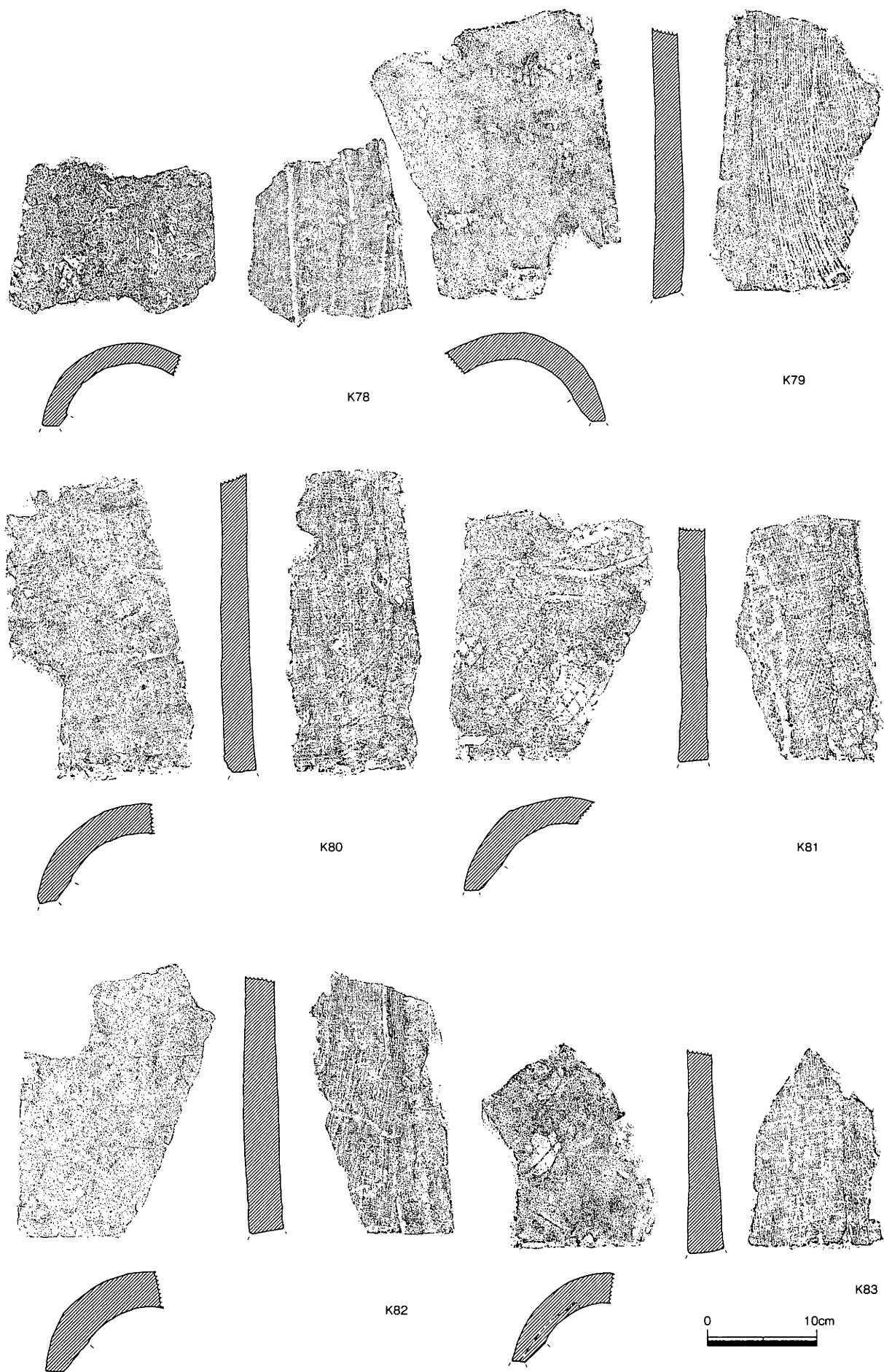
丸瓦は行基式で厚さは3cm前後が多く、厚手の作りである。全て粘土板模骨巻きによる成形で、粘土板糸切り痕が認められるのはK79～K82・K84・K87～K89・K91・K92・K94・K98がある。粘土板接合痕が観察できる丸瓦は左回りがK86・K89・K91と、右回りK83・K93・K94・K99・K102があり、右回りが多い。

凸面の一次調整には斜格子タタキのうち、概ね1cm四方の大きな格子がありK78・K81・K83～K85にその圧痕が見られる。丸瓦の一次調整に多く使用されているが、平瓦にはこの種のタタキは認められなかった。小さな斜格子（長さ約7mm）が残る丸瓦はK100・K101・K103・K104があり、量的には少ない。この斜格子タタキは平瓦で使用されている斜格子タタキと同じで、平瓦ではむしろ主流である。二次調整は全てヨコナデで仕上げ、一次調整をすり消している。凹面の布目圧痕は8～11本/cmと細かい。

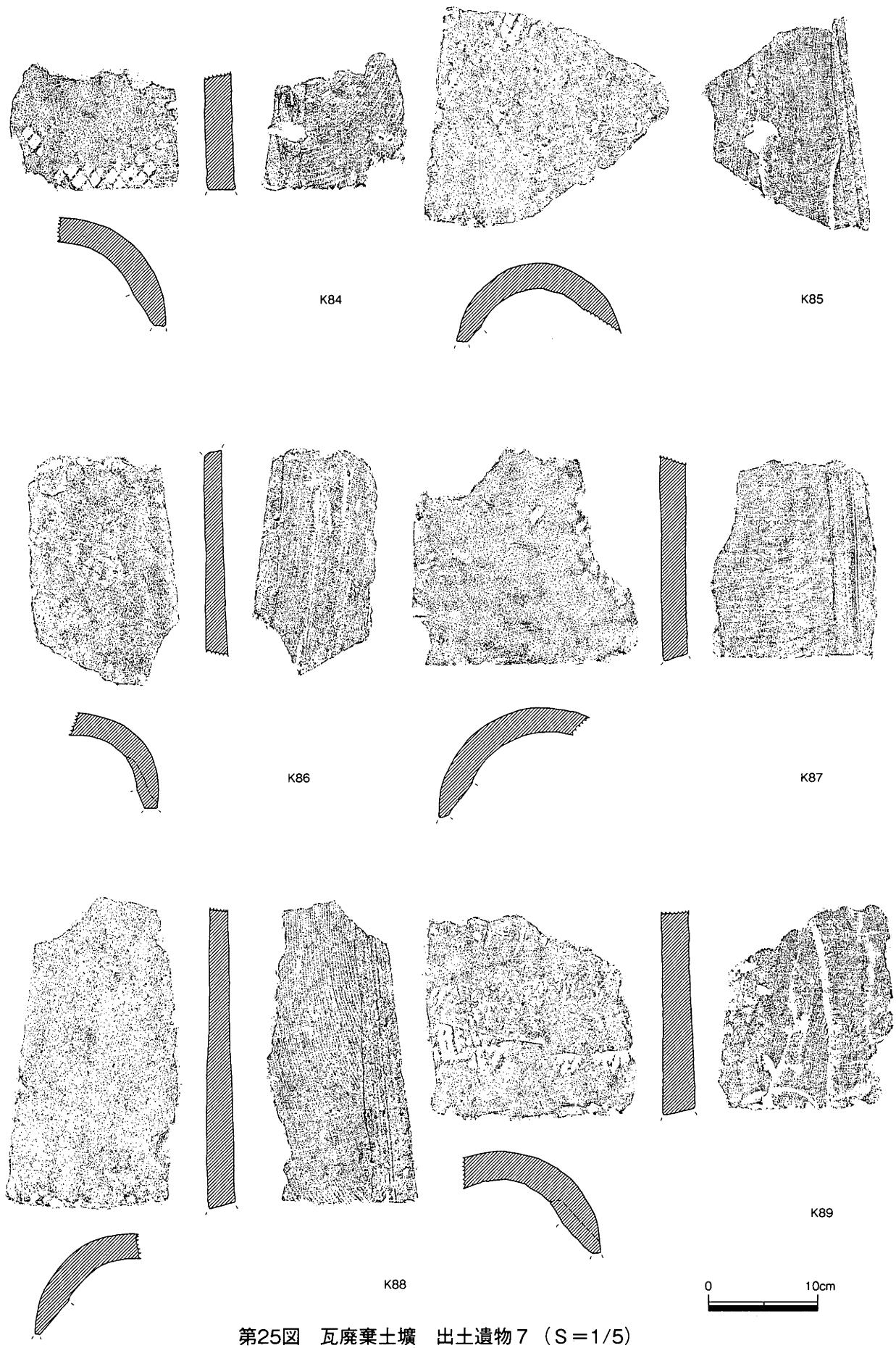
側面は凹面側の側縁を削りとる「面取り1」が多く、「面取りなし」はわずかにK100があり、端面は「面取りなし」がほとんどである。胎土はやや粗く3mm程度の砂粒を多く含んでいるが、良く締まっている。軟質焼成の丸瓦は灰白色・黒灰色などを呈し、硬質焼成は暗灰色系である。

平瓦

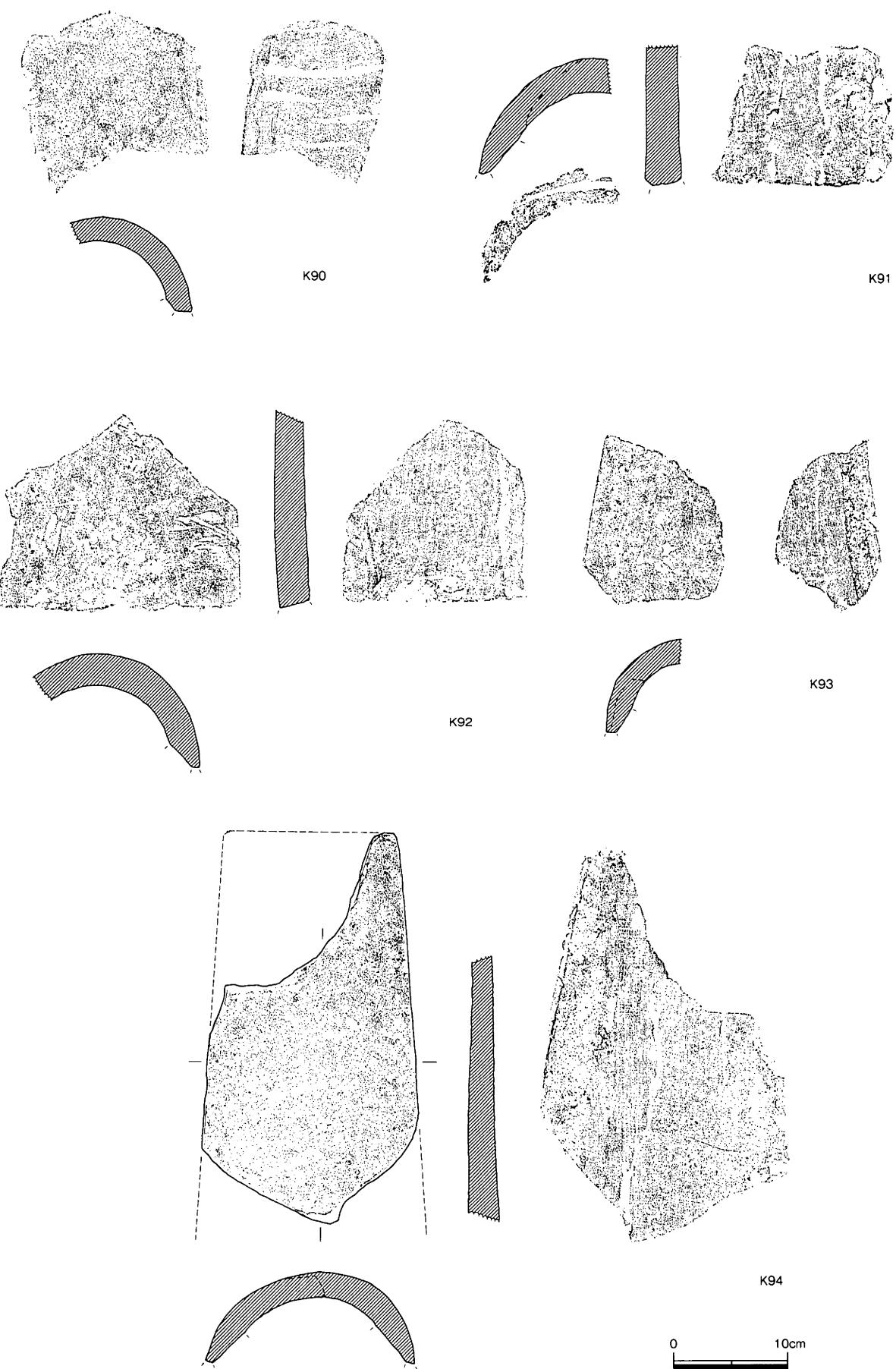
平瓦はK105～K149で厚さ3cm前後である。凸面の一次調整は斜格子タタキ、正格子タタキ、繩タ



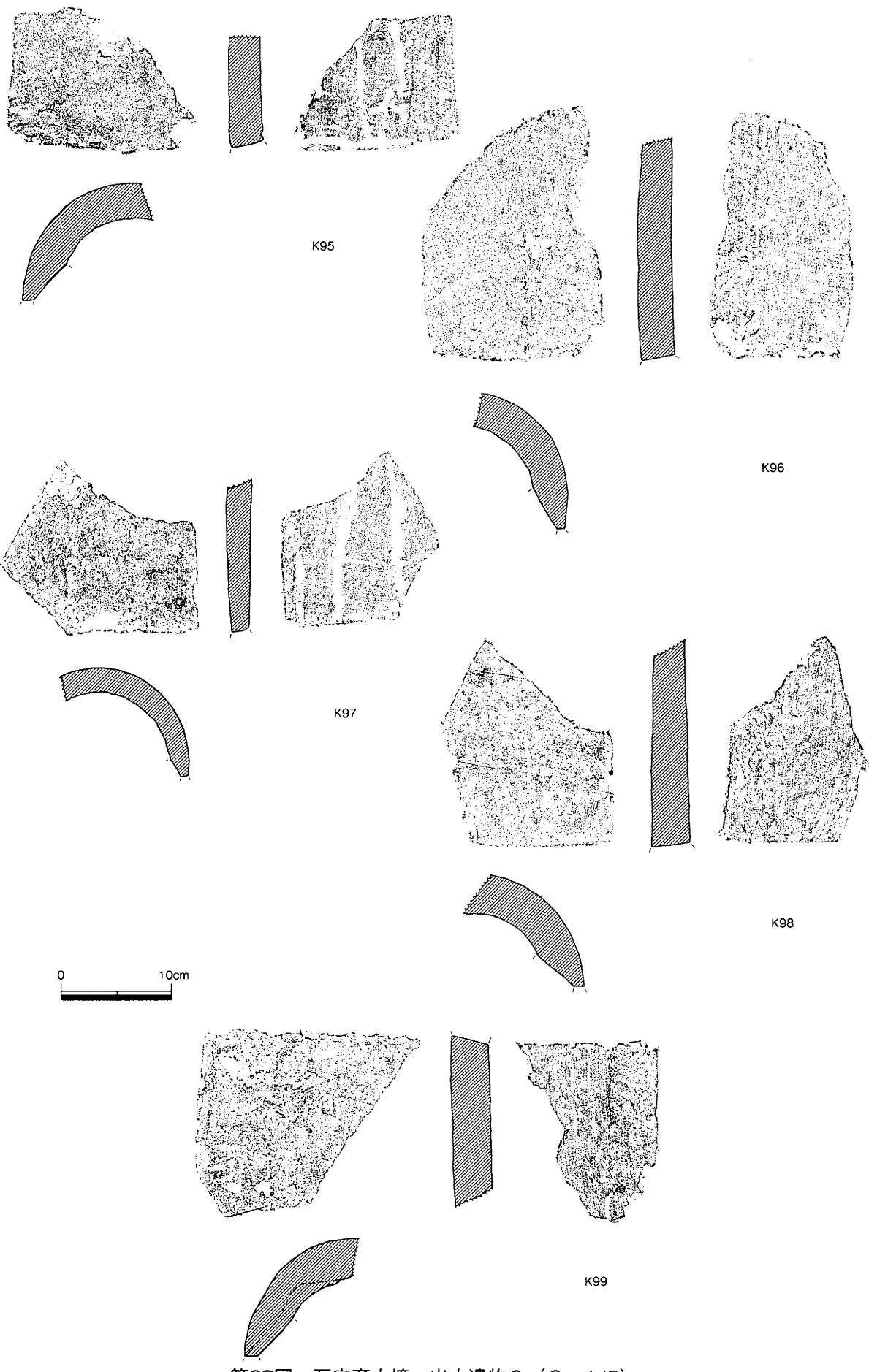
第24図 瓦廃棄土壤 出土遺物6 (S=1/5)



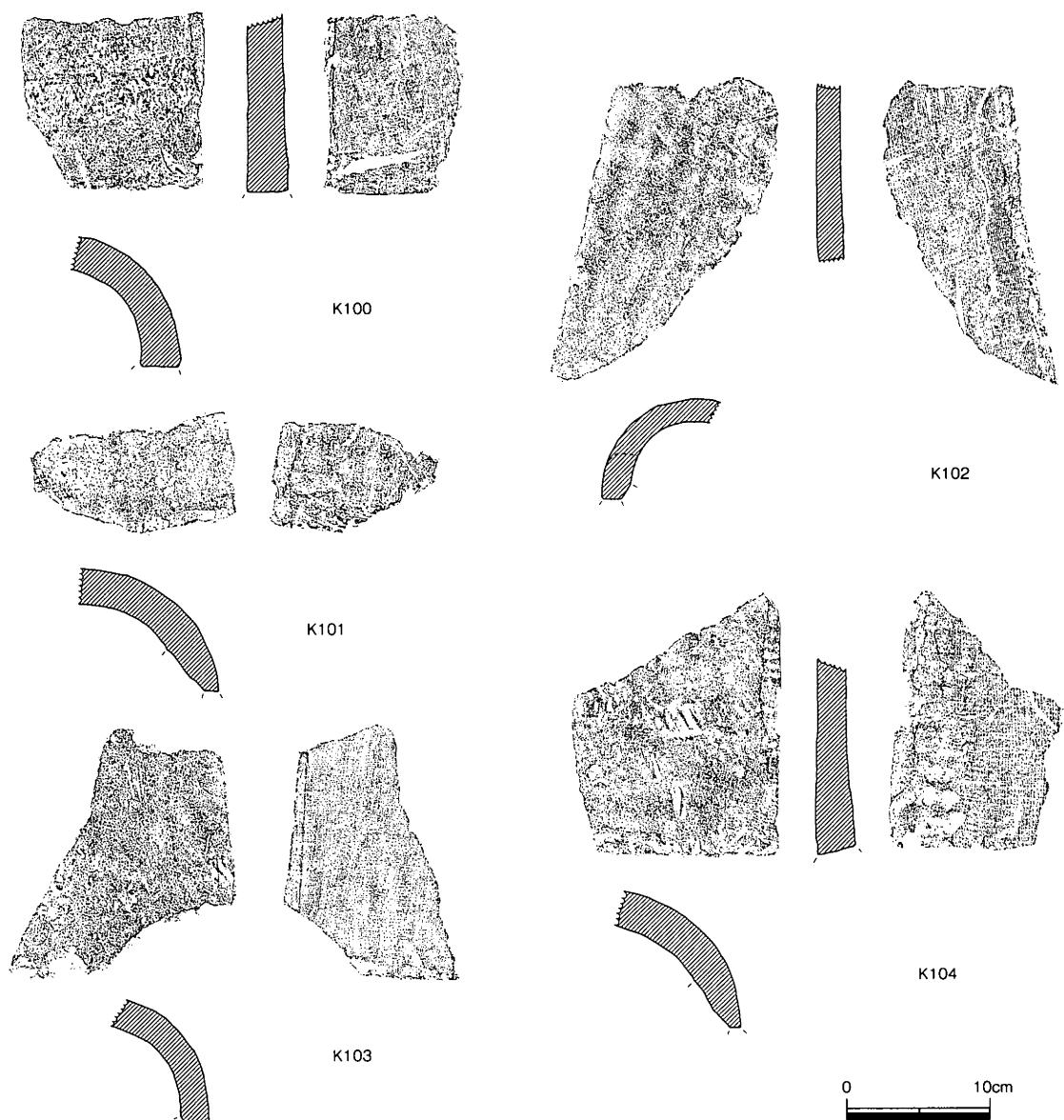
第25図 瓦廃棄土壤 出土遺物 7 (S=1/5)



第26図 瓦廃棄土壤 出土遺物8 (S=1/5)



第27図 瓦廐土壤 出土遺物9 (S=1/5)



第28図 瓦廃棄土壌 出土遺物10 (S = 1/5)

タキがあり、この中でも斜格子タタキが主流で、正格子タタキと平行タタキは非主流である。二次調整はほとんどの平瓦が強いヨコナデにより丁寧にすり消している。

側面調整には「面取りなし」と「面取り1」があり、端面は「面取りなし」がほとんどである。胎土は粗雑ながら良くしまっており、軟質焼成で黄灰色や灰白色を呈するものが多い。

以下では一次調整の主流を占める斜格子タタキと、非主流の正格子タタキ・平行タタキに大別して説明する。また、斜格子タタキでは側面調整に違いがあることから、「面取りなし」と「面取り1」に分け、二次調整のヨコナデが強い一群についても掲載した。

(1 a) 側面調整「面取りなし」

「面取りなし」の平瓦は、成形に伴い側縁を削らない一群であるが、ここでは分割時に内側よりヘラを入れ、まくれた粘土を搔き取る程度の浅い削りは「面取りなし」として含めている。

K 105～K 125は粘土板桶巻作りで、糸切り痕はK 107・K 108・K 111～K 114で確認できる。粘土板の接合痕はK 109・K 110・K 112・K 114・K 116・K 120・K 121・K 123～K 125で確認でき、右

回りはK109・K112・K116・K123・K125で、左回りはK110・K114・K120・K121・K124である。また、接合面に糸切り痕が残ったK125や、接合面に補充粘土を加えたK123が見られる。

凸面調整ではまず、斜格子タタキのみで二次調整を行わないK105があり、瓦の厚みは2cmと薄く、胎土もやや緻密である。時期は判然としないが、7世紀後半古相の可能性もある。

次にK106～K112は斜格子タタキで、その後ヨコナデですり消している。

凹面は布目圧痕が8本～11本/cmと細く、枠板痕は幅1.8～3.2cmまでのものがあり、K107・K108には分割界線が端面まで及んでいる。側面は分割界線にそって内側からヘラを入れ、破面を再度ヘラケズリで仕上げている。

胎土は3mm程度の砂粒を含みやや粗く、硬質焼成は青灰色・灰色などを呈し、軟質焼成は灰色系である。

(1 b) 側面調整「面取りなし」で凸面の二次調整が顕著な平瓦

平瓦K113～K125は側面調整が「面取りなし」の一群で、凸面の二次調整が強いヨコナデの平瓦を抽出したものである。認識される大多数の平瓦がヨコナデによるもので、わずかにタタキの残痕が観察できる。K117の広端面には1条の沈線が施文されているが、途中で終了しているため平瓦としてあつかった。

K116・K117・K119・K121・K124の凸面には、かろうじて一次調整が判別できる斜格子タタキが施されているが、これらの平瓦は二次調整の強いヨコナデによりすり消されている。また二次調整が広端まで及んでいないK113・K114には帶状に斜格子タタキが認められるものの、意図的に作り出したものではない。

凹面は布目圧痕が7～11本/cmと細い布を使用しており、枠板幅は1.8～4cmとバラツキがある中で、3cm前後のものが多い。分割界線はK115・K118・K120・K124・K125にあり、端面にまで確認できる。

胎土はやや粗いがしまっており、硬質焼成の色調は青灰色・灰色などがあり、軟質焼成は灰白色系や黄灰色系がある。

(2) 「面取り1～3」の平瓦

側面調整の「面取り1」はK126・K128～K131が該当し、「面取り2」はK132、「面取り3」はK127がある。粘土板桶巻作りの成形で、粘土板糸切り痕が認められる平瓦はK127・K129・K131・K132がある。K128は粘土板の接合痕が観察でき左回りである。

凸面の一次調整は斜格子タタキK126・K129と正格子タタキK127が認められ、二次調整は全てヨコナデで仕上げている。

凹面の布目圧痕は7～10本/cmで、枠板痕は幅1.7～3.4cmまでのものがある。

胎土は砂粒を多く含みやや粗いが、焼成はK126・K128・K129が硬質焼成で灰白色を呈し、軟質焼成は黒灰色、黄橙色などである。なお、K127の凸面には落葉樹の葉が付着した葉脈痕が認められた。

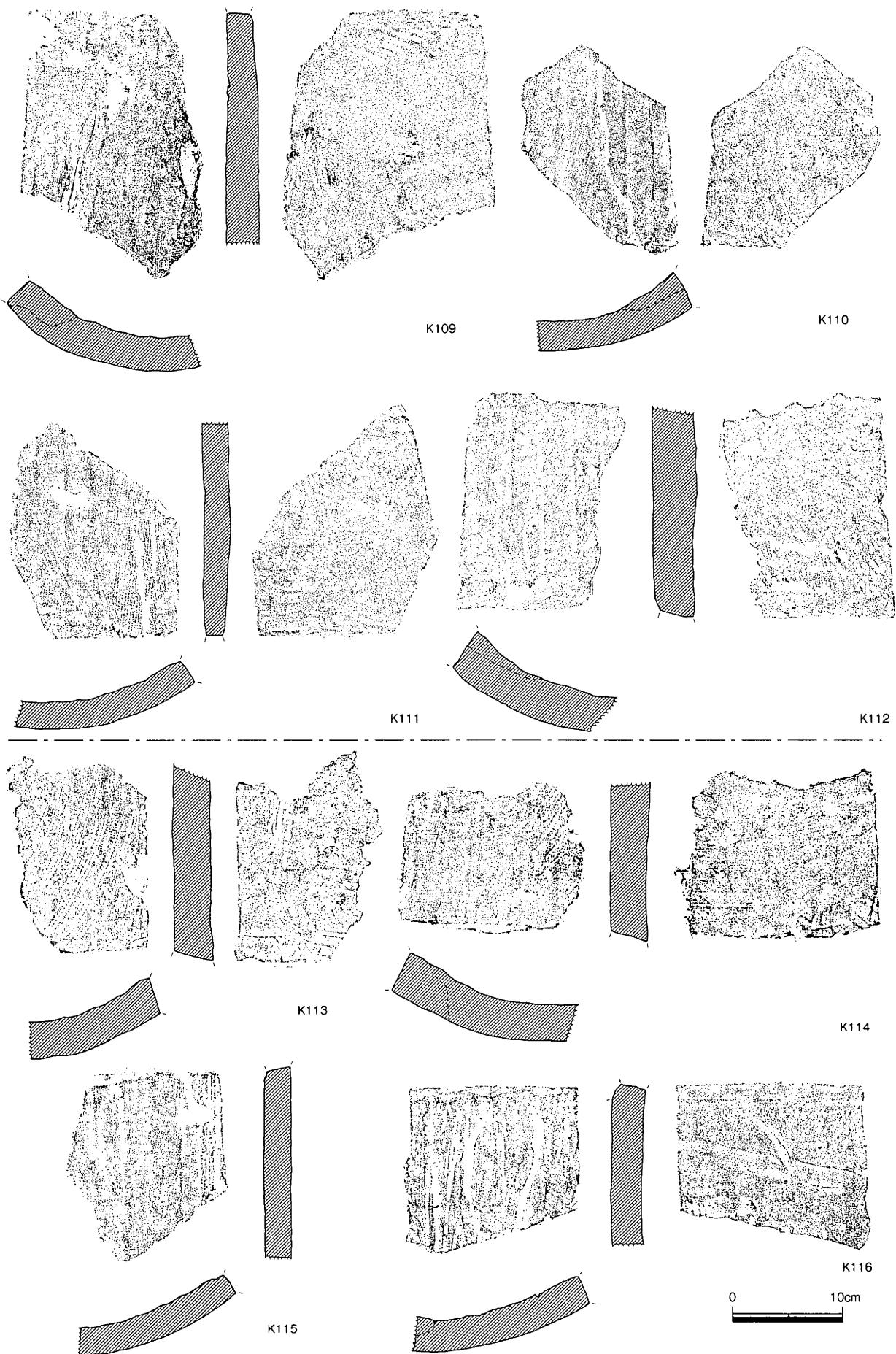
(3) 正格子タタキ、平行タタキの平瓦

平瓦K133～K139は凸面の一次調整が正格子タタキK133～K136と、平行タタキK137～K139の平瓦を抽出したもので量的に少ない。全て粘土板桶巻作りによる成形で、粘土板の糸切り痕が顕著なK133・K135・K138・K139があり、K135には左回りの接合痕が認められる。

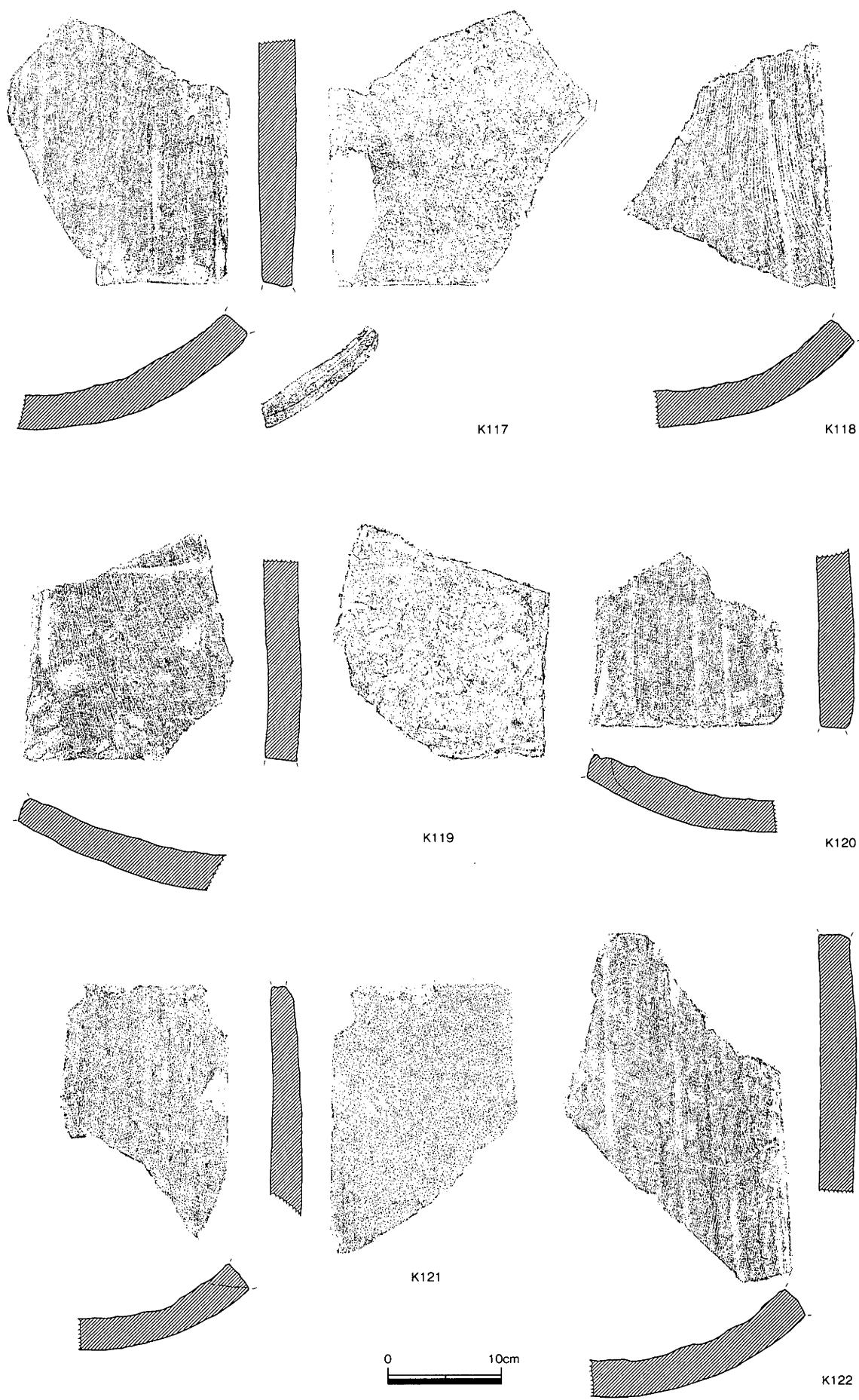
瓦の厚さは2.2～3.2cmのものがあり、これまで述べてきた7世紀後半新相の瓦と同じである。一次



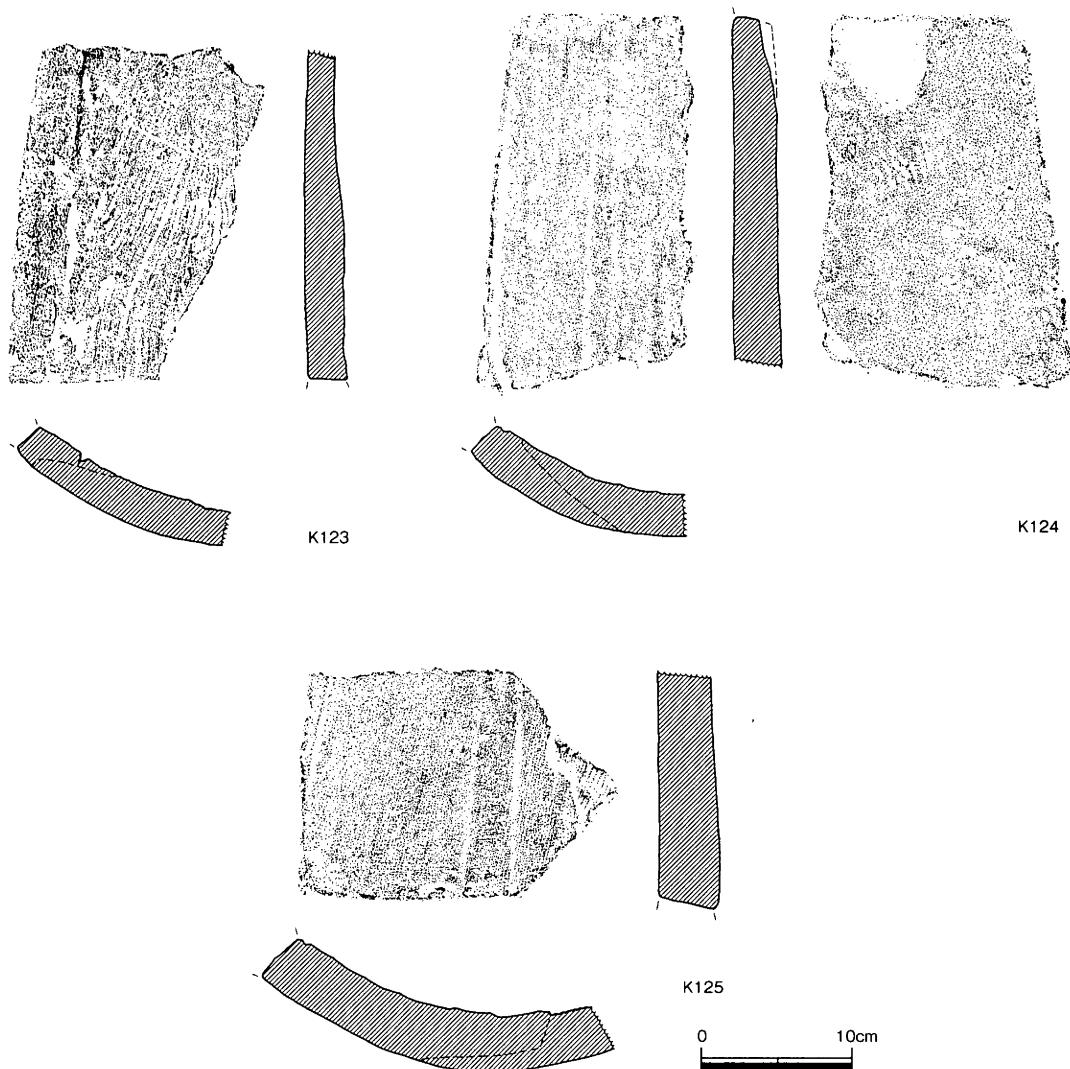
第29図 瓦廃棄土壤 出土遺物11 (S=1/5)



第30図 瓦廃棄土壤 出土遺物12 (S=1/5)



第31図 瓦廃棄土壌 出土遺物13 (S=1/5)



第32図 瓦廃棄土壌 出土遺物14 (S=1/5)

調整は、まず正格子タタキのK133～K136があり格子目が約6mm四方と大きく、K136の狭端には二次調整から免れたタタキ痕が残る。

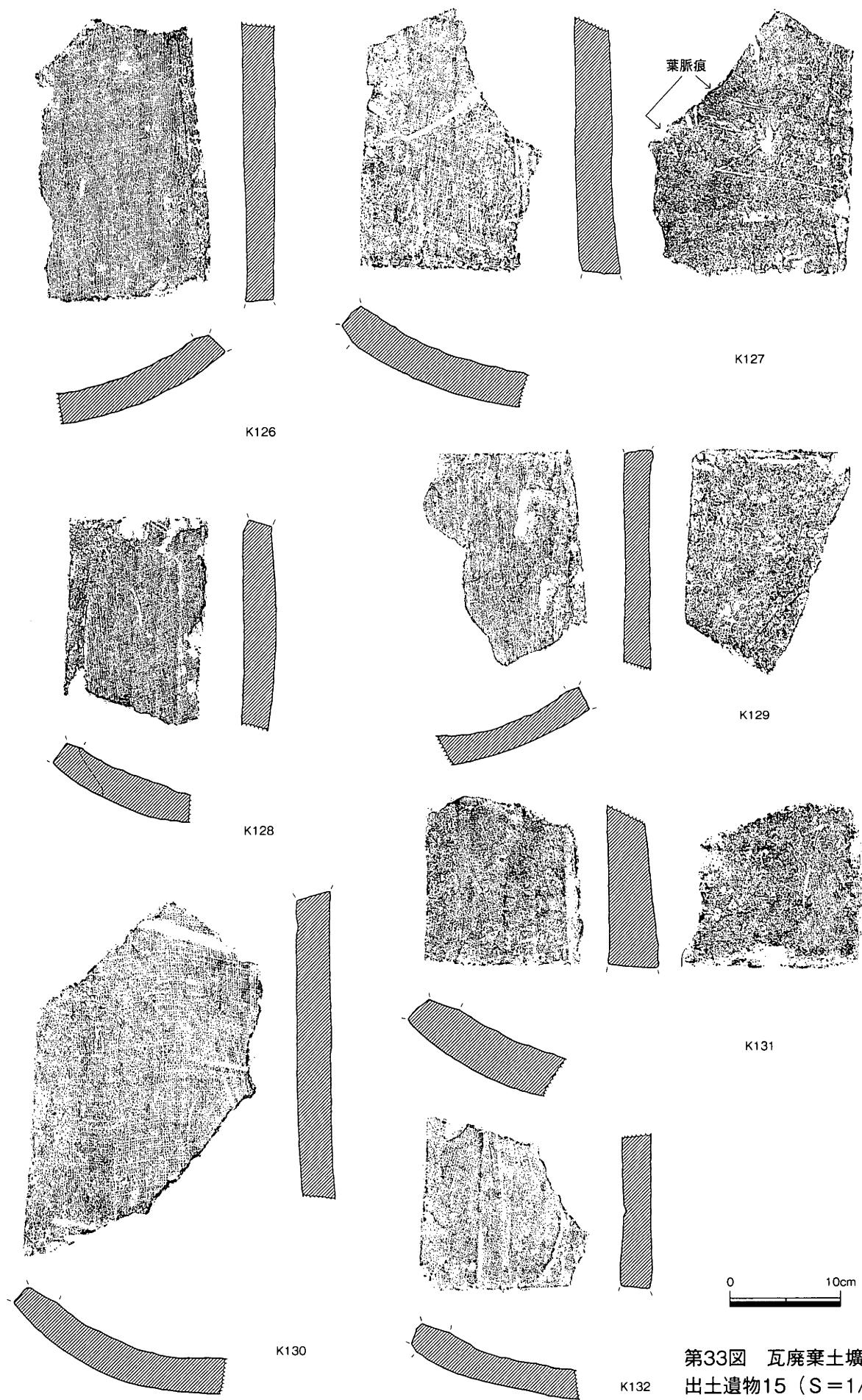
次ぎに平行タタキはK137～K139があり、K137・K138はタタキが太く、K139はタタキが細い。K138の平行タタキは部分的に斜格子状になる所もあり、原体幅は5cmを測る。

二次調整はいずれもヨコナデで仕上げられている。凹面は布目圧痕が6～9本/cmとやや粗く、枠板痕は1.7～3.2cmまでのものがあり、K138・K139には分割界線が認められる。胎土は3mm程度の砂粒を含みやや粗く、軟質焼成のK134・K137・K138・K139は灰白色・黄灰色などの色調で、硬質焼成のK133・K135・K136は灰色系である。

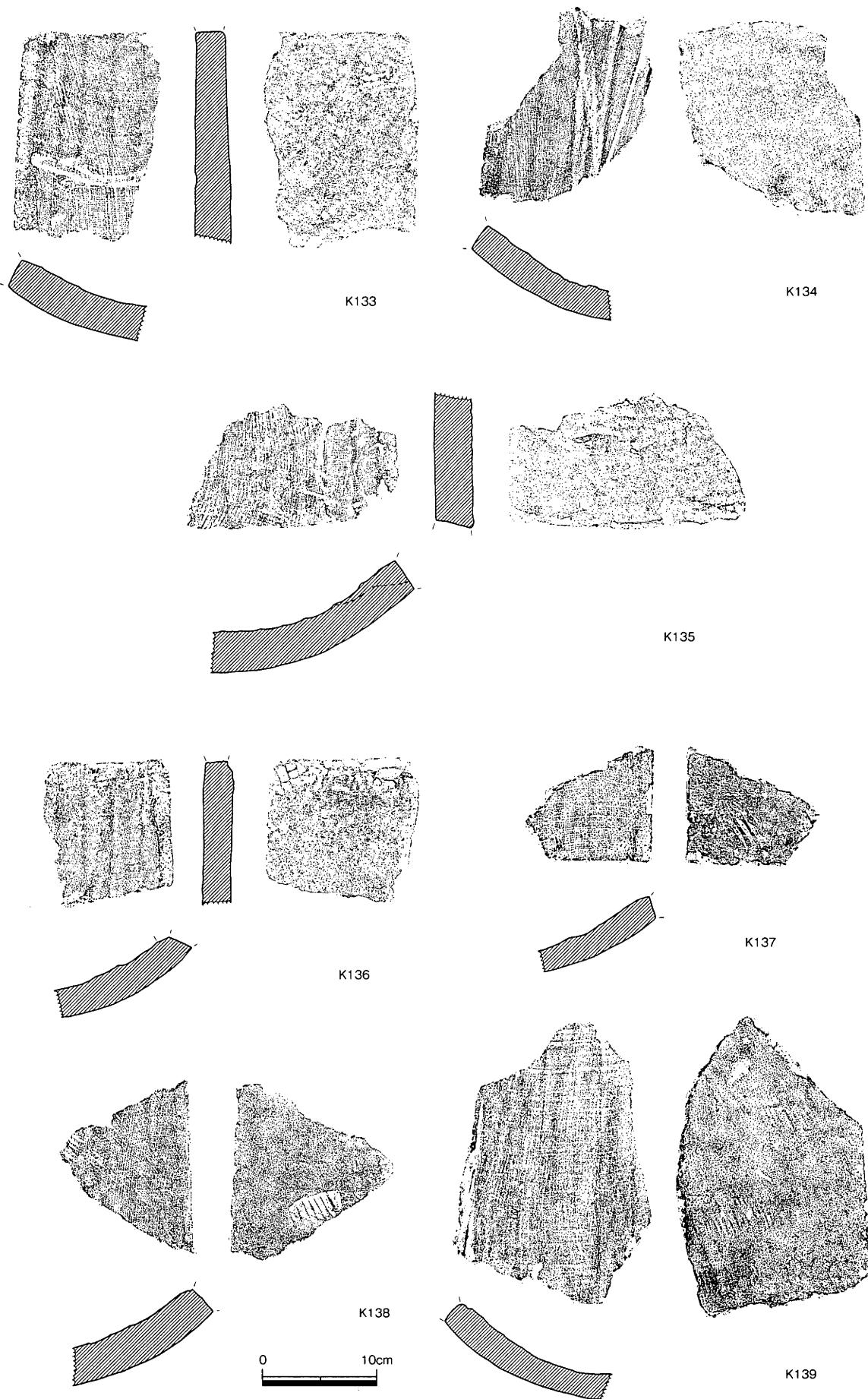
(4) その他の瓦

瓦廃棄土壌から特徴的な瓦がわずかに出土しているため以下に説明する。軒丸瓦四類K140は瓦当部が欠損しているが、丸瓦部を直接接合している資料で、端面には接着をよくするための刻み目などはない。側面は「面取り1」で瓦当裏面はナデで仕上げている。

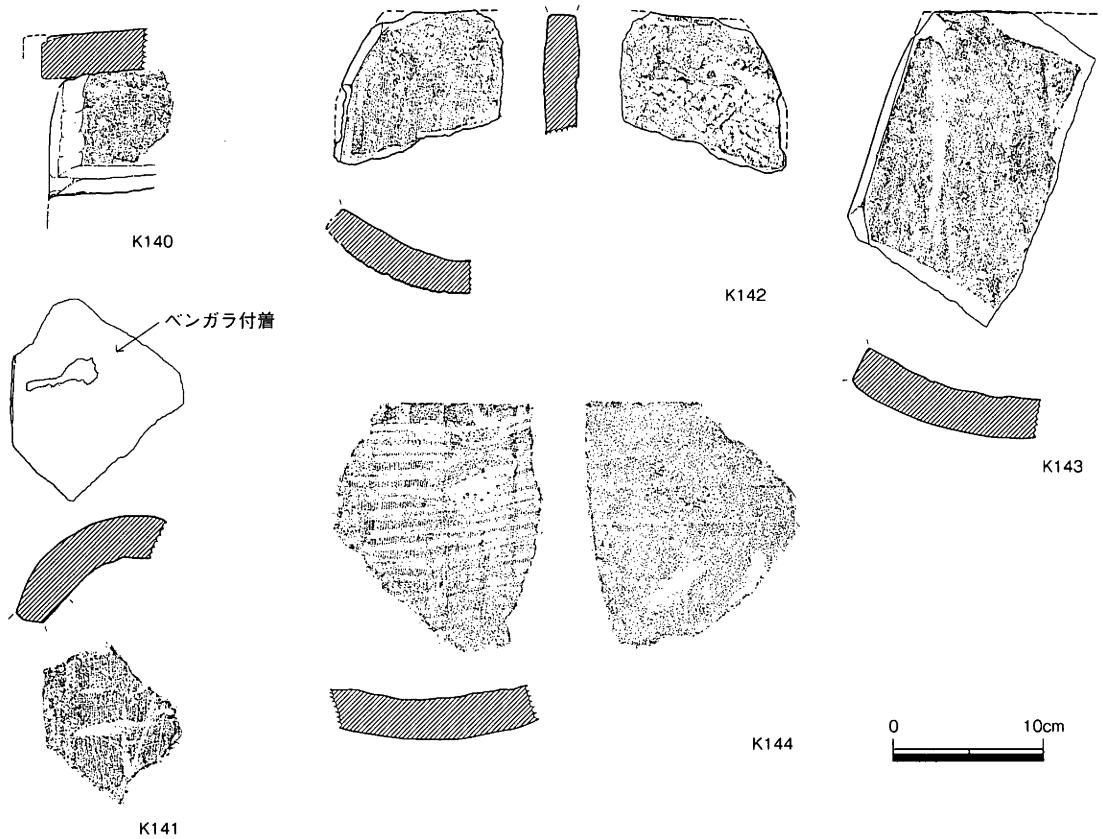
丸瓦K141の凸面には赤色の付着物（ベンガラ）が認められる。成分分析を実施したため、詳細は第VI章を参照されたい。



第33図 瓦廐土壤
出土遺物15 (S=1/5)



第34図 瓦廃棄土壤 出土遺物16 (S=1/5)

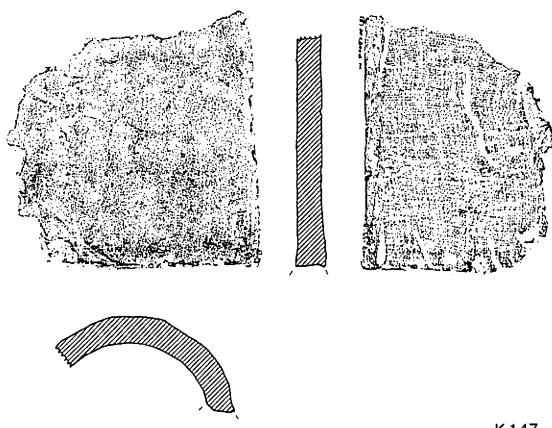


0 10cm

K141



K146



K147

第35図 瓦廃棄土壤 出土遺物17 (S=1/5)

平瓦 K 142・K 143は側面の端を鈍角に切り取り整形しているが、切り取りが浅いため隅切瓦とは断定できなかった。K 142の凸面は斜格子タタキの後に、二次調整を欠く希少な事例である。また、K 143には凹面にヘラ記号と考えられるX状の浅いヘラ記号が認められた。平瓦 K 144の凹面には布目圧痕の上に、細長い縦線と幾状もの横筋が付着しており K 63にも同じ圧痕が見られる。

(D) 8世紀の瓦

平瓦 K 145・K 146は一枚作りで、厚さ2.1～2.5cmを測りK 146に粘土板糸切り痕が認められる。凸面は縦方向の縄タタキを施し、K 145が太くK 146が細かい。側面はK 145が「面取り3」で、端面はK 146が「面取り1」である。いずれも軟質焼成で黒褐色・暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多分に含み粗い。

丸瓦 K 147は粘土板模骨巻きで、凸面は縦方向の縄タタキの後にヨコナデで仕上げている。側面・端面とも「面取りなし」である。

第4節 瓦廃棄土壌出土の文字瓦

(1) 文字瓦釈読の凡例

瓦廃棄土壌から出土した瓦の中には、文字瓦が2点含まれていた。2点とも破損品であり、軒平瓦か平瓦かを特定することは困難なため、広義の意味において平瓦としている。

A) 釈文（第IV章 P54参照）

- ・漢字は正字体、常用字体の中から原文の字に近い字体を選んで使用した。
- ・釈文に加えた符号は次の通りである。

□□□ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。

[] 校訂に関する註で、原則として釈文の右傍に付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

カ 註で疑問の残るもの。

B) 文字の位置（第36・37図参照）

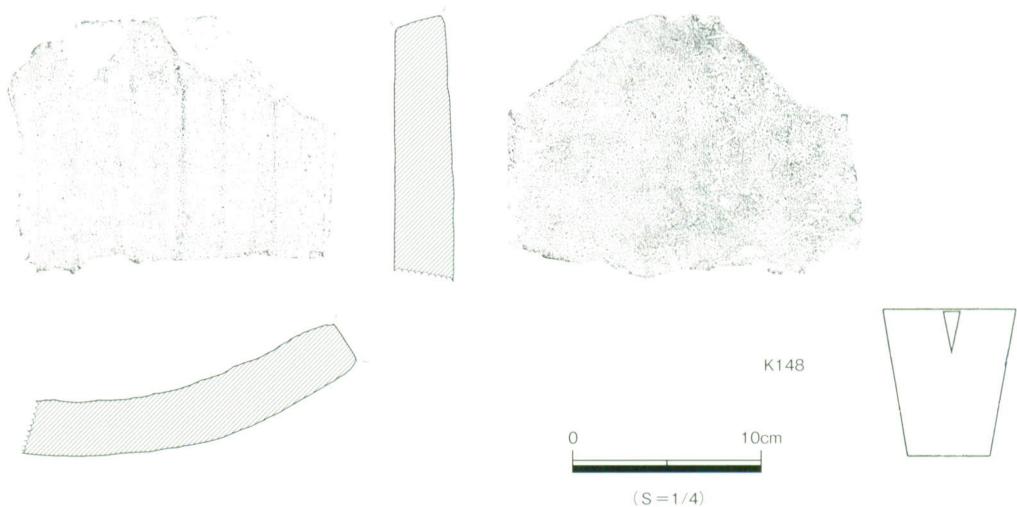
文字の記載位置と平瓦の天地を、略号を用いて記載した。文字の天地は△印の方向に向かって書かれていることを示し（上が天、下が地）、いずれの平瓦も記載位置が特定できないため、およそその位置を示した。

(2) 平瓦の特徴

平瓦は粘土板桶巻作りによる成形で、厚さ約3cmを測る。凸面の一次調整は文字瓦②に斜格子タタキが見られ、いずれも二次調整のヨコナデにより仕上げられている。凹面の布目圧痕は9本/cmで、枠板痕は2.2～3cmまでのものがあり、側縁に分割界線が残存していた。

側面調整はいずれも「面取りなし」で、文字瓦①の端面も「面取りなし」である。胎土は2mm程度の砂粒を多く含みやや粗く、軟質焼成で灰白色を呈する。

これらの平瓦は製作技法、凸面調整、胎土からみて7世紀後半新相に位置づけられる平瓦であり、文字瓦①の刻書より「評」制下の所産であることは確実である。



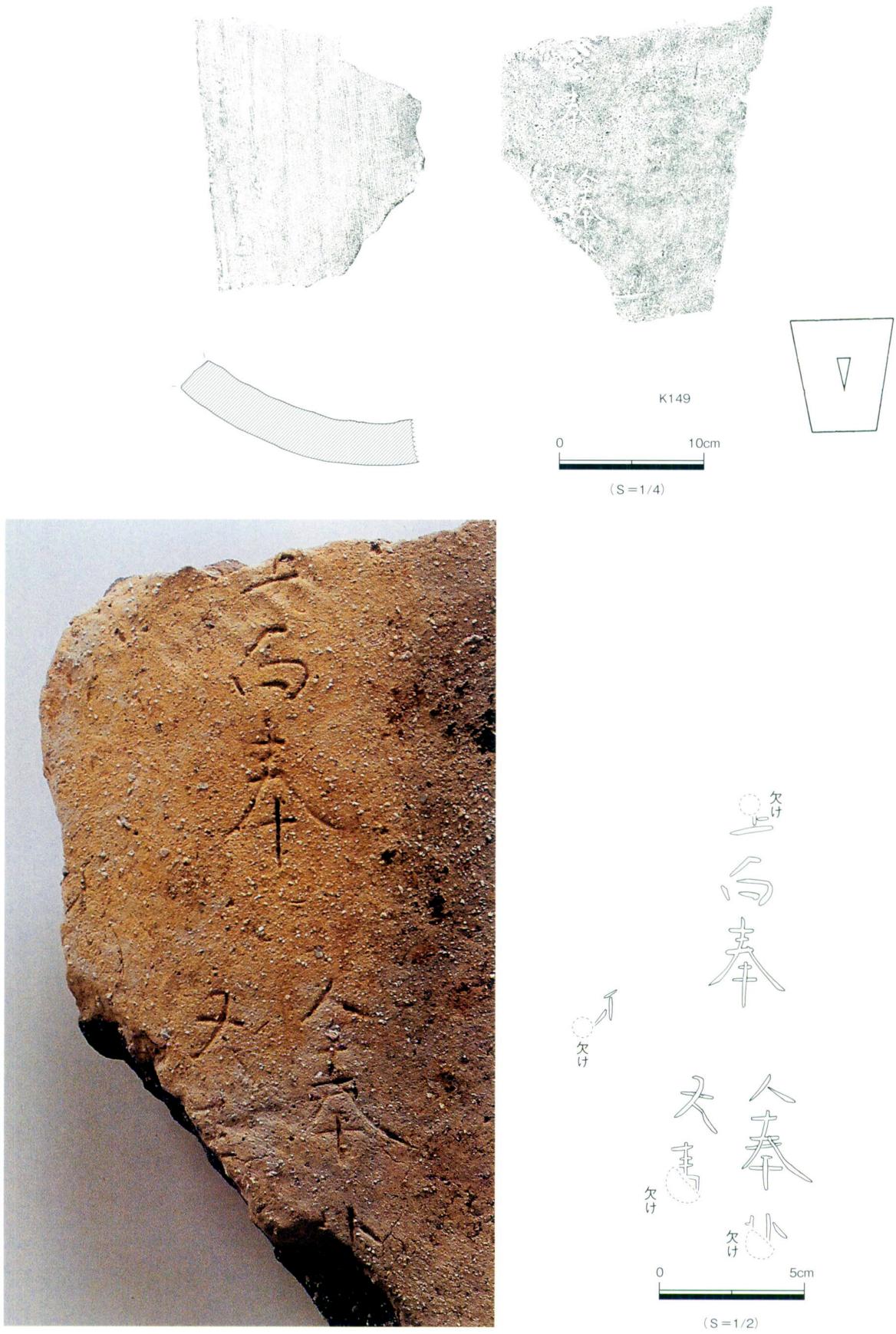
第17図版 文字瓦①拡大写真



0 5cm

(S = 1/2)

第36図 文字瓦① (S = 1/2 · 1/4)



第18図版 文字瓦②拡大写真

第37図 文字瓦② (S = 1/2 · 1/4)

(3) 文字瓦①

文字瓦①は広端と側面がそれぞれ残っており文章表記との関係から、凸面の広端側を上にして使用されている。文字は平瓦の中央よりも上位から書き出し、2行7字にわたり刻書されていた。

1行目は均整のとれた字句で「評 太 □ [寵カ]」と記述され、しっかりと刻まれた3文字目は、類のない異体字である。2行目は文字が大きく筆跡が速いため線刻が浅く判然としないが、「□ □ [雨カ] □ [白カ] □」と読める。

(4) 文字瓦②

文字瓦②は側面が残存しており、側面と枠板痕の関係から判断すれば、凸面の広端側を上にして文字が書かれている。2行にわたる刻書は凸面のほぼ中央に位置し、1行目の文章を割り書きしている。刻書は9字が確認できるが、その内4字は欠損していた。

割り書きも含めて1行目は「□ [上カ] 而 奉 人 奉 □ 大 □」で、2行目は1行目とそろえずに書き出し「□」である。

文字瓦②は1行の中で「奉」を2回使用していることが特徴である。奉の語義は下位者から上位者あるいは神仏に物などを献上する意味を持つ。また「人 奉 □」の内、□の下半分が欠損しているが、漢字の偏が一の一部で旁がトに類するから占いの意味を含む文字とも推察される。

(5) まとめ

文字瓦出土の意義を次に整理すると共に、釈文については狩野久先生が第IV章で詳述されているので参照されたい。

1、岡山県内では7～8世紀代の文字瓦はめずらしく、県内では賀田廃寺、備前国分寺が知られている中で、柏寺廃寺の文字瓦が古い事例である。また、文字が単に記号や名称を指すのではなく、文章として刻書されている。

2、文字瓦が出土した瓦廃棄土壙は寺域東限の区画溝に接して、寺域内に形成されていることから、柏寺廃寺の伽藍に使用されたものである。文字瓦は平瓦の製作技法、凸面調整、胎土の特徴からみて7世紀後半新相に該当する。

3、文字は筆跡からみて熟練した書き手によるもので、造瓦工房において平瓦を製作後、窯詰めの焼成前までに刻書されたものである。

第IV章 柏寺廃寺出土の文字瓦について

狩野 久

文字のある瓦は2点あり、いずれもヘラ書きで平瓦の凸面に書かれている。

文字瓦①には2行7字が認められる。1行目は丁寧な書風で書かれていて3字ある。「評太□」とあり、上下は欠損していて、上下ともに文字がさらにつづく可能性を一応は考えておく必要がある。2行目は瓦のほぼ中央部に、瓦の上端近くから一行目よりは大きな文字で4字確認できるが、いずれも文字の特定には至らない。あえて読むと、2字目は「市」と字画を追うことができるので、「雨」のような文字が想定される。3字目は「𠂔」の線刻が認められる。4字目は不明である。

さて1行目の3字目であるが、これを2字に分けて読む考え方があるくらい大ぶりな字であるが、字画のバランスからいって1字で読むのがよいと判断した。以下1案を提示すると、まずカンムリ状の「ヨ」であるが、「靈」の俗字あるいは異体字に「灵」があるので、文字を分解して判断することに不安もあるが、「ヨ」は「靈」の省略形ではなかろうか。

諸橋轍次『大漢和辞典』、上田万年他『大字典』とともに火偏の字として「灵」を掲げて「靈」の俗字とするが、日本の古文書、金石文等の異体字の用例を調べたものとして、つぎの2つの文献をあげておく。

太田晶二郎「古文書のよみ方—異體字一隅ー」(『著作集第五冊』吉川弘文館、1993年。初出1957年)は、靈の異体字として灵・灵・灵・灵をあげる。また古鐘の研究でしられる坪井良平の「異体文字研究」(『梵鐘と考古学』ビジネス教育出版社、1989年。初出1980~82年)には、靈の異体字を多くあげるが、その一群に灵・灵・彌をあげ、弘安5年(1282年)に忍性が寄進した静岡県熱海地蔵堂の鐘銘にあるものがその最古の用例とし、以後14世紀以降に多く用いられるようになるとしている。⁽¹⁾

ところで北宋の陳彭年らが勅命により、編纂した韻書の『廣韻』(1008年成立)には26,194字の六朝から唐代の中古の漢語が収められていて、古い漢字がわかる貴重な字書であるが、それには「靈」と同音の文字として「灵」をあげているから、普通により靈の略体字に採用されたのは、かなり古くさかのぼる可能性がある。因みに灵の字義は「少熱の貌」で、『大字典』は「灰」と同字とする。

それにしても柏寺廃寺の文字瓦は7世紀末にさかのぼるから、そのような時期にさかのぼって、日本でこのような略体字が知られ、かつ用いられていたかである。天智7年(668)とみられる船王後墓誌の靈は「靈」とあり、天平2年(730)の美努岡万呂墓誌のものも同じ字体を用いていて、「灵」と書く事例は見当らない。しかし5世紀代にさかのぼる埼玉県稻荷山古墳出土の鉄劍銘(辛亥年=471年)に「爲」を草書風に「𠂔」とし、和歌山県隅田八幡の画像鏡(癸未年=503年)にも「癸」を「彌」とし、また6世紀のものとみられる島根県岡田山一号墳出土の円頭大刀には「額」を「各」、「部」を「ア」とする省略字形が認められる。大宝2年の御野(美濃)、筑前、豊前の戸籍(正倉院文書)にも、「ム(牟)」「ヌ(閉)」「关(癸)」など多くの略体字が通用字体として用いられ、以後も永く慣用の文字となるのである。

このようなことを考えると、日本において漢字導入の早い段階で、靈の異体字として灵が使用され

た可能性は十分あると思われる。その上この場合は、焼成前の瓦といふいわば土にヘラで刻書するのであるから、画数の多い複雑な字形は敬遠されて、簡単な字形で書くことになったという推測も成り立つのではないかろうか。

文字瓦①の1行目第3字の下半部は、「ヨ」の最終画の左端から、左斜め下にのびる線を含めて、左半を「音」と解し、右半は下端が欠失していて判然としないが、「缶」とみて、あわせて「龍」ではなかろうか。そうすると3字目は「龜」となる。一つの試案として提示したい。

龜ならば『古事記』(上巻)、『日本書紀』(神代)、『豐後國風土記』、さらには『万葉集』にみえ、「オカミ」と訓まれる“水を司る龍神”である。したがって1行目の意味は、「評」は大宝元年(701)の「郡」制前の「コホリ」の用字であり、ここは“カヤノコホリ”(7世紀の木簡には“加夜評”とある)のこと。「太」は「大」と同じで、尊称であると同時に“勢力の大きいもの”をいうから、1行目は“カヤノコホリの威力のある水神さま”というほどの意味であろう。そうすると、2行目の2字目を「雨」と読む蓋然性が高くなり、文字瓦①は全体として、雨乞いを評の水神に祈願する祭祀に係る文言ではないかと思われてくる。「雨」の下の文字は、あるいは「白」(“まをす”=申)かもしれない。

文字瓦②は、瓦のほぼ中央部に「□而奉」と書き、その下に割り書風に、右行に「人奉□」、左行に「大□」と記す。瓦の遺存状況から推して、上下ともに文字は欠失しているものと思われる。文字はいずれも文字瓦①の第1行の文字同様端正な筆法で書かれている。第1字はあるいは「上」かもしれない。割り書左行の1字目の「大」は字形が右下に傾いていて、一見すると「又」のようにもみえるが、斜めに下りる第3画が、刻みは浅いが確認でき、また第1画と第2画の重なりから、横棒が第1画と判るので「大」とみてよい。全体の文意はつかみにくいが、文中に「奉」の字が二回でてくることは注目すべきである。「奉」はこの場合“たてまつる”と読んで、神あるいは上位者に対して、ものを献上することを意味するから、文字瓦②も文字瓦①と同様、神事・祭祀に係るものと判断して大過ないであろう。

さて文字瓦はこれまで全国各地の古代遺跡でみつかっており、多量に出土したものとしては、大阪府堺市の大野寺土塔、恭仁宮(山城国分寺)、武藏国分寺、多賀城のほか、関東に多いが竜角寺(下総)、新治廃寺・台渡廃寺(常陸)などの郡内寺院がある。文字はヘラ書き、押印で表わすものが多く、内容は郡郷の地名、瓦の貢進者、寄進者(知識)を記すものがほとんどを占める。このような文字瓦の一般的なあり様と比べ、今回の栢寺廃寺出土のものは、内容がまったく異なる点が注目される。

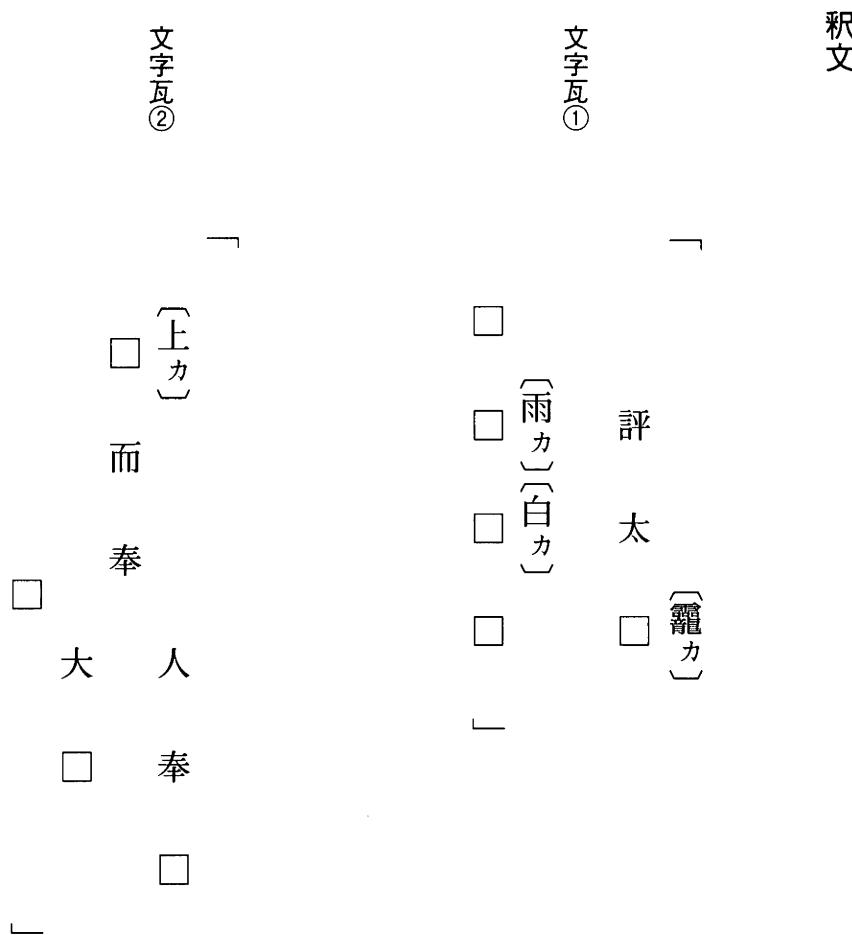
内容的にはむしろ土器の墨書銘に類似のものがみられるのである。千葉県芝山町庄作遺跡出土の土師器杯の体部外面に「上総国(某郡某郷)□□□秋人歳神奉進」なる墨書があるが、これは秋人が歳神(五穀豊穣の神)に供物を奉り進めたことを意味し、村落祭祀の一例として報告されている。⁽²⁾

墨書土器のこのような事例と併せ考えると、栢寺廃寺の文字瓦のもつ意味は一層明らかになってくる。栢寺廃寺はカヤ氏の氏寺であるから、郡(評)を総括するカヤ氏が、コホリの水神に対して、稻作りに欠かせない水利の安全を祈願した文言を瓦に刻み、境内のいずれかの建物の屋根にのせたものであろう。カヤ氏は郡司として地方行政をあずかるばかりでなく、郡内の人たちの代表者として、コホリのオカミ(水神)に奉仕する立場の人でもあったのである。栢寺廃寺の近傍に存在する古郡神社(式内社)は、あるいは祭神の一つに、水神(オカミ)を祀ることがあったのかもしれない。7世紀に入って各地の首長(郡司層)は競って寺を建て、7世紀末には全国で545ヶ寺にものぼったといわれる(『扶桑略記』)。栢寺廃寺の今次の2点の文字瓦が語る意義は極めて大きく、郡内寺院の宗教的機能を

考える上で貴重であるだけでなく、郡内の人たちが、国分寺と違って有力者の氏寺を、どのような宗教施設としてうけとめていたかを考えさせる絶好の資料である。⁽³⁾

註

- (1) 熱海地蔵堂に関しては、原秀三郎氏に関係文献の提供を受け、種々教示にあづかった。
- (2) 平川南「古代人の死」と墨書き土器」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集、1996年)。
- (3) 執筆後松尾洋平さんに文字瓦の「奉」の出土例を調べてもらったところ、大野寺土塔に1例、兵庫県加西市一乗寺に1例あることがわかった。前者は「三練奉」とあるが意味不明。後者は「宗瓦施入奉(某)」とあるから瓦の寄進にかかわる文言である。



第V章　まとめ

第1節　柏寺廃寺と周辺遺跡

柏寺廃寺は吉備氏一族の賀夜氏が創建したとされる古代寺院である。伽藍配置は明らかではないが、昭和52・53年に岡山県教育委員会が実施した発掘調査により、唯一、塔跡が発見されている。昭和62年に岡山県重要文化財に指定され、平成3年には総社市教育委員会が史跡整備に伴う確認調査を実施し、塔基壇の概要が明らかになった。

正方形の塔基壇は一辺約13mを測り、ほぼ同規模の掘り込み地形により築成されている。中央には心礎抜き取り穴があり、本来は現在移設されている巨大な花崗岩製の心礎が据え付けられていた。心礎は長さ2.5m、幅1.5m、厚さ1.5mを測り、上面には心柱を受けるため円形のほぞ穴（径51cm、深さ30cm）をくり、その底部には長方形の舎利孔が穿たれている。

基壇化粧は削平のためほとんど消失していたが、各辺の基底には一段一列に地覆石が配列され、石の内側には丸瓦と平瓦を立てて配置している状況が確認された。これらの瓦は軒丸瓦四類・軒平瓦一類とセット関係にあり7世紀第4四半期に建設されたことを示唆するが、基壇化粧を特定するにはいくつかの異なる見解が提出されている。

まず、立てた瓦を外壁として露出するには粗雑であるとして、すでに失われた基壇化粧の裏込めとする見解。次に瓦が露出しているとして二重基壇の下成基壇外壁とする見解がある。また、昭和53年度の調査時には塔跡から10数片も壻が出土しており、中には赤色顔料を横口に塗布したものも含まれていたことから、⁽¹⁾当初あった基壇化粧を新たに壻積みに改修した可能性も指摘されている。

塔の主軸はN-1-E°で真北をとり、伽藍配置や寺域を推測する強い手掛かりを得たのであるが、後世の攪乱が激しく検出遺構から塔を除く伽藍は判明していない。説としては岡本寛久氏が四天王寺式を、葛原克人氏は法起寺式を提示している。

寺域は切絵図による字「柏寺元」の範囲を有力な根拠として、トレントの成果、聞き取り、地割り、瓦の散布状況を加味し、概ね東西1町、南北1町半の寺域と考えられている。四囲を推測する有力な地割りは塔跡よりも南側に顕著で、R180号線から柏寺廃寺へ至る小道が鍵形に屈折し（現在T字路）、これが南限の名残とみられる。そして、南限から1町半の位置を概ね北限としており、寺域の北西隅には検出された井戸を含めている。

東西の寺域は塔基壇の主軸から、このT字路の交点を結ぶ線を中軸ととらえ、東西へそれぞれに折り返した位置を東限と西限に推測され、南西側には地割りも残されている。

今回検出した区画溝は、第38図のとおり岡本寛久氏が提示された東限の寺域推定線とほぼ一致している。溝の規模は幅2.5m前後、深さ約60cmを測り、溝底部から縄タタキを施す平瓦がまとまって出土したほかは、赤色顔料の付着した須恵器皿52や、鉄滓、鉄釘M1など寺院造営に関係した多彩な遺物も出土している。こうした状況より寺域東限の区画溝に比定され、別地点においても今後の追証が必要であることは言うまでもない。

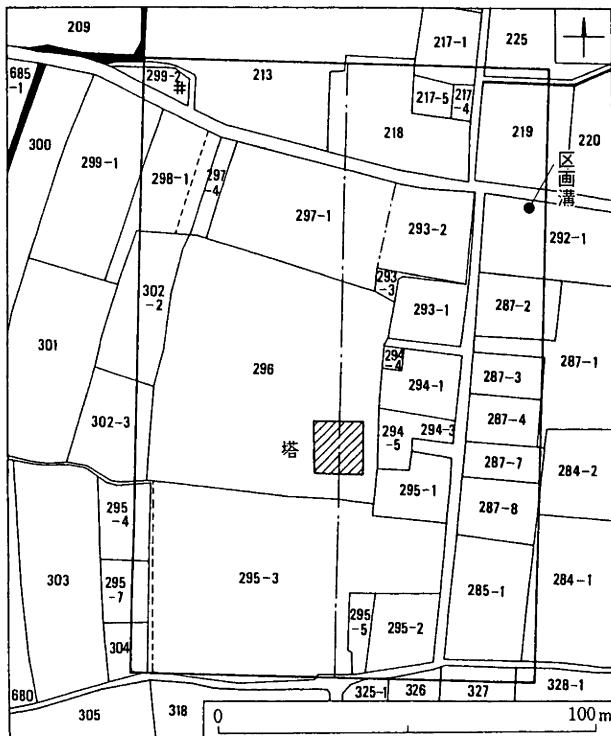
今回の調査地は寺域の北東部から、東西方向に約70mの断面を確認したに等しく、柏寺廃寺の立地と寺域外の遺構について次ぎのように整理できる。

柏寺廃寺の立地は総社平野のほぼ中央に位置し、微高地上に建立されていることが特徴である。現在は柏寺廃寺の周辺が大幅に地下げされ、敷地のみが取り残されて島状に高くなっているものの、柏寺廃寺の下層からは弥生時代から古墳時代の包含層も確認されており、元来の地形は現況のとおり高位であると見てよい。例えば塔基壇に配列された地覆石の標高は約9.9mであるのに対し、調査地の遺

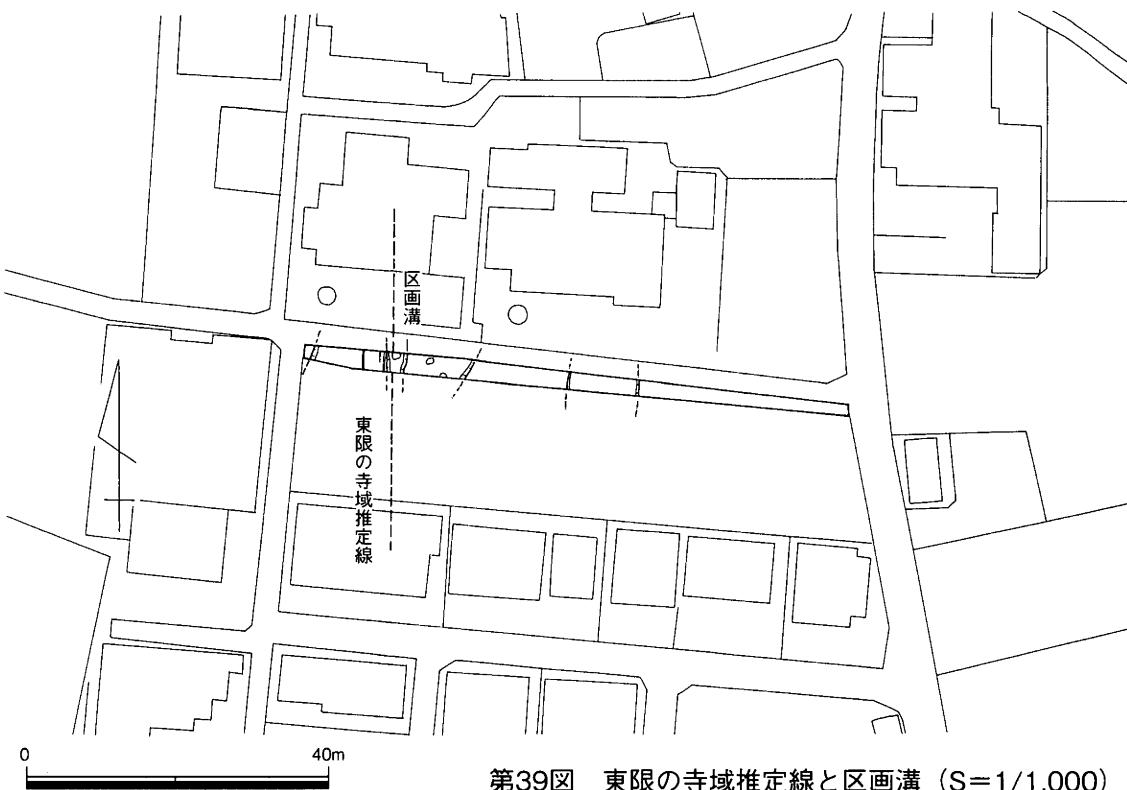
構検出面は標高9mのため0.9mの高低差がある。この解釈としては調査区の西端から東へ25mの地点で基盤層の変化があり、微高地の形成過程で柏寺廃寺側が古い堆積を示し、東側に向けて新たな自然堆積が進行している状況が認められた。つまり、柏寺廃寺の立地は微高地の古い堆積を核として高所となし、調査地を含む周辺地では漸移的に地形が下がり、さらに後世の地下げが行われたと整理できる。

柏寺廃寺の造営は微高地の高所を占有した極めて象徴的な出来事であったことがわかる。

寺域に関連する遺構は北東部に含まれる低位部1や、低位部2は8世紀中葉までの寺域造成時に埋め立てられ、7世紀末葉から8世紀前葉にかけての遺物が多量に出土した。そ



第38図 柏寺廃寺跡周辺地籍図・寺域推定範囲
註1より引用 (S=1/2,000)



第39図 東限の寺域推定線と区画溝 (S=1/1,000)

の後、土壙状炭窯が一時的にまとまって操業しており、周辺に何らかの付属工房が営まれたと考えられる。そして、土壙状炭窯の廃絶後は、土壙状炭窯1を切って区画溝が新たに開削されたという変遷がたどれ、8世紀後葉には寺域に伴う造成や、区画溝の整備が進行している状況が看取できる。かつての調査では伽藍内から軒丸瓦五類、軒平瓦四類他に該当する8世紀中葉以降の瓦が多量に出土していることからみて、当該期の伽藍と寺域の整備は軸を一にしている可能性がある。区画溝に隣接する瓦廃棄土壙は、主に白鳳期の伽藍に使用された瓦の破損品を埋没させたもので、出土瓦から7世紀後半古相の瓦が少量と、新相の瓦が多量に出土した。

このように調査区の西半は、寺院関連の遺構や遺物が顕著な一方、東半には掘立柱建物の柱穴、土壙、竪穴住居などの遺構を検出し、居住域の広がりを見せてている。今後の調査の進展により僧坊などの関連遺構が発見されるかもしれない。

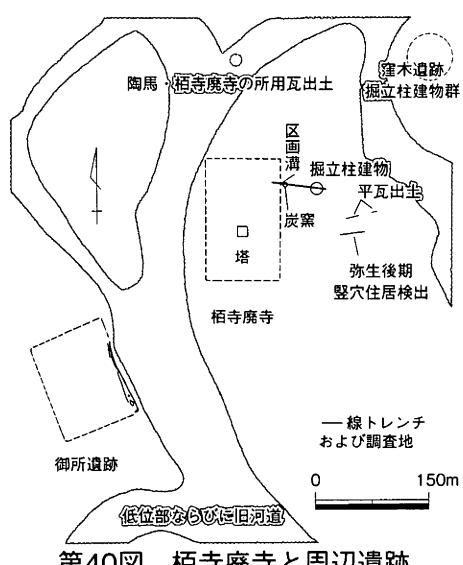
栢寺廃寺の周辺では近年の発掘調査により、注目すべき成果が得られているので紹介しておきたい。大文字遺跡が立地する微高地は平面が半月状を呈し、この北半部に栢寺廃寺が立地している。栢寺廃寺からみて北・西・東の3方には旧河道や低位部が推定されており、必然的に同一微高地内の居住域は南か東に限定されるのであるが、備中国府跡の緊急確認調査⁽²⁾では、栢寺廃寺よりも東約170mの水田に設定したトレンチで平瓦が出土し、2次的な瓦の散布が見られた。また、そのすぐ南側の水田においても弥生時代後期後葉の竪穴住居が確認されており、今回、調査区東半で検出された竪穴住居などの遺構と一連の広がりを見せてている。

一方、栢寺廃寺から北へ200m上流に遡った旧河道からは、河道堆積の下層より8世紀前葉の土器群や陶馬が出土し、埋土からは栢寺廃寺の所用瓦である軒丸瓦四類、五類、重弧文軒平瓦、平瓦、丸瓦がまとめて出土している。そのため近辺には祭祀を含む関連施設の存在が予想されるようになつた。⁽³⁾

栢寺廃寺から北東へ約300m離れた窪木遺跡では、6世紀後半から8世紀にかけて営まれた集落が判明し、竪穴住居や掘立柱建物が多数検出された。総社市が発掘調査した市道部分でも古代の掘立柱建物が13棟検出され、7世紀後葉から8世紀代にピークを迎えていた。⁽⁴⁾

国府川を挟んだ西側には平安末期の備中国府と推定されている御所遺跡が存在する。御所遺跡は大溝に囲繞された約1町四方の方形居館であり、土塁や石敷きを施した井戸、梵鐘鑄造土壙などの遺構が検出されており、土師器を中心におびただしい遺物が出土している。

賀夜郡内に数次の変遷をとげたとされる備中国府と、「備中国賀陽郡服部郷図」でいう当地の里名「古郡里」からは、賀夜郡家の存在をも推測させる環境の中で、近年の調査事例をみる限り、栢寺廃寺の周辺に古代の遺跡が濃密に展開している様子がうかがえる。栢寺廃寺とその周辺は平野の中央という象徴的な立地において宗教的、政治的な重要拠点であったことを再認識させるものである。



第40図 栢寺廃寺と周辺遺跡
(S=1/10,000)

註

- (1) 第38図は岡本寛久『「水切り瓦」の起源と伝播の意義』『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社, 1992年, P 364の図10を引用・一部改変
- (2) 「備中国府跡 緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7 総社市教育委員会1989年
- (3) 「南溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』214 岡山県教育委員会, 2008年
- (4) 「窪木遺跡（総社市道第一次）の発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』18 総社市教育委員会, 2009年, 「窪木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』214 岡山県教育委員会, 2008年

第2節 出土瓦について

1. 瓦の様相

大文字遺跡では低位部1と瓦廃棄土壌、そして区画溝から栢寺廃寺に使用された古代瓦が出土した。低位部1と瓦廃棄土壌からは7世紀後半に位置づけられる丸瓦と平瓦が多数出土し、製作技法、胎土、色調、そして「評」銘の文字瓦①を参考に軒瓦と対比させ、7世紀後半の古相と新相に大別して説明してきた。

これらの瓦群よりも後出するが、区画溝からは桶巻作りから一枚作りへ移行している8世紀中葉以降の平瓦が出土しており、おおまかな変遷がたどれる。

量的には7世紀後半新相の瓦が最も多く、次いで古相、そして8世紀中葉以降の瓦が少ない状況であった。ここでは多数の出土をみた丸瓦と平瓦を主な対象として、各期の特徴と傾向について簡略ながら整理しておきたい。

その前段として7世紀後半の瓦をもとに、年代観の指標となる軒瓦の様相について一瞥しておく。軒丸瓦一類は栢寺創建時の軒丸瓦で、瓦当文様は朝鮮半島直通の百濟系瓦とされている。薄手の作りで胎土は精良である⁽¹⁾。

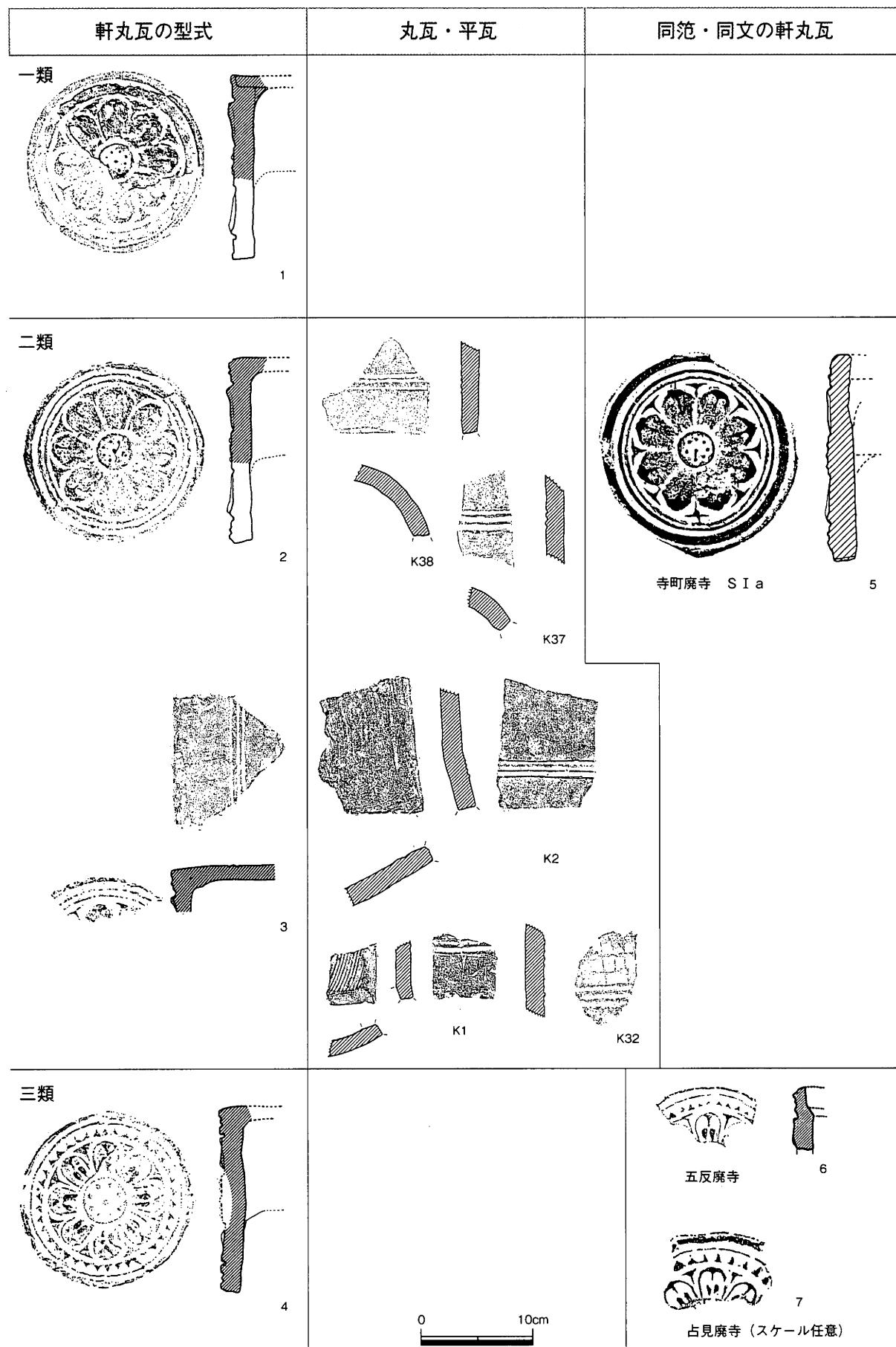
軒丸瓦二類は一類の木范外縁を彫り直して圏線を一本入れ、一類よりも範傷は進行している。丸瓦部には凸面に3条の沈線を施すものがあり（第41図3）、今回、丸瓦と平瓦でも同種の沈線を確認した。これらの瓦は薄手の作りで胎土精良である。二類は備後寺町廃寺S I a式と同范で、栢寺廃寺から寺町廃寺へ移動し創建瓦となっている。

軒丸瓦三類は全体がわかる瓦当はないが、複弁で外区に外向鋸歯文を飾る。この種の軒丸瓦が県内の五反廃寺と占見廃寺で出土しており同文と観察されている。薄手の作りで胎土精良である⁽²⁾。

軒丸瓦一～三類に共通する点は、瓦が薄く精良な胎土をもつことで、二類の丸瓦部には沈線が施されている。こうした特徴を指標として古相の丸瓦と平瓦を位置付けた。

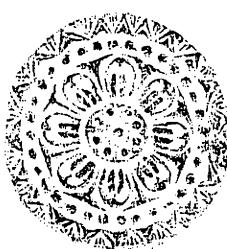
軒丸瓦四類は備中式でも複弁を採用し、三類からの系譜をたどることができる一方で、新たに瓦当裏面に1条の突帯を貼り付けることが特徴である。また四類からは一転して厚手の作りとなり、砂粒を多く含みやや粗雑な胎土となる。丸瓦部は瓦当部との接合後、凸面に縦ナデを施し、側面形状はK52を見る限り後述する新相の丸瓦に多用される「面取り1」を採用している。

軒平瓦一類と三類は瓦当部に1～2条の浅く細い沈線を引いている。瓦当部に引いた1条の沈線が途中で2条に途切れるものもあり、文様自体はラフな印象をもち平瓦の端面をナデた後は無加工で施文している。厚手の作りで砂粒を多く含みやや粗雑な胎土である。こうした点は軒丸瓦四類と共通し、

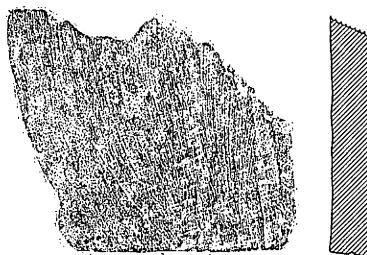


第41図 瓦の様相1 (S=1/5)

軒丸瓦四類



8



K56

← 沈線太

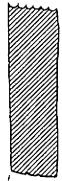


K56



K72

沈線細
一条 →



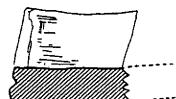
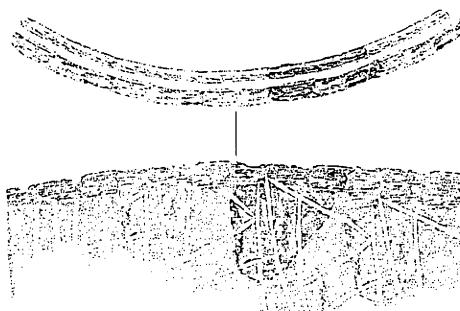
K73

← 沈線細
二条

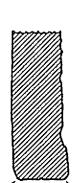
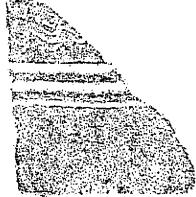
大崎廃寺軒平瓦

9

軒平瓦一類



10



K57

K17

0 10cm

第42図 瓦の様相2 (S=1/5)

組み合わせが考えられることから、軒丸瓦四類と軒平瓦一類・三類を新相とした。簡易な施文方法を見る限り、同じ賀夜郡内の大崎廃寺の軒平瓦⁽³⁾と酷似していることが注目される。

軒平瓦三類はこれまでにヘラ書きした顎面施文10が知られているが、今回新たに出土したK57は、凸面に3条の沈線と波状文を施し、軒平瓦の中では最も厚い瓦であった。沈線に注目すれば、軒丸瓦二類と同時期の丸瓦・平瓦に3条の沈線が施され、軒平瓦三類にも3条の沈線が施文されていることからみて、7世紀後半の瓦には伝統的に3条の沈線を施す意識が存在するのではないだろうか。

製作技法は一類・三類とも粘土板桶巻作りで、凸面の一次調整には斜格子タタキ（1類）が認められ、二次調整はすべてヨコナデで仕上げていた。

側面の形状は19点中「面取り1」と「面取りなし」が約半々の9点で、端面は「面取りなし」がほとんどである。分割界線は端部まで及ぶ例が4点みられたが、撚糸か棒かは判別できなかった。

以上の観察から少なくとも軒平瓦一類は新相の平瓦をそのまま使用しており、凸面調整や側面・端面の面取りも共通し、特別に成形されたものではない。

2. 古相の丸瓦と平瓦

丸瓦は行基式で、製作技法は粘土板模骨巻きが多い中で、粘土紐模骨巻きK45とK39・K43の凹面には枠板痕？が認められた。瓦の厚さは1.5～1.8cmを測る薄手の作りである。凸面の一次調整は二次調整の強いヨコナデによってすり消されており、わずかにK43で格子状のタタキ痕、K40で縦方向の縄タタキが確認できるにすぎない。また、K37・K38には3条の沈線が施されている。

点数が少ないため傾向を出すに到らないが、側面の形状は「面取りなし」「面取り1」「面取り2」があり、端面には「面取りなし」と「面取り1」があった。

平瓦は粘土板桶巻作りが多い中でK47は粘土紐桶巻作りであった。瓦の厚さは1.4～1.9cmと薄手の作りである。

凸面の一次調整は斜格子タタキが2点確認できる。縦方向の細い縄タタキを施したK48の年代観は難しいが、一枚作りの平瓦と混じって出土したK18と比較すると縄目の太さや瓦の厚さ、胎土が異なり、K48が時期的に先行すると推測される。二次調整はヨコナデで仕上げるものがほとんどで、端面の近くに3条の沈線を施した平瓦K1・K2がある。

側面の形状は「面取りなし」「面取り1」「面取り2」があり、端面は「面取りなし」と「面取り1」がそれぞれ存在する。

古相の瓦群には様々な製作技法が用いられ、必ずしも定形化していない様子が見てとれる。

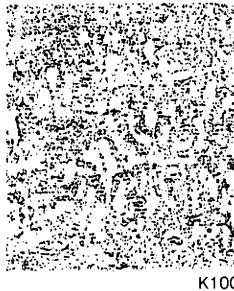
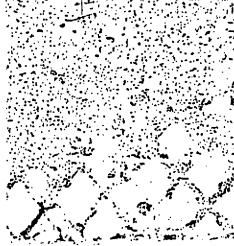
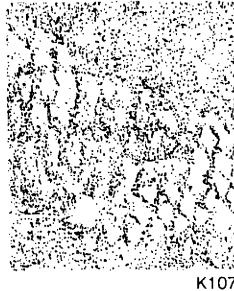
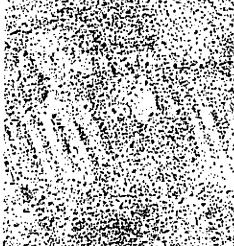
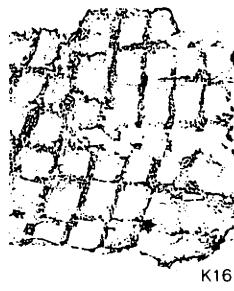
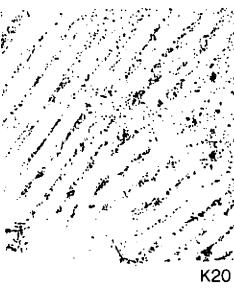
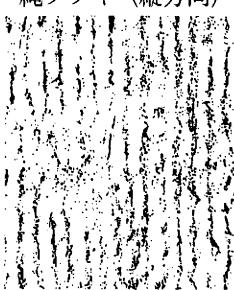
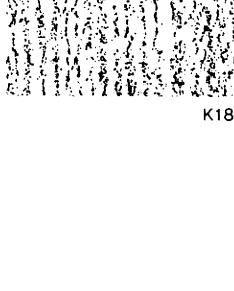
3. 新相の丸瓦と平瓦

丸瓦は行基式で全て粘土板模骨巻きによる成形である。粘土板の巻き付けかたは、左回りが3点と右回りが5点あった。厚さは2～3.5cmを測り、古相の丸瓦よりも厚手の作りとなる。

凸面の一次調整は斜格子タタキで占められ、その中でも大きな斜格子と小さな斜格子の2種がある。大きな斜格子タタキは丸瓦で多用され、平瓦には使用されていないが、反対に小さな斜格子タタキは少なく、むしろ平瓦で多用されていた。二次調整はヨコナデで仕上げている。

側面の形状は「面取り1」が28点、「面取りなし」が1点で、「面取り1」が圧倒的に多く、端面の形状は「面取りなし」がほとんどである。

平瓦は全て粘土板桶巻作りで、厚さは3cm前後が多く、粘土板の巻付け方法は左回りが5点、右回りも5点認められ一定していない。

	丸 瓦	平 瓦		
古相		<p>斜格子タタキ K5</p> 		<p>粘土板桶巻作り 縦方向の縄タタキ K48</p> 
新相	<p>斜格子タタキ小 K100</p>  <p>斜格子タタキ大 K84</p> 	<p>斜格子タタキ K107</p>  <p>正格子タタキ K136</p> 	<p>平行タタキ K139</p> 	
一枚作り		<p>正格子タタキ K16</p>  <p>縄タタキ（横・斜方向） K20</p>  <p>縄タタキ（縦方向） K24</p> 		

第43図 各種タタキ一覧 (S = 1/2)

凸面の一次調整は31点中、斜格子タタキが22点と最も多い、正格子タタキが6点、平行タタキが3点と差異が現れている。二次調整はほとんどがヨコナデで仕上げる中で、K 105とK 142は未調整であった。側面の形状は43点中、「面取りなし」が32点と最も多い、次いで「面取り1」が8点、「面取り2」は2点、「面取り3」は1点であった。端面は「面取りなし」がほとんどである。

4.一枚作りの平瓦

一枚作りの平瓦は厚さ2cm前後のものが多く、横幅のわかるK 22・K 23・K 26からは約23cmという規格がうかがえる。

凸面の一次調整は16点中、横・斜方向の縄タタキが12点と最も多い、縦方向の縄タタキは3点、正格子タタキは1点に過ぎなかった。二次調整はほとんどが未調整であるが、部分的にヨコナデを施すK 24・K 27の事例も見られた。側面形状は14点中、「面取り1」が13点、「面取り3」が1点と、「面取り1」を多用する傾向が見られる。端面も「面取り1」が10点と優勢であった。

一枚作りの平瓦は凸面に横・斜方向の縄タタキを施し、側面と端面の形状は「面取り1」が多い傾向から見て技術的に定着している様子がうかがえる。

なお、K 18は桶巻作りの平瓦である。凸面には縦方向の縄タタキを施しており、桶巻作りから一枚作りへ移行する過渡的な平瓦の可能性があるものの、量的には非常に少なかった。

註

- (1) 亀田修一「日本の朝鮮瓦」『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館、2006年
- (2) 亀田修一「久世に白猪屯倉はあったのか」『旭川を科学するPart 2 シリーズ岡山学』4 吉備人出版、2006年
五反廃寺 軒丸瓦Ⅲ型式(6)は、栢寺廃寺の軒丸瓦三類と酷似しており、五反廃寺(6)の方が範傷は進行している。少片のため同范とは断定できなかった。筆者実見。
- (3) 『板谷コレクション図録(瓦編)』倉敷市教育委員会、昭和62年。瓦当部の沈線は酷似しているが、平瓦凸面にはカキ目調整が施されている。筆者実見。

草原孝典「大崎廃寺」『岡山市埋蔵文化財センター年報』4 岡山市教育委員会、2005年

参考文献

- 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会、1979年
「栢寺廃寺史跡整備に伴う確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 総社市教育委員会、1993年

引用

第41図

- 1, 2, 4 「栢寺廃寺」『総社市史考古資料編』総社市、昭和62年
- 3 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会、1979年、
丸瓦部凸面は今回拓本を掲載。
- 5 『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第3次発掘調査概報－』三次市教育委員会、1982年
- 6 「五反廃寺」『岡山県史第十八巻考古資料』岡山県、昭和61年
- 7 鎌木義昌「岡山県浅口郡占見廃寺址」『日本考古学年報』2 誠文堂新光社、1945年

第42図

- 8, 10 「栢寺廃寺」『総社市史考古資料編』総社市、昭和62年
- 9 『板谷コレクション図録(瓦編)』倉敷市教育委員会、昭和62年

第VI章 自然科学分析

大文字遺跡（栢寺廃寺）ほか遺物付着物の成分分析について

（財）元興寺文化財研究所
山田卓司

1. はじめに

大文字遺跡（栢寺廃寺）の確認調査では、出土した丸瓦K 141、須恵器高坏32、坏B 47に付着物が認められた。これらの付着物は寺院に関係する遺物と考えられたため、その実態を探るため、以下のとおり成分分析を実施した。

なお、大文字遺跡（以下栢寺廃寺省略）の近くに所在する窪木遺跡からも付着物のある須恵器坏Bが出土しているためサンプルに加えた。

2. 分析対象

大文字遺跡（栢寺廃寺）出土「丸瓦K 141の赤色付着物、高坏32の黒色付着物、坏B 47の黒色付着物」、窪木遺跡出土「坏Bの黒色付着物」（第19～22図版）

3. 分析原理及び使用機器

エネルギー分散型蛍光X線分析（以下、XRF）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

測定条件：SIIナノテクノロジー社製SEA5230；励起電圧45kV、コリメータ径 ϕ 1.8mm、大気圧下にて600秒または300秒X線を照射した。X線管球はモリブデン（Mo）である。

全反射吸収測定・フーリエ変換型赤外分光光度分析（以下、ATR-FTIR）

赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

測定条件：SENSIR TECHNOLOGIES製Travel IR；分解能 4 cm^{-1} 、検出器DLATGS

4. 分析方法

大文字遺跡出土丸瓦の赤色部分と地部分をXRFにより成分分析し、赤色付着物を推定した。大文字遺跡出土高坏と坏B及び窪木遺跡出土坏Bの黒色部分と地部分をXRFにより成分分析した。また、黒色部分を微量採取し、試料片をATR-FTIRにより測定し、黒色付着物を推定した。

5. 測定結果

5-1. 赤色付着物について

XRF結果より、大文字遺跡出土丸瓦の赤色部分において、地部分と比較して鉄（Fe）を強く検出した（第44図・表4）。

5-2. 黒色付着物について

XRF結果より、大文字遺跡出土高坏と坏B及び窪木遺跡出土坏Bの黒色部分は、地部分と比較してマンガン（Mn）を強く検出した（第45図・表5、第47図・表6、第49図・表7）。また、ATR-FTIR結果より、採取した黒色部分から漆等の有機化合物に特徴的な 2980cm^{-1} 付近の強いピークは観測されなかった（第46図、第48図、第50図）。

6. 考察

6-1. 赤色付着物について

鉄を特徴的に検出したXRF結果から、大文字遺跡出土丸瓦の赤色部分は、赤色顔料としてベンガラが考えられる。拡大観察より赤色部分は摩擦痕付近に観測されることから、彩色された物（柱等か）に接触し、ベンガラが付着した可能性が考えられる（第23図版）。

6-2. 黒色付着物について

マンガンを特徴的に検出したXRF結果と有機化合物に特徴的なピークを観測しなかったATR-FTIR結果から、黒色付着物は漆等でなく、マンガン付着物であると考えられた（第24・25・26図版）。遺跡周辺の三吉・吉備・真備・岡山にマンガンを含む鉱脈が分布していることから、原料にマンガンが多く含まれていた可能性や黒色顔料として使用された可能性が考えられる。しかし、マンガン付着物の分析例は少なく、本例だけでの断定は難しく、情報の蓄積や周辺遺跡との比較は今後の課題である。

なお、窪木遺跡出土坏Bの実体顕微鏡観察では、炭化物と考えられる付着物も確認された（第26図版）。

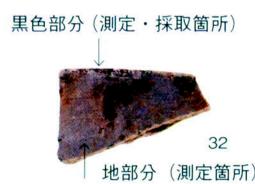
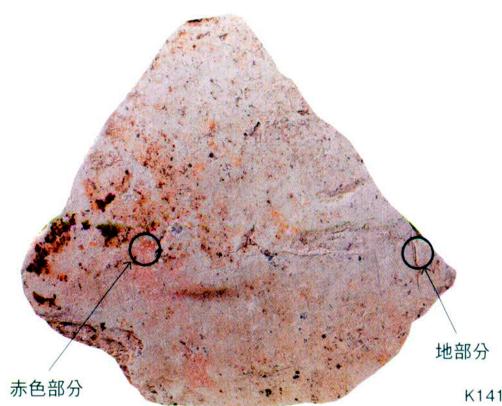
註

- (1)「窪木遺跡」（総社市道第一次）の発掘調査『総社市埋蔵文化財調査年報』18、総社市教育委員会、2009年
- (2) 石原舜三・村上浩康、「西南日本花崗岩類のレアアース特性：足摺岬の新第三紀深成岩類と山陽帶の後期白亜紀花崗岩類」、『地質調査研究報告』、第57巻 第3／4号、p. 89 – 103、(2006)

7. 分析データ

7-1. 測定箇所及び採取箇所

第19図版 大文字遺跡出土
丸瓦のXRF測定箇所



第20図版 大文字遺跡出土高坏

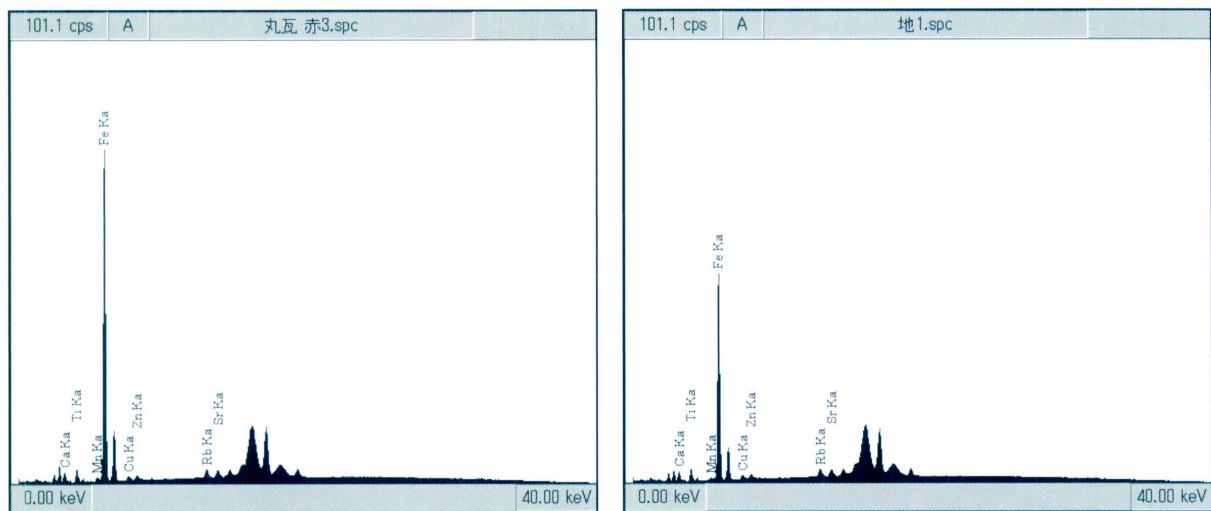


第21図版 大文字遺跡出土坏B



第22図版 窪木遺跡出土坏B

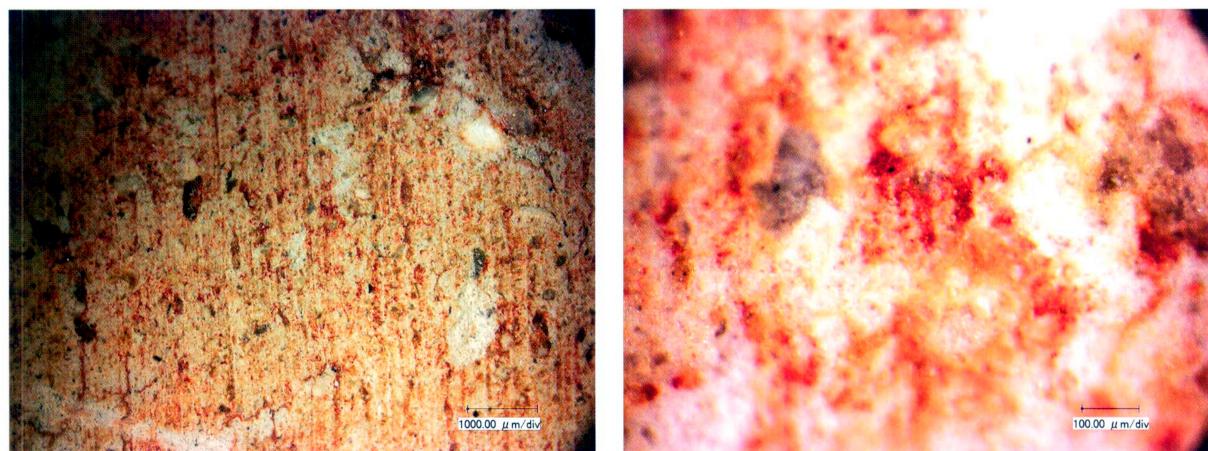
7-2. 測定結果



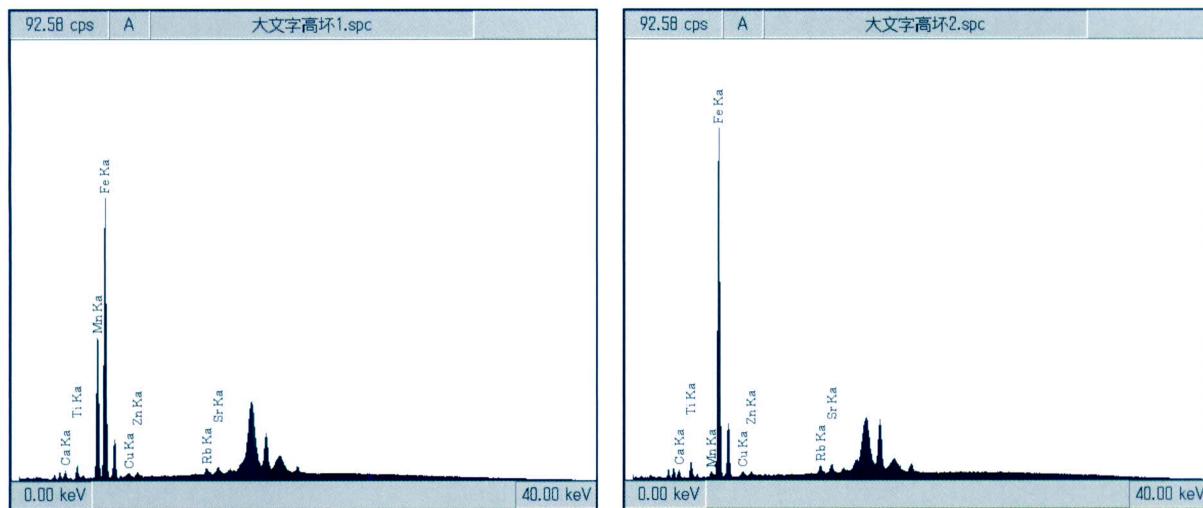
第44図 大文字遺跡出土丸瓦のXRFスペクトル（左図：赤色部分、右図：地部分）

表4 大文字遺跡出土丸瓦のXRF結果

Z	元素	元素名	ライン	赤色部分 (cps)	地部分 (cps)	ROI (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	21.232	19.955	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	26.351	24.994	4.35- 4.66
25	Mn	マンガン	K α	14.858	11.065	5.73- 6.06
26	Fe	鉄	K α	638.263	399.574	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	21.168	19.830	7.86- 8.22
30	Zn	亜鉛	K α	23.260	22.29	8.45- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	47.016	45.377	13.16-13.59
38	Sr	ストロンチウム	K α	47.144	46.119	13.92-14.36



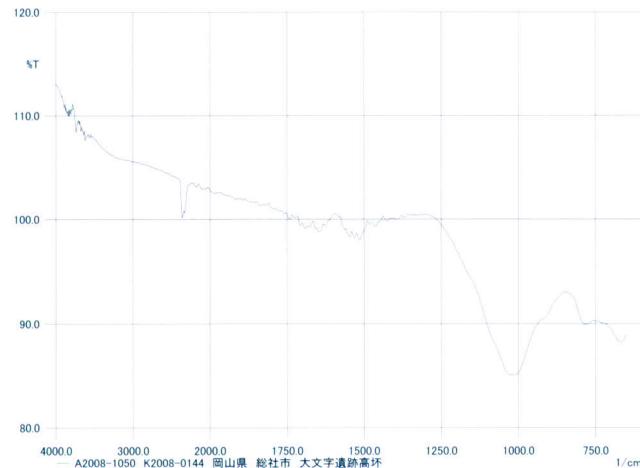
第23図版 大文字遺跡出土丸瓦の赤色部分



第45図 大文字遺跡出土高坏のXRFスペクトル（左図：黒色部分、右図：地部分）

表5 大文字遺跡出土高坏のXRF結果

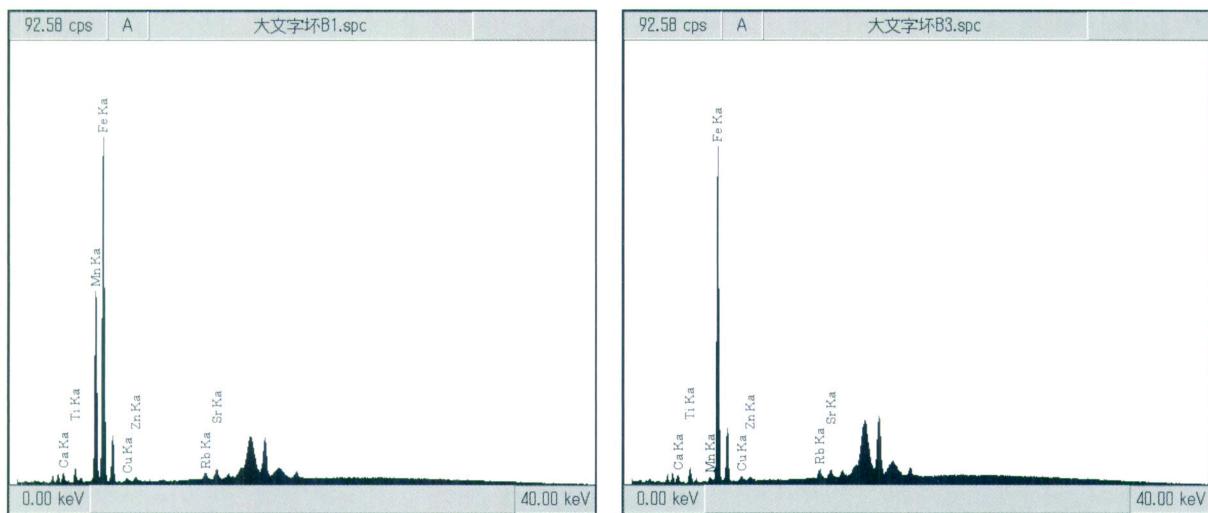
Z	元素	元素名	ライン	黒色部分 (cps)	地部分 (cps)	ROI (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	15.742	16.612	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	24.852	30.187	4.35- 4.66
25	Mn	マンガン	K α	247.046	16.877	5.73- 6.06
26	Fe	鉄	K α	509.802	614.201	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	18.169	19.813	7.86- 8.22
30	Zn	亜鉛	K α	20.376	21.27	8.45- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	37.931	42.216	13.16-13.59
38	Sr	ストロンチウム	K α	43.174	48.810	13.92-14.36



第46図 大文字遺跡出土高坏のATR-FTIRスペクトル



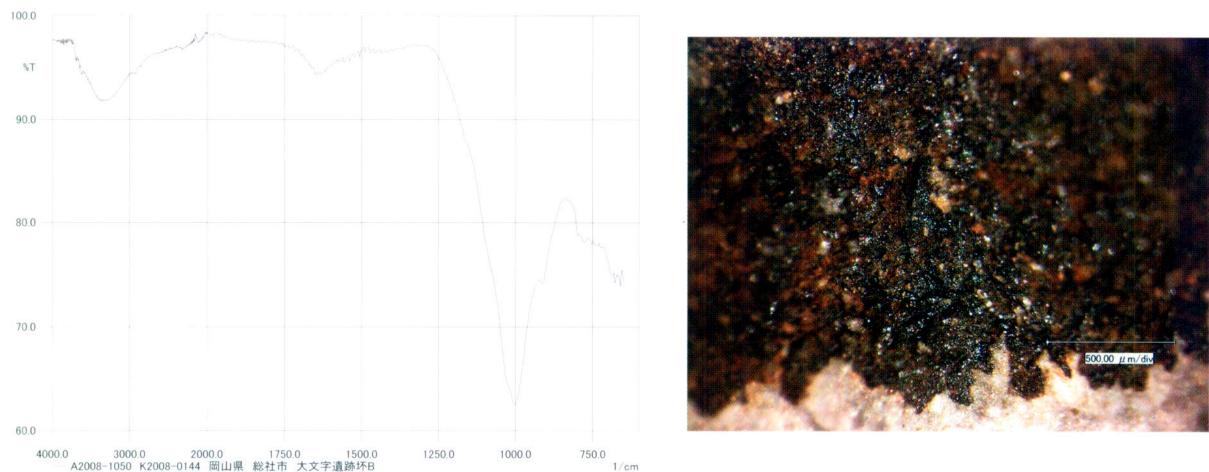
第24図版 大文字遺跡出土高坏の黒色部分



第47図 大文字遺跡出土壺BのXRFスペクトル（左図：黒色部分、右図：地部分）

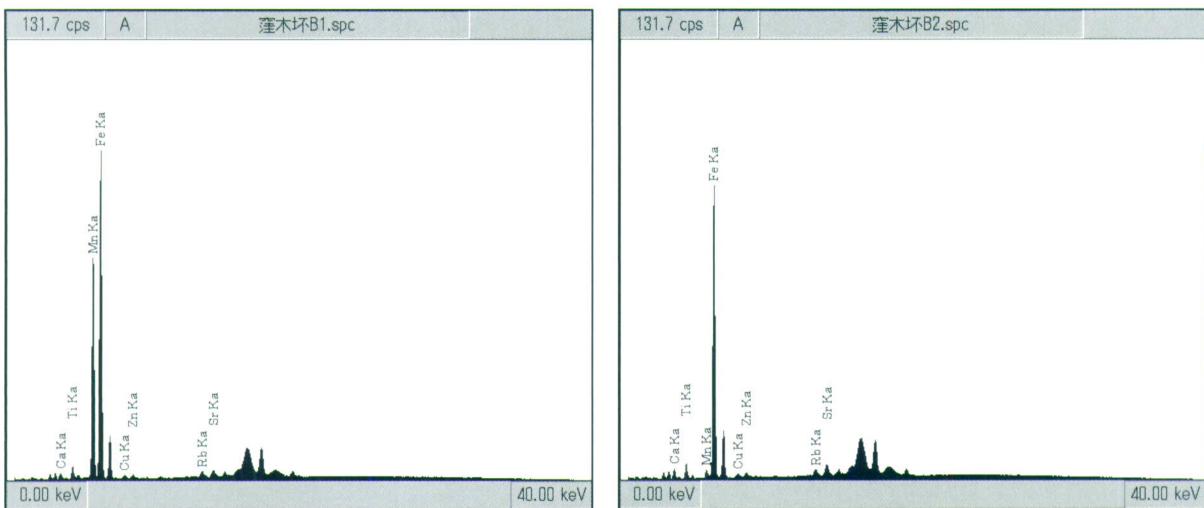
表6 大文字遺跡出土壺BのXRF結果

Z	元素	元素名	ライン	黒色部分 (cps)	地部分 (cps)	ROI (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	18.794	16.418	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	26.555	27.693	4.35- 4.66
25	Mn	マンガン	K α	331.859	14.170	5.73- 6.06
26	Fe	鉄	K α	631.008	590.659	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	14.469	18.756	7.86- 8.22
30	Zn	亜鉛	K α	16.715	18.663	8.45- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	33.631	43.813	13.16-13.59
38	Sr	ストロンチウム	K α	44.803	46.170	13.92-14.36



第48図 大文字遺跡出土壺BのATR-FTIRスペクトル

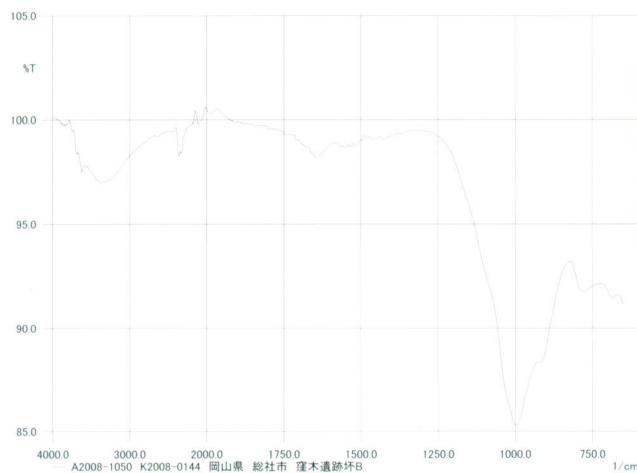
第25図版 大文字遺跡出土壺Bの黒色部分



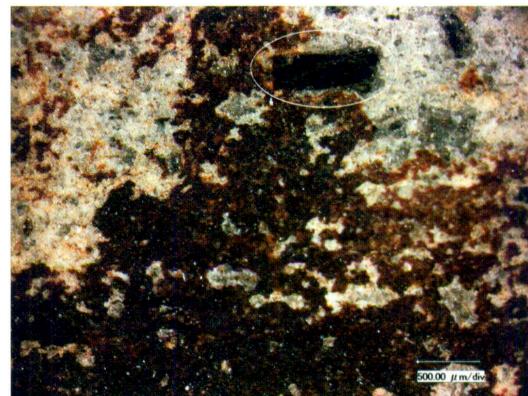
第49図 窪木遺跡出土壺BのXRFスペクトル（左図：黒色部分、右図：地部分）

表7 窪木遺跡出土壺BのXRF結果

Z	元素	元素名	ライン	黒色部分 (cps)	地部分 (cps)	ROI (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	16.236	25.367	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	33.754	37.812	4.35- 4.66
25	Mn	マンガン	K α	531.999	26.311	5.73- 6.06
26	Fe	鉄	K α	859.549	747.586	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	15.969	20.513	7.86- 8.22
30	Zn	亜鉛	K α	17.770	24.018	8.45- 8.82
37	Rb	ルビジウム	K α	36.238	44.859	13.16-13.59
38	Sr	ストロンチウム	K α	40.873	66.233	13.92-14.36



第50図 窪木遺跡出土壺BのATR-FTIRスペクトル



第26図版 窪木遺跡出土壺Bの黒色部分

表8 土器観察表1

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)			焼成	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
1	低位部1	須恵器	壺蓋				良好	暗灰色	精良	
2	〃	〃	壺身				〃	灰色	精良	
3	〃	〃	壺G蓋	(10)			〃	灰色	精良	
4	〃	〃	壺G蓋				〃	暗灰色	精良 0.5mm以下の砂粒少	
5	〃	〃	壺G蓋				〃	暗灰色	精良	
6	〃	〃	壺B蓋				不良	暗灰色	精良	
7	〃	〃	壺B蓋				〃	灰色	精良	
8	〃	〃	壺B蓋				良好	灰色	精良	
9	〃	〃	壺B蓋				不良	灰白色	精良	
10	〃	〃	壺B蓋				やや不良	灰色	精良	
11	〃	〃	壺B蓋	(18)			不良	暗灰色	やや粗 1mm以下の砂粒少、長石含	
12	〃	〃	壺B蓋				良好	暗灰色	精良	
13	〃	〃	壺B蓋				〃	灰色	精良	
14	〃	〃	壺B蓋				〃	暗灰色	精良	
15	〃	〃	壺B蓋				〃	黒灰色	精良 長石多い	
16	〃	〃	壺B蓋				〃	灰色	精良	
17	〃	〃	壺B蓋				不良	暗灰色	細 0.5mm以下の砂粒多、角閃石・長石含	
18	〃	〃	壺B蓋				良好	灰色	精良	
19	〃	〃	壺B身		10		不良	灰白色	精良	
20	〃	〃	壺B身		(8.7)		良好	灰色	細 0.5mm以下の砂粒多	
21	〃	〃	壺B身		(8.9)		〃	黒褐色	細 1mm以下の砂粒多、長石・石英含	
22	〃	〃	壺B身		(11)		不良	灰白色	細 0.5mm以下の砂粒多、長石含	
23	〃	〃	壺B身		(12)		良好	暗灰色	細 0.5mm以下の砂粒多	
24	〃	〃	壺B身		(11)		不良	灰白色	細 0.5mm以下の砂粒多	
25	〃	〃	壺B身		(10.7)		〃	〃	細 1mm以下の砂粒多	
26	〃	〃	壺B身				不良	〃	精良	
27	〃	〃	楕形壺				良好	灰色	精良	
28	〃	〃	高壺	(14.1)			やや不良	黒灰色	精良 長石 角閃石多	瓦質
29	〃	〃	高壺	16.1	9.8	9.7	良好	黒灰色	精良 角閃石多	瓦質
30	〃	〃	高壺			10	〃	灰色	やや粗 1mm以下の砂粒少含	
31	〃	〃	高壺				不良	灰白色	精良	
32	〃	〃	高壺				良好	灰色	精良	黒色付着物有
33	瓦廢棄土壤	〃	鉢	(19)			〃	暗灰色	細 0.5mm以下の砂粒少、長石含	
34	低位部1	〃	鉢	(20.1)			良好	灰色	細 2mm以下の砂粒多、石英含	
35	〃	〃	平瓶				〃	灰白色	細 0.5mm以下の砂粒多、長石含	
36	〃	〃	短頸壺		6.3		〃	暗灰色	細 0.5mm以下の砂粒多	
37	〃	〃	瓶				〃	灰色	細 1mm以下の砂粒少	
38	〃	〃	瓶				〃	黒灰色	細 0.5mm以下の砂粒多、角閃石含	

表9 土器観察表2

番号	遺構	器種	器形	法量 (cm)			焼成	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
39	低位部1	須恵器	甕	(21)			良好	明灰色	細 2mm以下の砂粒多、長石含	
40	"	"	圈足硯				"	淡灰色	細 1mm以下の砂粒少	長方形透 し約20個
41	"	土師器	坏A	(15)	(4.7)	(11)	"	橙色	細 1mm以下の砂粒多、長石・角閃石含	
42	"	"	坏C				"	橙色	精良	暗文有り
43	"	"	高坏				"	橙褐色	精良	
44	"	"	甕	(15.7)			"	赤褐色	やや粗 2mm以下の砂粒多、長石・石英含	
45	"	"	甕				"	暗灰色	細 2mm以下の砂粒多	
46	"	"	横瓶				"	暗灰色	細 1mm以下の砂粒多	円盤充填 痕有り
47	区画溝	須恵器	坏B蓋				"	灰白色	精良	黒色付着 物有
48	"	"	坏B蓋				"	暗灰色	細 0.5mm以下の砂粒少、長石・石英含	
49	"	"	"				不良	"	精良	
50	"	"	坏B身			(10.9)	"	黄灰褐色	細 0.5mm以下の砂粒少	
51	"	"	"			(10.7)	"	暗褐色	細 2mm以下の砂粒少	
52	"	"	皿	(14)			"	灰白色	精良	
53	"	"	壺			(10.8)	良好	暗灰色	細 2mm以下の砂粒少	
54	"	"	壺			(11)	"	灰色	細 2mm以下の砂粒少	
55	"	"	高坏				"	灰色	細 0.5mm以下の砂粒多、長石・石英含	
56	土壤状炭窯1	土師器	瓶把手				"	褐色	やや粗 2mm以下の砂粒多、長石・石英含	
57	No 3付近	古式 土師器	甕				"	褐色	細 1mm以下の砂粒多、長石・角閃石多	
58	"	"	甕	(13)			"	赤褐色	細 2mm以下の砂粒多、長石・石英含	
59	No 2~3	土師器	坏A	(18)	3.9	(11.4)	"	明褐色	精良	丹塗り
60	No 3~4	須恵器	坏B蓋	(15)			"	明灰色	精良	
61	土壤1	須恵器	甕				良好	黑灰色	精良 長石・角閃石多	瓦質
62	No 3~4	"	"				不良	黒色	細 0.5mm以下の砂粒多、角閃石多	
63	調査区東半遺 物表採地点	"	坏B蓋				良好	灰色	細 0.5mm以下の砂粒多	
64	"	"	"	(14.8)			良好	暗灰色	細 0.5mm以下の砂粒、長石含	
65	"	"	坏B身			(10.7)	"	灰色	細 2mm以下の砂粒多	
66	"	"	長頸甕	(13)			"	黒色	細 0.5mm以下の砂粒多	

※法量の()は復元による数値を示す。

表 10 瓦類観察表 1

番号	出土遺構	種別	成形	凸面		凹面		側面の面取り	端面の面取り	色調	胎土	焼成
				一次調整	2次調整	布目(本/cm)	棹板痕幅(cm)					
K1	低位部1	平瓦	I類	—	A類	9	—	1	1	灰白色	精良	不良
K2	〃	〃	〃	—	A類	8	—	なし	なし	〃	細い	〃
K3	〃	〃	〃	—	A類	12	2.8	2	—	暗灰色	細い2mm以下の砂粒 長石含む	〃
K4	〃	〃	〃	—	A類	11	2.6	なし	1	橙褐色	精良	〃
K5	〃	〃	〃	1類	A類	9	2.2~3	—	なし	黒灰色	細い2mm以下の砂粒含む	〃
K6	〃	〃	〃	1類	A類	11	2.5~2.8	—	—	淡灰色	精良	良好
K7	〃	丸瓦	〃	—	A類	9	—	1	—	灰白色	やや粗 5mm以下の砂粒 長石含む	〃
K8	〃	軒平瓦	〃	1類	A類	10	2.2~3.3	なし	なし	淡灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英含む	不良
K9	〃	平瓦	〃	2類	A類	9	1.5~3	なし	—	灰白色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石多	良好
K10	〃	〃	〃	1類	A類	11	2.3~2.9	なし	—	〃	やや粗 2mm以下の砂粒 長石多	不良
K11	〃	〃	〃	1類	A類	9	1.6~2.6	2	—	暗灰色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英含む	良好
K12	〃	〃	〃	—	A類	7	2.7~3.2	1	—	〃	やや粗 5mm以下の砂粒 長石多	〃
K13	〃	〃	〃	1類	A類	9	2.9~3.2	1	—	黄橙色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石多	不良
K14	〃	〃	III類	5類	—	7	—	—	—	暗灰色	細い 1mm以下の砂粒 長石多	良好
K15	〃	〃	〃	5類	—	8	—	1	—	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	不良
K16	〃	〃	〃	2類	—	7	—	1	—	灰白色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石多	良好
K17	区画溝	平瓦?	I類	—	A類	12	—	—	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	不良
K18	〃	平瓦	〃	4類	—	8	1.8~2.6	—	なし	〃	粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K19	〃	〃	III類	5類	—	7	—	1	—	〃	やや粗 2mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K20	〃	〃	〃	5類	—	8	—	1	1	黒褐色	粗 4mm以下の砂粒 長石多	〃
K21	〃	〃	〃	5類	—	7	—	1	1	暗灰色	粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K22	〃	〃	〃	5類	—	8	—	1	1	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K23	〃	〃	〃	5類	—	6	—	1	1	明白色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K24	〃	〃	〃	4類	—	7	—	1	なし	黒灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K25	〃	〃	〃	5類	—	9	—	1	1	黒褐色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K26	〃	〃	〃	5類	—	7	—	1	1	暗灰色	粗 5mm以下の砂粒多	〃
K27	〃	〃	〃	5類	—	7	—	1	1	灰色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石多	〃
K28	〃	〃	〃	5類	—	7	—	1	1	橙褐色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K29	〃	〃	〃	5類	—	7	—	1	1	黒灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K30	土壤状炭窯1	軒平瓦	I類	—	A類	9	2.5~3	1	—	灰白色	細い 2mm以下の砂粒 長石多	〃
K31	〃	平瓦	〃	—	A類	9	2	1	—	〃	細い 2mm以下の砂粒含	良好
K32	No3付近	平瓦?	—	2類	3条沈線	—	—	—	—	赤褐色	細い 2mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K33	調査区東半遺物表採地点	丸瓦	I類	—	A類	9	—	1	—	灰色	粗 5mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K34	〃	〃	〃	1類	A類	8	—	1	なし	橙褐色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K35	〃	平瓦	〃	—	A類	10	2.3~3.3	なし	—	褐色	精良	〃
K36	〃	埠	—	—	—	—	—	—	—	黄褐色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K37	瓦廃棄土壌	丸瓦	I類	—	A類3条沈線	11	—	なし	—	灰色	精良	良好
K38	〃	〃	〃	—	A類3条沈線	10	—	なし	なし	灰白色	精良	不良

表 11 瓦類観察表2

番号	出土遺構	種別	成形	凸面		凹面		側面の面取り	端面の面取り	色調	胎土	焼成
				一次調整	2次調整	布目(本/cm)	棹板痕幅(cm)					
K39	瓦廃棄土壙	丸瓦	?	—	A類	8	1.7~2.3	1	—	茶褐色	細い 2mm以下の砂粒 長石含	不良
K40	〃	〃	I類	4類	A類	8	—	2	—	暗灰色	細い 2mm以下の砂粒 長石多	〃
K41	〃	〃	〃	—	A類	9	—	1	1	褐色	細い 2mm以下の砂粒 長石多	〃
K42	〃	〃	〃	—	A類	—	—	なし	—	灰白色	細い 2mm以下の砂粒 長石多	良好
K43	〃	〃	?	?	A類	8	3.5	1	なし	〃	細い 3mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K44	〃	〃	I類	—	A類	8	—	なし	—	〃	細い 2mm以下の砂粒 長石多	良好
K45	〃	〃	II類	1か4	A類	8	—	2	—	〃	細い 2mm以下の砂粒含	不良
K46	〃	平瓦	I類	—	A類	7	—	なし	—	黄灰色	細い 2mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K47	〃	〃	II類	—	A類	10	2.3~3	なし	—	〃	細い 2mm以下の砂粒 長石多	良好
K48	〃	〃	I類	4	—	8	2.3~2.7	1	—	灰白色	細い 2mm以下の砂粒 長石多	〃
K49	〃	軒丸瓦	—	—	A類	—	—	—	—	灰色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K50	〃	〃	—	—	A類	—	—	—	—	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K51	〃	〃	—	—	縦ナデ・A類	8	—	—	—	灰白色	細い 2mm以下の砂粒 長石多	〃
K52	〃	〃	I類	—	縦ナデ	—	—	1	—	暗灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	〃
K53	〃	〃	—	—	横ナデ	—	—	—	—	明灰色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K54	〃	〃	—	—	縦ナデ	9	—	—	—	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	〃
K55	〃	軒平瓦	—	—	A類	9	1.9~3	1	なし	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K56	〃	〃	I類	—	A類	9	2.5~3.3	1	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K57	〃	〃	〃	—	施文有・A類	9	1.8~2.8	なし	なし	〃	やや粗 2mm以下の砂粒多	不良
K58	〃	〃	〃	—	A類	11	2.3~3.6	1	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K59	〃	〃	I類	1	A類	8	2.4~3.2	なし	なし	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒多	良好
K60	〃	〃	〃	—	A類	8	2.4~3.4	1	なし	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒多	不良
K61	〃	〃	〃	1	A類	8	2~3.8	1	なし	黄灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K62	〃	〃	〃	—	A類	8	3~3.3	なし	なし	暗灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	良好
K63	〃	〃	〃	—	A類	7	2~3	1	なし	褐色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K64	〃	〃	〃	—	A類	9	1.8~3.3	なし	なし	灰白色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K65	〃	〃	〃	1	A類	7	2.7~2.9	1	なし	黄灰色	粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K66	〃	〃	〃	—	A類	10	2.7~3	1	なし	灰白色	粗 5mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K67	〃	〃	〃	—	A類	8	2.4~2.9	—	なし	灰褐色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K68	〃	〃	〃	1	A類	9	2.6~3	—	なし	褐色	粗 2mm以下の砂粒 長石多	〃
K69	〃	〃	〃	?	A類	8	2.6~2.9	—	なし	〃	粗 3mm以下の砂粒多	〃
K70	〃	〃	〃	1	A類	9	3	—	なし	灰白色	粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K71	〃	〃	〃	1	A類	9	2.6~3.2	なし	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒多	〃
K72	〃	〃	〃	1か3	A類	11	2.2~3.7	1	なし	〃	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K73	〃	〃	〃	—	A類	13	3.1~3.3	なし	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K74	〃	〃	〃	—	A類	12	2.6	なし	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K75	〃	〃	〃	—	A類	10	2~3.2	なし	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K76	〃	〃	〃	—	A類	10	3.8	なし	なし	〃	やや粗 2mm以下の砂粒 長石多	不良

表12 瓦類観察表3

番号	出土遺構	種別	成形	凸面		凹面		側面の面取り	端面の面取り	色調	胎土	焼成
				一次調整	2次調整	布目(本/cm)	棒板痕幅(cm)					
K77	瓦廢棄土壌	軒平瓦	I類	—	A類	8	3	—	なし	黄灰色	粗 3mm以下の砂粒多	不良
K78	〃	丸瓦	〃	1	A類	9	—	1	—	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒含	良好
K79	〃	〃	〃	1	A類	8	—	1	なし	〃	やや粗 2mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K80	〃	〃	〃	1	A類	8	—	1	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K81	〃	〃	〃	1	A類	10	—	1	なし	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K82	〃	〃	〃	1	A類	9	—	1	なし	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K83	〃	〃	〃	1	A類	9	—	1	なし	黒灰色	粗 5mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K84	〃	〃	〃	1	A類	9	—	1	なし	灰色	やや粗 2mm以下の砂粒多	良好
K85	〃	〃	〃	1	A類	10	—	1	—	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K86	〃	〃	〃	1	A類	8	—	1	なし	灰白色	粗 5mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K87	〃	〃	〃	1	A類	9	—	1	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K88	〃	〃	〃	1	A類	10	—	1	なし	灰色	粗 5mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K89	〃	〃	〃	1	A類	8	—	1	なし	淡灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K90	〃	〃	〃	1	A類	9	—	1	—	灰白色	やや粗 2mm以下の砂粒多	不良
K91	〃	〃	〃	—	A類	8	—	1	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒多	〃
K92	〃	〃	〃	—	A類	8	—	1	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒多	〃
K93	〃	〃	〃	—	A類	9	—	1	—	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	良好
K94	〃	〃	〃	—	A類	8	—	1	—	〃	やや粗 3mm以下の砂粒多	〃
K95	〃	〃	〃	—	A類	9	—	1	なし	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒多	不良
K96	〃	〃	〃	1	A類	10	—	1	なし	〃	やや粗 4mm以下の砂粒多	〃
K97	〃	〃	〃	—	A類	10	—	1	なし	灰色	やや粗 2mm以下の砂粒 石英多	良好
K98	〃	〃	〃	—	A類	10	—	1	なし	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒多	不良
K99	〃	〃	〃	—	A類	8	—	1	なし	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒多	良好
K100	〃	〃	〃	1	A類	11	—	なし	なし	暗灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	〃
K101	〃	〃	〃	1	A類	11	—	1	—	〃	粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K102	〃	〃	〃	1	A類	9	—	1	—	〃	粗 5mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K103	〃	〃	〃	1	A類	10	—	1	—	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K104	〃	〃	〃	1	A類	11	—	1	なし	灰色	細い 2mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K105	〃	平瓦	〃	1	—	9	1.4~2.5	なし	なし	黒色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K106	〃	〃	〃	1	A類	9	2.5~3.2	なし	なし	黄灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K107	〃	〃	〃	1	A類	10	2.5~2.7	なし	なし	灰色	粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K108	〃	〃	〃	1	A類	11	2~3.6	なし	なし	〃	粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K109	〃	〃	〃	1	A類	8	2.5	なし	なし	褐色	粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K110	〃	〃	〃	1	A類	11	2.5~3	なし	—	灰色	粗 3mm以下の砂粒含	良好
K111	〃	〃	〃	1	A類	8	1.8~2.7	なし	なし	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K112	〃	〃	〃	1	A類	11	2.2~2.8	なし	なし	〃	粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K113	〃	〃	〃	1	A類	9	2.3~2.8	なし	なし	灰色	粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K114	〃	〃	〃	1	A類	10	2.3~3.2	なし	なし	灰白色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	不良

表 13 瓦類観察表 4

番号	出土遺構	種別	成形	凸面		凹面		側面の面取り	端面の面取り	色調	胎土	焼成
				一次調整	2次調整	布目(本/cm)	棹板痕幅(cm)					
K115	瓦廃棄土壌	平瓦	I	—	A類	7	2.1~2.8	なし	なし	青灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K116	〃	〃	〃	1	A類	9	?	なし	1	〃	やや粗 3mm以下の砂粒含	〃
K117	〃	〃	〃	1	A類	9	2~3.2	なし	なし	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	〃
K118	〃	〃	〃	—	A類	10	2.1~3.2	なし	—	青灰色	やや粗 3mm以下の砂粒含	〃
K119	〃	〃	〃	1	A類	9	2.1~3	なし	なし	灰色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K120	〃	〃	〃	—	A類	10	2.1~2.9	なし	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒含	〃
K121	〃	〃	〃	1	A類	9	1.9~3.5	なし	なし	黄灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	不良
K122	〃	〃	〃	—	A類	10	2.5~3.3	なし	なし	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	良好
K123	〃	〃	〃	—	A類	10	3.2	なし	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒含	〃
K124	〃	〃	〃	1	A類	11	1.8~2.7	なし	—	黄橙色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K125	〃	〃	〃	—	A類	11	2.3~4	なし	なし	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K126	〃	〃	〃	1	A類	9	2~2.7	1	なし	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒含	良好
K127	〃	〃	〃	2	A類	10	2.4~2.9	3	なし	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒含	不良
K128	〃	〃	〃	—	A類	10	1.7~2.5	1	※なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒含	良好
K129	〃	〃	〃	1	A類	9	2.8	1	なし	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒含	〃
K130	〃	〃	〃	—	A類	7	2.5~3.4	1	なし	黄灰色	やや粗 3mm以下の砂粒含	不良
K131	〃	〃	〃	—	A類	9	2.6~3	1	なし	黑灰色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石多	〃
K132	〃	〃	〃	—	A類	8	2.8~3.3	2	なし	黄橙色	やや粗 3mm以下の砂粒含	〃
K133	〃	〃	〃	2	A類	9	1.7~3.2	なし	なし	灰色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石多	良好
K134	〃	〃	〃	2	A類	8	3.2	なし	—	褐色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石・石英多	不良
K135	〃	〃	〃	2	A類	9	2.8~2.9	なし	なし	灰色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K136	〃	〃	〃	2	A類	9	2.2~2.7	1	なし	〃	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K137	〃	〃	〃	3	A類	6	2.4~2.8	なし	—	褐色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石多	不良
K138	〃	〃	〃	3	A類	9	1.9~2.8	なし	—	灰白色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K139	〃	〃	〃	3	A類	9	2~2.6	なし	—	黄灰色	やや粗 4mm以下の砂粒 長石多	〃
K140	〃	軒丸瓦	〃	—	縦ナデ	7	—	1	—	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	良好
K141	〃	丸瓦	〃	—	A類	7	—	1	—	〃	やや粗 3mm以下の砂粒含	不良
K142	〃	平瓦	〃	1	—	6	—	—	なし	灰色	やや粗 3mm以下の砂粒含	良好
K143	〃	〃	〃	—	A類	9	2.5~3	なし	—	灰白色	やや粗 2mm以下の砂粒含	不良
K144	〃	〃	〃	—	A類	7	2~2.2	—	—	〃	やや粗 3mm以下の砂粒含	〃
K145	〃	〃	III	4	—	6	—	3	なし	黒褐色	やや粗 3mm以下の砂粒含	〃
K146	〃	〃	〃	4	—	11	—	—	1	暗褐色	やや粗 3mm以下の砂粒 長石・石英多	〃
K147	〃	丸瓦	I	4	A類	7	—	なし	なし	灰色	粗 2mm以下の砂粒 長石含	良好
K148	〃	文字瓦	〃	—	A類	9	2.2~2.8	なし	なし	灰白色	やや粗 2mm以下の砂粒 長石多	不良
K149	〃	文字瓦	〃	1	A類	9	2.3~3	なし	—	〃	やや粗 2mm以下の砂粒 長石多	〃



第27図版 調査状況（東から）



第28図版 瓦廃棄土壌断面(北から)



第29図版 区画溝（南から）



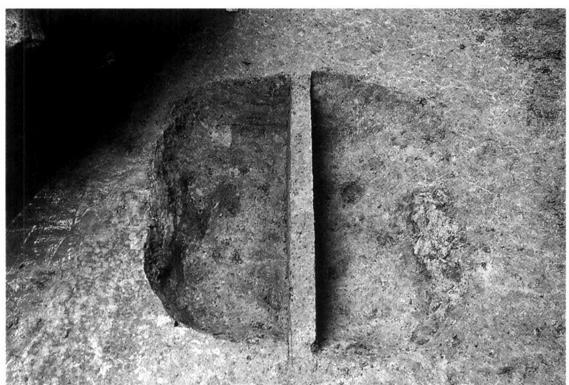
第30図版 区画溝瓦出土状況（南東から）



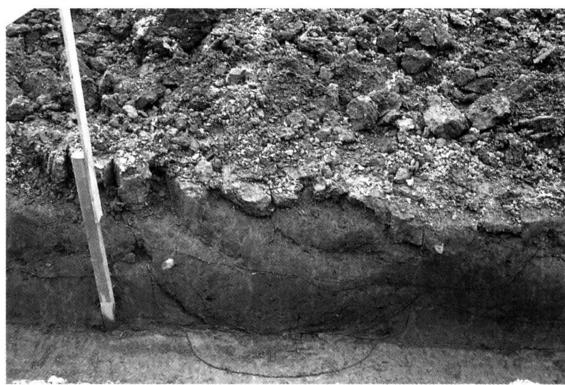
第31図版 土壌状炭窯 1（南から）



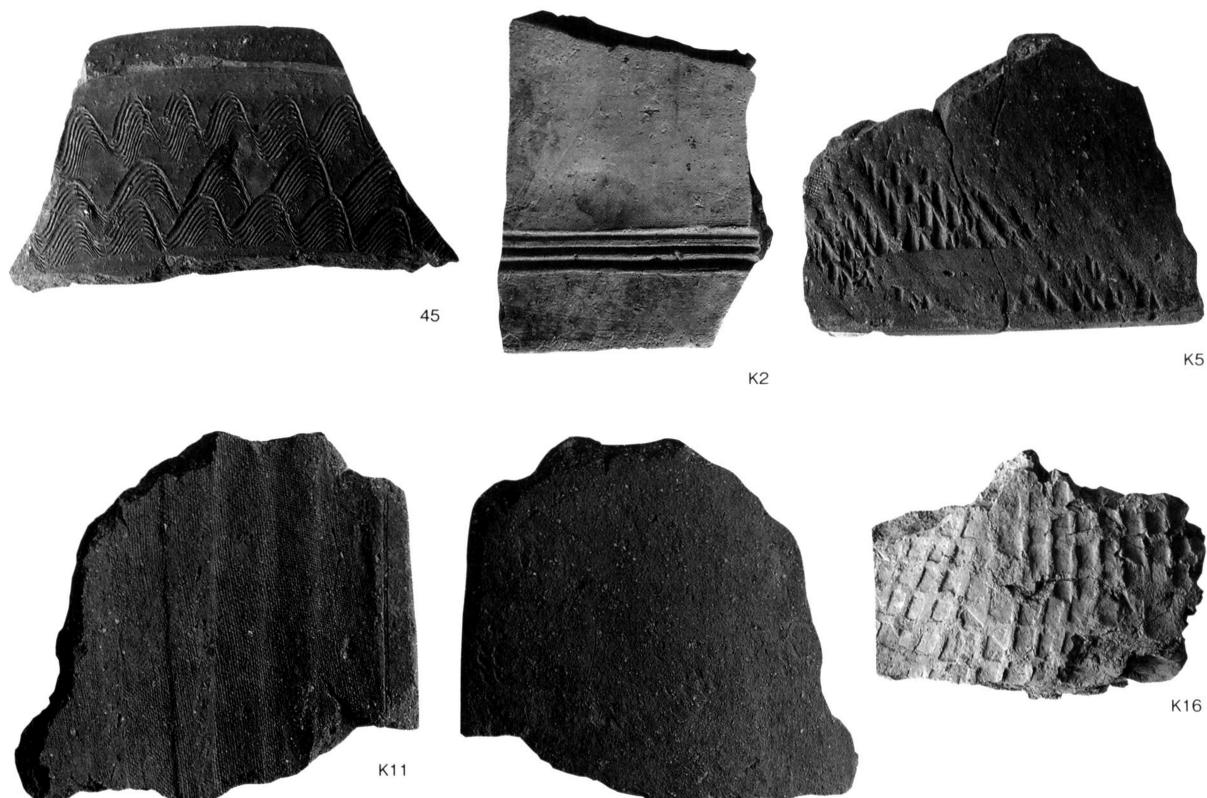
第32図版 土壌状炭窯 1 断面（南から）



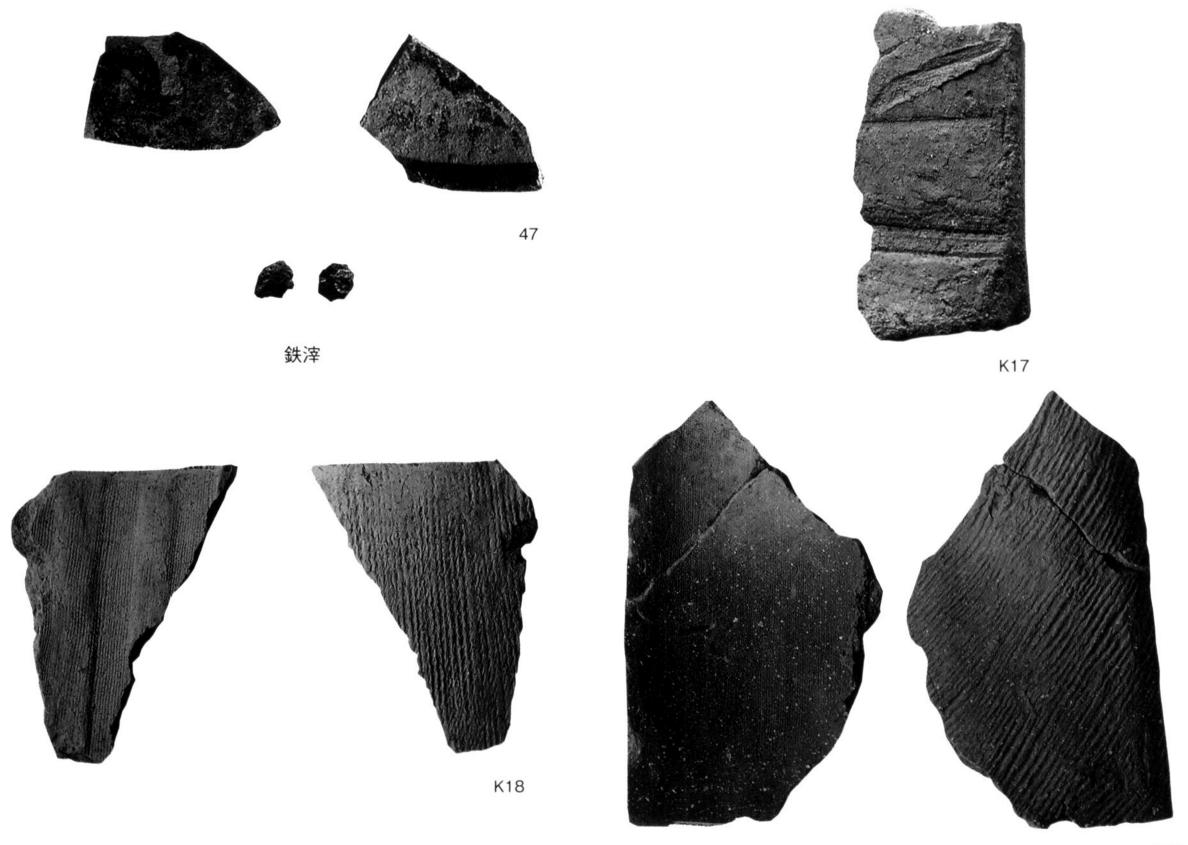
第33図版 土壌状炭窯 2（西から）



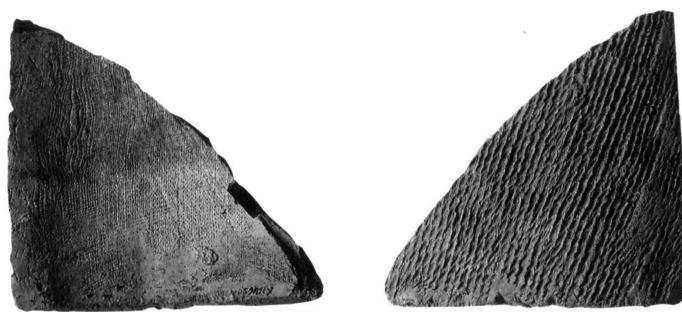
第34図版 土壌状炭窯 3 断面（北から）



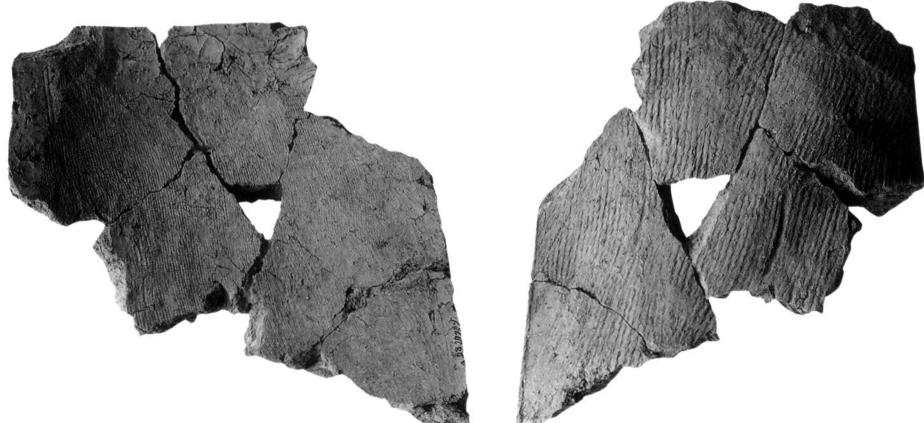
第35図版 低位部1 出土遺物



第36図版 区画溝 出土遺物1



K21



K22



K23



K26

K29

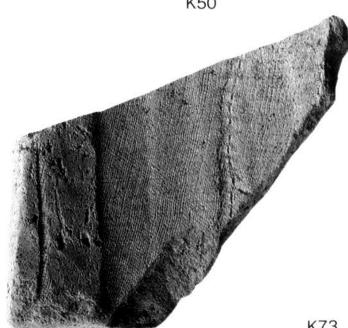
第37図版 区画溝 出土遺物2



K49



K50



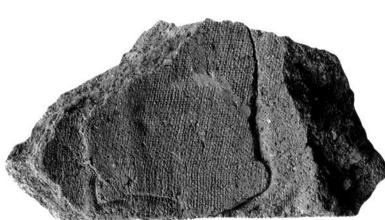
K73

K57



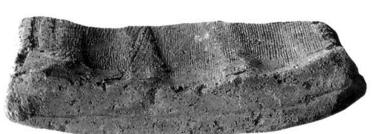
K59

K56



K67

K60



K74

K62



K67



K37



K38



K39



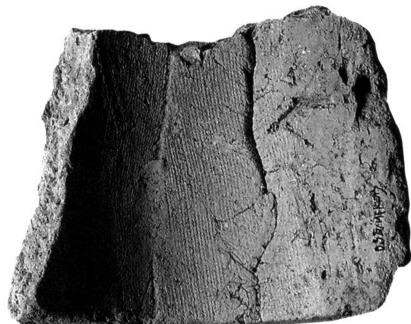
K81



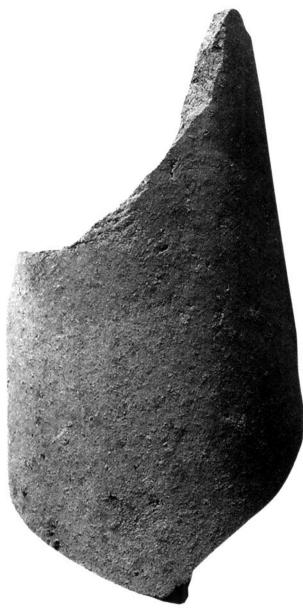
K44



K83



K91

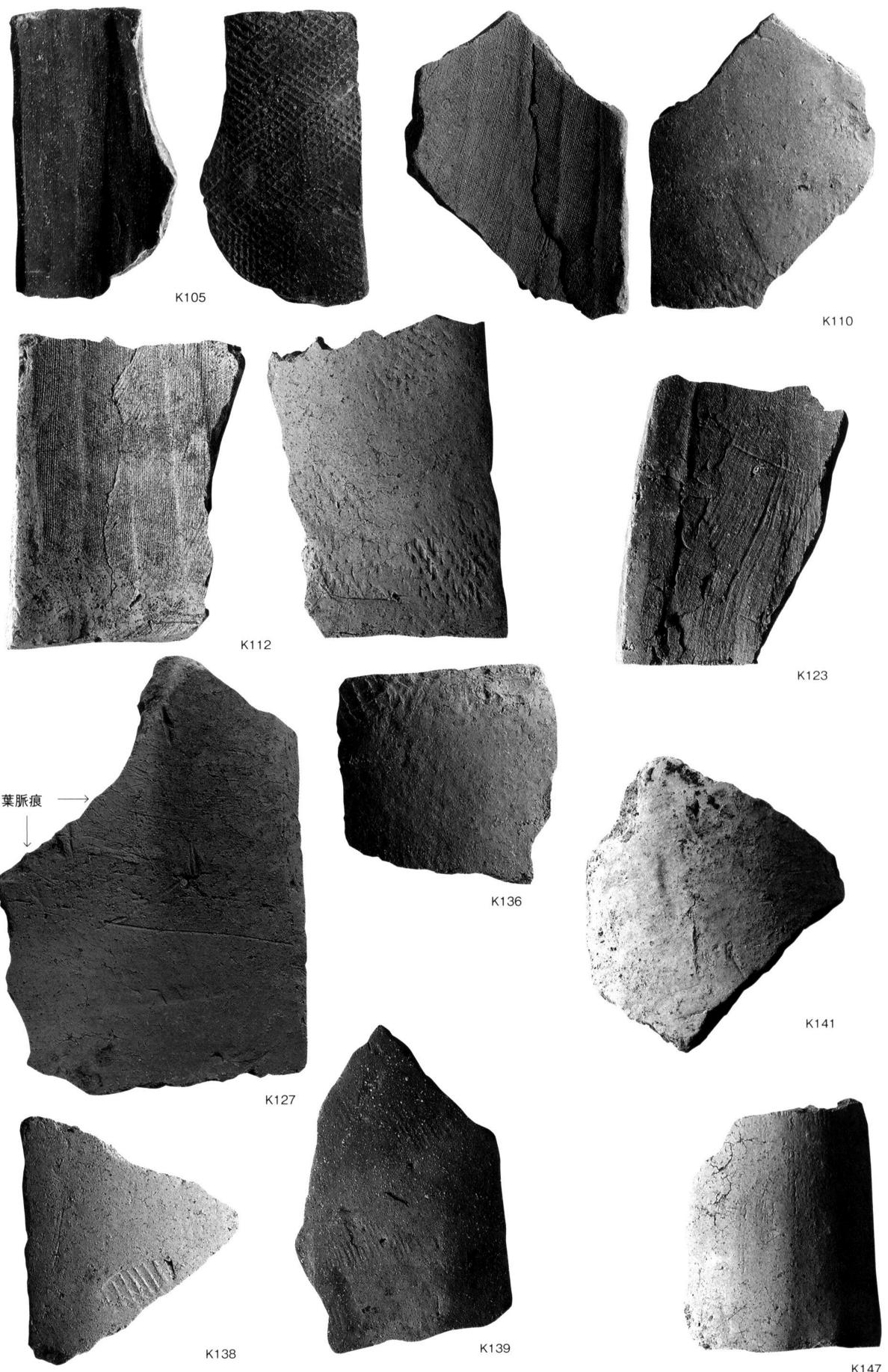


K94



K104

第39図版 瓦廃棄土壌 出土遺物2



第40図版 瓦廃棄土壤 出土遺物3

報告書抄録

ふりがな	だいもんじいせき (かやでらはいじ)						
書名	大文字遺跡 (栢寺廃寺)						
副書名	市道拡幅工事に伴う確認調査						
巻次							
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	20						
編著者名	松尾洋平 狩野久 (財)元興寺文化財研究所 山田卓司						
編集機関	総社市教育委員会						
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL 0866-92-8363						
発行機関	総社市教育委員会						
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL 0866-92-8363						
発行年月日	西暦 2009年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	岡山県 総社市 南溝手 292-2	33-208	34度 41分 5.9秒	133度 46分 40.9秒	平成20年 4月9日 ~4月16日	70m ²	市道拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大文字遺跡 (栢寺廃寺)	古代寺院	古代	寺域の区画溝 土壙状炭窯 柱穴など	須恵器 土師器 瓦類	寺域の区画溝を検出。 瓦廃棄土壙から白鳳期の古代瓦が 多量に出土。		

総社市埋蔵文化財発掘調査報告20

大文字遺跡（栢寺廃寺）

市道拡幅工事に伴う確認調査

2009年3月24日 印刷

2009年3月24日 発行

編集発行 岡山県総社市教育委員会
岡山県総社市中央一丁目1番1号

印 刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2

